

間出現し福德の王臣も絶へざりしかば政道も曲る事なし。萬民も直かりし故に小科を對治せんがために。三皇五帝三王三聖等出現して墳典を作りて代を治す。世しばらく治りたりしかども漸漸にすへになるまゝに。聖賢も出現せず福德の人もすくなければ。三災は多大にして七難先代に超過せしかば外典及がたし。其時治を代へて内典を用ひて世を治す。隨つて世且はれさまる。されども又世末になるまゝに人の惡は日に増長し。政道は日月に衰減するかの故に又三災七難先よりいよいよ増長して小乗戒等の力ラ驗なかりしかば其時治をかへて小乗の戒等を止めて大乘を用ゆ。大乘又叶へば法華經の圓頓の大戒壇を叡山に建立して代を治たり。所謂傳教大師日本三所の小乗戒並に華嚴三論法相の三大乗戒を破失せし是也。此大師は六宗をせめ落させ給ひのみならず禪宗をも習極。剩日本國にいまだひろまらざりし法華宗眞言宗をも勘出して勝劣鏡をかけ顯密の差別黑白也。然ども世間の疑散じがたかりしかば。去延曆年中に御入唐漢土の人人も他事には賢かりしかども。法華經大日經天台眞言二宗の勝劣淺深は分明に知らせ給はざりしかば。御歸朝の後本の御存知の如く妙樂大師の記の十の。不空三藏の改悔の言を合光がか

たりしを引載せて。天台勝れ眞言劣なる明證を依憑集に定給。剩眞言宗の宗の一字を削給。其故は善無畏金剛智不空の三人一行阿闍梨をたばらかし。て本はなき大日經に天台己證の一念三千の法門を盗入して。人の珍寶を我が有とせる大誑惑の者也と心得給へり。例せば澄觀法師が天台大師の十法成乘の觀法を華嚴に盗入して。還つて天台宗を末教と下せしが如しと御存知ありて。宗の一字を削りて叡山は唯七宗たるべしと云云。而を弘法大師と申。天下第一の自讚毀他の大妄語の人。教大師御入滅の後對論なくして公家をかすめたてまつりて八宗と申立テぬ。然ども本師の跡を紹繼する人人は叡山は唯七宗にてころあるべきに。教大師の第三の弟子慈覺大師と叡山第一の座主義眞和尚の半弟子智證大師と。此二人は漢土に渡り給し時日本國にて一國の大争と諍論せし事なれば。天台眞言の碩學等に値給。毎に勝劣淺深を尋給。然に其時の明匠等も或は眞言宗勝れ或は天台宗勝れ。或は二宗齊等或は理同事異といへども。俱に慥の證文をば出さず。二宗の學者等併胸臆の言也。然に慈覺大師は學極めずして歸朝して疏十四卷を作れり。所謂金剛頂經の疏七卷蘇悉地經の疏七卷也。此疏の爲體は法華經と大日經等の三部經

とは理、同、事、異等云云。此疏の心は大日經の疏と義釋との心を出すがなを不審あきらめがたかりけるかの故に。本尊の御前に疏を指置て此疏佛意に叶へりやいなやと祈せし處に。夢に日輪を射ると云云。うちをどろきて吉夢也。眞言勝たる事疑なしとれもひて宣言を申下す。日本國に弘通せんとし給ししがほどなく疫病やみて。四ヶ月と申せしかば跡もなくうせ給ぬ。而智證大師は慈覺の御爲にも御弟子なりしかば。遺言に任て宣言を申下給所謂眞言法華齊等也。譬は鳥の二の翼人の兩目の如し。又叡山も八宗なるべしと云云。此兩人は身は叡山の雲の上に臥といへども心は東寺里中の塵にまじはる。本師の遺跡を紹繼する様にて還て聖人の正義を忽諸し給へり。法華經の於諸經中最在其上の上の字を。うちかへして大日經の下に置先大師の怨敵となるのみならず。存外に釋迦多寶十方分身大日如來等の諸佛の讎敵となり給る。されば慈覺大師の夢に日輪を射と見しは是也。佛法の大科此よりはとまる日本國亡國となるべき先兆也。棟梁たる法華經既に大日經の椽栝となりぬ。王法も下剋上して王位も臣下に隨ふべかりしを。其時又一類の學者有て堅く此法門を諍論せし上。座主も兩方を兼て事いまだされざりしかば。世

も忽にはろびす有ける歟。例せば外典云々大國には諍臣七人 中國には五人 小國には三人 諍論すれば。假令政道に謬誤出來すれども國不破。乃至家に諫子あれば不義にれちすと申すが如し。佛家も又如是。天台眞言の勝劣淺深事されざりしかば少少の災難は出來せしかども。青天にも捨られず黃地にも犯されず一國の内の事にてありし程に。人王七十七代後白河の法皇の御宇に當りて天台座主、明雲、傳教大師の止觀院、法華經の三部を捨てて。慈覺大師の總持院、大日經の三部に付給。天台山は名計にて眞言の山になり法華經の所領は大日經の地となる。天台と眞言と座主と大衆と敵對あるべき序也。國又王と臣と諍論して王は臣に隨べき序也。一國亂れて他國に破らるべき序也。然らば明雲は義仲に殺されて。院も清盛にしたがひられ給。然れども公家も叡山も共に此の故としらずして世靜ならずする程に。災難次第に增長して人王八十二代隱岐の法皇の御宇に至て。一災起れば二災起と申して禪宗念佛宗起合ぬ。善導房は法華經は末代には千中無一とかき法然は捨閉閣抛と云云。禪宗は法華經を失はんがために教外別傳不立文字とのしる。此三の大惡法鼻を竝て一國に出現せしが故に。此國すでに梵釋二天日月四玉に捨ら

れ奉り守護ノ善神も還て大怨敵とならせ給フ。然ば相傳の所從に責隨へられて主上上皇共に夷島に放れ給し御返りなくしてむなしき島の塵となり給フ。所詮實經の所領を奪取して權經眞言の知行となせし上。日本國の萬民等禪宗念佛宗の惡法を用ひし故に。天下第一先代未聞の下剋上出來せり。而に相州は謗法の人ならぬ上文武きはめ盡せし人なれば。天許國主となす。隨つて世且く靜なりき。然而又先に王法を失し眞言漸く關東に落す。下る存外に崇重せらるる故に。鎌倉又還つて大謗法一闡提の官僧禪僧念佛僧の檀那と成て。新寺を建立して舊寺を捨つる故に。天神は眼を瞋して此國を睨め地神は憤を含して身を震ふ。長星は一天に覆ひ地震は四海を動かす。余此等の災天に驚きて粗内典五七外典三千等を引見に先代にも希なる天變地天也。然而儒者家には記せざれば知事なし。佛法は自迷なればこゝろへず。此災天は常の政道の相違と世間の謬誤より出來せるにあらず。定て佛法より事起る歟と勘へなしぬ。先大地震に付て去正嘉元年に書を一巻注したりしを故最明寺の入道殿に奉る。御尋もなく御用もなかりしかば。國主の御用なき法師なればあやまちたりとも科あらじとやれもひけん。念佛者並に檀那等又さるべき人人も同意し

たるとが聞へし。夜中に日蓮が小庵に數千人押寄せて殺害せんとせしかども。いかんがしたりけん其の夜の害もまぬかれぬ。然ども心を合たる事なれば。寄たる者も科なくて。大事の政道を破る。日蓮が生たる不思議なりとて伊豆ノ國へ流ぬ。されば人のあまりにくきには我がほろぶべきとがをもかへりみざる歟。御式目をも破らるる歟。御起請文を見に梵釋四天天照太神正八幡等を書きのせてまつる。余存外の法門を申さば子細を辨へられずば。日本國の御歸依の僧等に召合はれて其になを事ゆかすば漢土月氏までも尋らるべし。其に叶はずば子細ありなんとて且くまたるべし。子細も辨ぬ人人が身のほろぶべきを指をきて大事の起請を破らるる事心へられず。自讚には似れども本文に任せて申す。余は日本國の人人には上は天子より下は萬民にいたるまで三の故あり。一には父母也二には師匠也三には主君の御使也。經云。即如來使又云。眼目也。又云。日月也。章安大師云。爲彼除惡。則是彼親等云云。而謗法一闡提國敵の法師原が讒言を用いて。其義を不辨。左右なく大事たる政道を曲らるるは。わざとわざはひをまねがるる歟無墓無墓。然るに事しづまりぬれば。科なき事は恥かしき歟の故に。ほぞなく召返さ

れしかども。故最明寺の入道殿も又早、かくれさせ給ぬ。當御時に成りて或は身に疵をかふり或は弟子を殺れ或は所所を追、或はやどをせめしかば。一日片時も地上に栖へき便りなし。是に付ても佛は一切世間多怨難信と説き置給。諸菩薩は我不愛身命但惜無上道と誓へり。加刀杖瓦石數數見擲出の文に任せて流罪せられ刀のさきにかかりなば。法華經一部よみまいらせたるにころとれもひきりて。わざと不輕菩薩の如く覺徳比丘の様に。龍樹菩薩提婆菩薩 佛陀密多 師子尊者の如く彌強盛に申しはる。今度法華經の大怨敵を見て經文の如く父母師匠朝敵宿世の敵の如く。散散に責るならば。定て萬人もいかり國主も讒言を收めて流罪し頸にも及ばんずらん。其時佛前にして誓状せし梵釋日月四天の願をもはたさせてまつり。法華經の行者をあだまんものを須臾ものがさじと起請せしを身にあてて心みん。釋尊多寶十方分身、諸佛の或は共に宿し或は衣を覆はれ或は守護せんと。ねんごろに説せ給しをも。實歎虚言歎と知りて信心をも增長せんと退轉なくはげみし程に。案にたがはず去文永八年九月十二日に都て一分の科もなくして佐土國へ流罪せらる。外には遠流と聞しかども内には頸を切と定めぬ。余又兼て此事を推せし

故に弟子に向つて云、我願既に遂げぬ悦身に餘れり。人身は受けたくして破れやすし。過去遠劫より由なき事には失しかども法華經のために命をすてたる事はなし。我頸を刎られて師子尊者が絶たる跡を繼ぎ。天台傳教の功にも超へ付法藏の二十五人に一を加へて二十六人となり。不輕菩薩の行にも越へて釋迦多寶十方の諸佛にいかげせんとなげかせまいらせんと思し故に。言をもれしす已前にありし事後に有べき事の様を平ノ金吾に申し含ぬ。此語しげければ委細にはかかず。抑日本國の主となりて萬事を心に任せ給へり。何事も兩方を召合せてころ勝負を決し御成敗をなす人の。いかなれば日蓮一人に限て諸僧等に召合せずして大科に行はるらん。是偏にただ事にあらず。たとひ日蓮は大科の者なりとも國は安穩なるべからず。御式目を見んに五十一箇條を立てて終りに起請文を書き載せたり。第一第二は神事佛事乃至五十一等云云。神事佛事の肝要たる法華經を手ににぎれる者を。讒人等に召合せられずして彼等が申すまゝに頸に及ぶ。然ば他事の中にも此起請文に相違する政道は有らめども此は第一、大事也。日蓮がにくさに國をかへ身を失はんとせらるる歎。魯ノ哀公が忘事の第一なる事を記せらるるには移宅に妻をわする

と云云。孔子、云、身をわする者あり國主と成りて政道を曲る是也云云。將又國主は此事を委細には知らせ給はざる歟。いかに知らせ給はずとのべらるるも。法華經の大怨敵と成り給ぬる重科は脱るべしや。多寶十方の諸佛の御前にして教主釋尊、申、口として末代當世の事を説せ給しかば諸菩薩記云、惡鬼入其身、罵詈毀辱、我乃至數數見、擯出等云云。又四佛釋尊の最勝王經云、由愛敬惡人、治罰善人、故乃至他方、怨賊來、國人遭喪亂等云云。たとひ日蓮をば輕賤せさせ給つとも教主釋尊の金言多寶十方の諸佛の證明は空かるべからず。一切の眞言師禪宗念佛者等の謗法の惡比丘をば前より御歸依ありしかども。其大科を知らせ給はねば少し天も許し善神もすてざりけるにや。而して日蓮が出現して一切の人を恐す身命を捨てて指申せば。賢なる國主ならば子細を聞き給べきに。聞きもせず用ひられざるだにも不思議なるに。剩へ頸に及ばむとせし事は存外の次第也。然ば大惡人を用ふる大科正法の大善人が耻辱する大罪。二惡鼻を並へて此國に出現せり。譬ば脩羅を恭敬し日天を射奉るが如し。故に前代未聞の大事此國に起るなり。是又先例なきにあらざる。夏、桀王は龍蓬が頭を刎ね般、紂王は比干が胸をさき。二世王は李斯を殺し、優陀延王は

寶頭盧尊者を蔑如し檀彌羅王は師子尊者の頸をきる。武王は慧遠法師と諍論し憲宗王は白居易を遠流し徽宗皇帝は法道三藏の面に火印をさす。此等は皆諫曉を用ひざるのみならず還つて怨を成せし人人。現世には國を亡し身を失ひ後生には惡道に墮つ。是又人をあなづり讒言を納りて理を盡ざりし故也。而して去文永十一年二月に佐土、國より召返されて、同四月の八日に平ノ金吾對面して有し時。理不盡の御勘氣の由委細に申し含ぬ。又恨らくは此國すでに他國に破れん事のあさましきと歎き申せしかば。余吾が云、何の比か大蒙古は寄候べきと問しかば。經文には分明に年月を指したる事はなければ。天の御氣色を拜見し奉るに。以の外に此國を睨させ給か。今年は一定寄ぬと覺ふ若寄するならば一人も面を向つ者あるべからず。此又天の責也。日蓮をばわとのばら(和殿座)が用ぬ者なれば力及ばず穴賢穴賢。眞言師等に調伏行せ給べからず若行するほどならばいよいよ惡かるべき由申付てさて歸りてありしに。上下共に先の如く用ひざりげに有上。本より存知せり國恩を報せんがために三度までは諫曉すべし。用はずば山林に身を隠さんとれもひし也。又上古の本文にも二度のいさめ用はずば去といふ。本文にまかせて且らく山中に罷り入

ぬ。其上は國主の用給はざらん其已下に法門申して何かせん。申したりとも國もたすかるまじ人も又佛になるべしともればへず。又念佛、無間地獄阿彌陀經を讀べからずと申す事も私の言にはあらず。夫彌陀念佛と申すは源と釋迦如來の五十餘年の説法の内。前四十餘年の内の阿彌陀經等の三部經より出來せり。然ども如來の金言なれば定て眞實にてころあるらめと信する處に。後八年の法華經の序分たる無量義經に佛、法華經を説せ給はんために。先づ四十餘年の經經並に年紀等を具に數へあけて未顯眞實乃至終不得成無上菩提と。若干の經經並に法門を唯一言に打消給事。譬ば大水の小火をけし大風の衆の草木の露を落すが如し。然後に正宗、法華經の第一卷に至て。世尊法久後要當説眞實又云、正直捨方便但説無上道と説給。譬ば闇夜に大月輪の出現し大塔立後足代を切り捨が如し。然、後實義を定云、今此三界、皆是我有其中、衆生悉是吾子而、今此處、多諸患難、唯我一人能爲ニ救護。雖ニ復教詔、而不ニ信受。乃至見下有讀誦書持經者、上輕賤憎嫉而懷結恨。其人命終入阿鼻獄等云云。經文の次第普通の性相の法には似ず。常には五逆七逆の罪人ころ阿鼻地獄とは定て候に此はさにては候はず。在世滅後一切衆生、阿彌陀經等の四十餘

年の經經を堅く執して法華經へうつらざらんと。たとひ法華經へ入るとも本執を捨ずして彼彼の經經を法華經に並て修行せん人と。又自執の經經を法華經に勝たりといはん人と。法華經を法の如く修行すとも法華經の行者を恥辱せん者と。此等の諸人を指つめて其人命終入阿鼻獄と定させ給し也。此事はただ釋迦一佛の仰なりとも。外道にあらずば疑ふべきにてはあらねども。已今當の諸經の説に色をかへて重き事をあらはさんかため。寶淨世界の多寶如來は自はるはる來り給て證人とならせ給。釋迦如來の先判たる大日經阿彌陀經念佛等を堅く執して。後の法華經へ入らざらむ人人は入阿鼻獄は一定也と證明し。又阿彌陀佛等の十方の諸佛は各各、國國を捨てて靈山虛空會に詣給。寶樹下に坐して廣長舌を出し大梵天に付給無量無邊の虹の虛空に立たらんが如し。心は四十餘年の中の觀經阿彌陀經悲華經等に。法藏比丘等の諸菩薩四十八願等を發して凡夫を九品の淨土へ來迎せんと説事は。且、法華經已前のやすめ言也。實には彼彼の經經の文の如く十方西方への來迎はあるべからず。實とれもふことなかれ。釋迦佛の今説給が如し。實には釋迦多寶十方諸佛、壽量品の肝要たる南無妙法蓮華經の五字を信せしめんが爲也と出

給う廣長舌也。我等と釋迦佛とは同程の佛也。釋迦佛は天月の如し我等は水中の影ノ月也。釋迦佛の本土は實には娑婆世界也。天月動給はずば我等もうつるべからず。此土に居住して法華經の行者を守護せん事。臣下が主上を仰奉らんが如く父母の一子を愛するが如くならんと出給う舌也。其時阿彌陀佛の一二の弟子觀音勢至等は阿彌陀佛の鹽梅也。雙翼也。左右の臣也。兩目の如し。然而極樂世界よりはるばると御供し奉りたりしが。無量義經の時佛の阿彌陀經等の四十八願等は未顯眞實。乃至法華經にて一名阿彌陀と名をあげて此等の法門は眞實ならずと説給しかば。實とも覺へざりしに。阿彌陀佛正く來て合點し給しをうち見て。さては我等が念佛者等を九品の淨土へ來迎の蓮臺と合掌の印とは虚しかりけりと聞きて。さては我等も本土に還りて何かせんとて八萬二萬の菩薩のうちに入り。或は觀音品に遊於娑婆世界と申して。此土の法華經の行者を守護せんとねんごろに申せしかば。日本國より近き一閻浮提の内南方補陀落山と申す小所を釋迦佛より給て宿所と定給ふ。阿彌陀佛は左右の臣下たる觀音勢至に捨られられて西方世界へは還り給はず。此世界に留りて法華經の行者を守護せんとありしかば。此世界の內欲界第四の兜率天。彌勒菩薩の所領の内。四十九院の一院を給て。阿彌陀院と額を打つてたはするところうけ給はれ。其上阿彌陀經には佛舍利弗に對して凡夫の往生すべき様を説給ふ。舍利弗舍利弗又舍利弗と二十餘處までいくばくもなき經によび給しはかまびすしかりし事か。然ども四紙の一卷が内すべて舍利弗等の諸聲聞の往生成佛許さず。法華經に來りてころ。始て華光如來。光明如來とは記せられ給し。一閻浮提第一の大智者たる舍利弗淨土の三部經にて往生成佛の跡をけづる。まして末代、牛羊の如なる男女彼の彼の經にて生死を離れんや。此由を辨へざる末代の學者等並に法華經を修行する初心の人人。かたじけなく阿彌陀經を讀み念佛を申して或は法華經に鼻を並べ。或は後に此を讀みて法華經の肝心とし。功德を阿彌陀經等にあつらへて西方へ回向し往生せんと思ふは。譬へば飛龍が驢馬を乗物とし師子が野干をたのみたる歟。將又日輪出現の後。の衆星の光。大雨の盛時の小露也。故に教大師云。賜て白牛朝不用三車得家業。タニ何須除糞故。經云。正直捨方便。但説無上道。又云。日出星隱。見巧知拙云云。法華經出現の後は已今當の諸經の捨らるる事は勿論也。たとひ修行すとも法華經の所從にてころあるべきに。今の日本國の人人道綽が

未有一人得者。善導が千中無一。慧心が往生要集の序。永觀が十因。法然が捨閉閣拋等を堅く信じて。或は法華經を抛て一向念佛を申す者もあり。或は念佛を本として助に法華經を持者もあり。或は彌陀念佛と法華經とを鼻を並へて左右に念じて二行と行する者もあり。或は念佛と法華經と一法二名也と思て行する者もあり。此等は皆教主釋尊の御屋敷の内に居して。師主をば指し置奉りて阿彌陀堂を釋迦如來の御所領の内に毎國毎郷毎家家竝立て。或は一萬二萬或は七萬返或は一生の間一向に修行して主師親をわすれたるだに不思議なるに。剩へ親父たる教主釋尊の御誕生御入滅の兩日を奪取て。十五日は阿彌陀佛の日。八日は藥師佛の日等云云。一佛誕生の兩日を東西二佛の死生の日となせり。是豈不孝の者にあらずや。逆路七逆の者にあらずや。每人此重科有りて。しかも毎人我身は科なしとれもへり無慚無愧の一闍提人也。法華經の第二卷に主と親と師との三大事を説給へり。一經の肝心がかし。其經文云。今此三界皆是我有。其中衆生悉是吾子。而今此處多諸患難。唯我一人能爲救護等云云。又此經に背者を文に説て云。雖復教詔而不信受。乃至其人命終入阿鼻獄等云云。されば念佛者が本師。導公は其中衆

生の外か。唯我一人の經文を破て千中無一といへし故に。現身に狂人と成りて楊柳に登りて身を投。堅土に落ちて死にかねて。十四日より二十七日まで十四日が間顛倒狂死。畢。又眞言宗ノ元祖善無畏三藏金剛智三藏不空三藏等は親父兼たる教主釋尊法王を立て大日他佛をあがめし故に。善無畏三藏は閻魔王のせめにあづかるのみならず又無間地獄に墮ぬ。汝等此事疑。あらば眼前に閻魔堂の畫を見よ。金剛智不空の事はしげければかかず。又禪宗の三階信行禪師は法華經等の一代聖教をば別教と下す。我が作る經をば普經と崇重せし故に四依の居士の如くなりしかども。法華經の持者の優婆夷にせめられてこれを失ひ。現身に大蛇となり數十人の弟子を吞食。今日本國の人人はたらば無間地獄はまぬがれがたし。何況や三宗の者共を日月の如く渴仰し我身にも念佛を事とせむ者をや。心あらん人人は念佛阿彌陀經等をば父母師君宿世の敵よりもいむべきもの也。例は逆臣が旗をば官兵は指事なし寒食の祭には火をいむがかし。されば古への論師天親菩薩は小乘經を舌の上に置かじと誓ひ。賢者たりし吉藏大師は法華經をだに讀給はず。此等はもと小乘經を



以て大乘經を破失し。法華經を以て天台大師を毀謗し奉りし謗法の重罪を消滅せんがため也。今日本國の人人は一人もなく不輕輕毀の如く苦岸勝意等の如く。一國萬人皆無間地獄に墮すべき人人ぞかし。佛の涅槃經に記して末法には法華經誹謗の者は大地微塵よりもれほかるべしと記し給し是也。而に今法華經の行者出現せば一國萬人皆法華經讀誦を止めて。吉藏大師の天台大師に隨つが如く身を肉橋となし。不輕輕毀の還て不輕菩薩に信伏隨從せしが如く仕るるとも。一日二日一月二月一年二年一生二生が間には法華經誹謗の重罪は尙なをし滅しがたかるべきに。其義はなくして當世の人人は四衆俱に一慢をたれこせり。所謂念佛者は法華經を捨てて念佛を申す。日蓮は法華經を持といへども念佛を持たず。我等は念佛を持ち法華經をも信ず戒をも持ち一切の善を行す等云云。此等は野兔が跡を隠し金鳥が頭を穴に入ると。魯人が孔子をあなづり善星が佛ををせしにことならず。鹿馬迷やすく鷹鳩變がたき者也。無き墓無き墓。當時は予が古へ申せし事の漸く合かの故に。心中には如何せんとは思ふらめども。年來あまりに法にすぎたりしり悪口せし事が忽に翻がたくて信ずる由をせず。而も蒙古はつよりゆく。如何せん宗盛義朝が様にな

げく也。あはれ人は心はあるべきものかな。孔子は九思一言周公旦は浴する時は三度にぎり食時は三度吐給。賢人は如く此用意をなす也。世間の法にもはふ(法)にすぎばあやしめといふぞかし。國を治する人なんぞが人の申せばとて委細にも尋ずして。左右なく科に行はれしはあはれくやしがるらん。夏桀王が湯王に責られ吳王が越王に生をとりにせられし時は。賢者の諫曉を用ひざりし事を悔ひ。阿闍世王が惡瘡身に出。他國に襲はれし時は提婆を眼に見じ耳に聞かじと誓。乃至宗盛がいくさにまけ義經に生をとり給て鎌倉に下されて面をされせし時は。東大寺を焼拂はせ山王の御輿を射奉りし事を歎し也。今の世も又一分もたがふべからず。日蓮を賤み諸僧を貴給。故に自然に法華經の強敵となり給。事を辨へず。政道に背て行はるる間。梵釋日月四天龍王等の大怨敵となり給。法華經守護の釋迦多寶十方分身の諸佛地涌千界迹化佗方二聖二天十羅刹女鬼子母神。他國の賢王の身に入。代りて國主を討し國をほろばさんとするを不知。眞の天のせめにてだにもあるならば。たとひ鐵圍山を日本國に引回し須彌山を蓋として十方世界の四天王を集めて。波際に立並べてふせがするとも法華經の敵となり教主釋尊より

大事なる行者を。法華經の第五ノ卷を以て日蓮が頭を打チ。十卷共に引散て散に蹋たりし大禍は。現當二世にのがれがたくころ候はんずらめ。日本守護の天照太神正八幡等もいかでかかゝる國をばたすけ給へき。いろざいろざ治罰を加へて自科を脱がれんところはげみ給らめ。をり(遅)く科に行間日本國の諸神ども四天大王にいましめられてやあるらん難知事也。教大師云。竊以菩薩國寶載法華經大乘利他摩訶衍說。彌天七難非大乘經以何爲除未然大災非菩薩僧豈得冥滅等云云。而を今大蒙古國を調伏する公家武家の日記を見に。或は五大尊或は七佛藥師或は佛眼或は金輪等云云。此等の小法は大災を消べしや。還著於本人と成りて國忽に亡なんどす。或は日吉の社にして法華護摩を行といへども。不空三藏が悞れる法を本として行間祈禱の儀にあらず。又今の高僧等は或は東寺の眞言或は天台の眞言也。東寺は弘法大師天台は慈覺智證也。此三人は上に申すが如く大謗法の人人也。其より已外の諸僧等は或は東大寺の戒壇の小乗の者也。叡山の圓頓戒者又慈覺の謗法に曲られぬ。彼圓頓戒も迹門の大戒なれば今の時の機にあらず旁叶へき事にはあらず。只今國土やぶれなん後悔さ

きにたたと不便不便と語り給しを。千萬が一を書付て參らせ候。但身も下賤に生れ心も愚に候へば此事は道理かとは承候へども。國主も御用になきかの故に鎌倉にては如何が候けん不審に覺候。返返も愚意に存候はこれ程の國の大事をばいかに御尋もなくして。兩度の御勘氣には行はれけるやらんと聞食しほどかせ給はぬ人人の。或は道理とも或は僻事とも仰あるべき事とは覺候はず。又此身に阿彌陀經を讀候はぬも併ら御爲父母の爲にて候。只理不盡に讀へき由を仰を蒙候はば其時重て申べく候。いかに聞食さずしてうしろの推義をなさん人人の仰をば。たとひ身は隨様に候ども心は一向に用とまいらせ候まじ。又恐にて候へども兼てつみしらせまいらせ候。此御房は唯一人ねはします若やの御事の候はん時は御後悔や候はんずらん。世間の人人の用とねばとは一旦のをるか(悪)の事也。上の御用とあらん時は誰人が用とざるべきや。其時は又用たりとも何かせん。人を信て法を不信也。又世間の人人の思て候は親には子は是非隨べしと君臣師弟如也。此等は外典をも不辨、内典をも知ぬ人人の邪推也。外典ノ孝經には子父臣君諍へべき段もあり。内典には棄恩入無爲眞實報恩者と佛定め

給ぬ。悉達太子は閻浮第一の孝子也父の王の命を背きてこそ父母をば引導し給しか。比千が親父紂王を諫曉して胸をほら(屠)れてこそ賢人の名をば流せしか。賤み給つとも小法師が諫曉を用ひ給はずば現當の御歎なるべし。此は親の爲に讀まいらせ候はぬ阿彌陀經にて候へば。いかにも當時は叶へしとはねばへ候はず。恐恐申上候。

建治三年六月 日

僧 日 永

下山兵庫五郎殿御返事

泰室云此章ハ大士因幡房日永ニ代テ其父下山兵庫助光基ノ爲ニ記シタル書ニテ頼基陳狀ト一例也(下略)

明治三十五年十月八日岡宮光長寺ニ於テ中老僧日法上人ノ御寫本ニ對校又同年十二月十八日北山本門寺ニ於テ大學頭開山日澄上人ノ御寫本ニ對校ス今此二本ヲ以テ校正ス但シ御眞蹟ハ京都妙滿寺ニ五十四丁(一五六九の二〇行)右六行ノ「れば」ヨリ「濁世」マテアリ又五十三丁(一五六八の四行)右初行「法華」ヨリ「影をみ」マテハ京都本國寺ニアリ又六十九丁(一五八六の九行)左六行「を捨」ヨリ「頭を」マテ本國寺ニアリ又四十三丁(一五五七の二三行)左四行「比丘」ヨリ「初心の」マテハ小湊誕生寺ニアリ(稲田海素度記)

高祖遺文錄卷之二十三

○阿佛房御返事 考七一四

御狀ノ旨委細奉候畢。大覺世尊說テ曰、生老病死 生住異滅等云云。既ニ受け生、齡及フ六旬ニ老又無疑、只所殘ル病死、二句而已。然而自正月至今月六月一日ニ連連此病無息、死事無疑者歟。經ニ云、生滅滅已 寂滅爲樂云云。今、棄テ毒身ヲ後ニ受ニ金身ヲ豈ニ可ニ歎ク乎。

建治三年丁丑六月三日

日 蓮 花 押

阿 佛 房

愚按スルニ此文ノ六句ヲ 宗祖ノ御年ト見奉リテ弘安四年へ移スベキ歟(稲田海素度記)

○南條殿御返事 敬上ニ回 考四六

白麥一俵 小白麥一俵 河のり五でふ 送り給畢。佛の御弟子に阿那律尊者と申せし人はをさな(幼)くしての御名をば如意と申ス。如意と申は心のねもひのたから(寶)をふらししゆへ也。このよしを佛にとひまいらせ給しかば昔うね

(飢たるよ(世)に縁覺と申、聖人をひる(稗)のはん(飯)をもて供養しまいらせしゆへと答へさせ給う。迦葉尊者と申せし人は佛にいつでも閻浮提第一の僧なり。俗にてをばせし時は長者にてから(犂)六十うのくら(藏)に金を百四十こく(石)づつ入させ給う。うれより外のたから申すばかりなし。この人のせんじやう(先生)の御事を佛にとひまいらせさせ給ひしかば。むかしうねたる(飢世)にむぎ(麥)のはん(飯)を一ぱひ(盃)供養したりしゆへに。初利天に千反生して今釋迦佛に値、まいらせ僧の中の第一とならせ給ひ。法華經にて光明如來と名をさづけられさせ給うと天台大師文句の第一にしるされて候。かれをもつて此をあん(案)ずるに迦葉尊者の麥のはん(飯)はいみじくて光明如來とならせ給う。今のだんな(檀那)の白麥はいやしくて佛にならず候べきか。在世の月は今も月在世の花は今も花むかしの功德は今も功德なり。るの上上(かみ)一人より下(しも)萬民までにくまれて山中にうねしに(餓死)ゆべき法華經の行者なり。これをふびんとをばして山河をこねわたり。をくりたびて候御心ざしは。麥にはあらず金なり金にはあらず法華經の文字なり。我等が眼にはむぎなり十らせつ(羅刹)には此むぎをば佛のたね(種)とて御らん候らめ。阿那律がひるのはん

はへん(髮)じてうさぎ(兎)となる。うさぎへんじて死人となる死人へんじて金となる。指をぬきてうり(賣)しかば又いできたりぬ。王のせめのありし時は死人となる。かくのごとくつきずして九十一劫なり。釋(しやく)まなん(摩男)と申せし人の石をとりしかば金となりき。金(こん)ぐく(粟)王はいさごを金となし給ひき。今のむぎは法華經のもんじ(文字)なり。又は女人の御ためにはかがみ(鏡)となり身のかざりとなるべし。男のためにはよろひ(甲)となりかぶと(冑)となるべし。守護神となりて弓箭(ゆみや)の第一の名をとるべし。南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經。恐恐謹言。

このよ(此世)の中はいみじかりし時は何事かあるべきとみわしかども。當時はことにあふなげ(危氣)にみぬ候ず。いかなる事ありともなげかせ給へべからず。ふつとれもひきりてうりやう(所領)なんどもたがふ(違)事あらば。いよいよ(彌)悦(えつ)とてころれもひて。うちうりぶき(打嘯)てこれへわたらせ給へ。所地しらぬ人もあまりにすぎ候ず。當時つくし(筑紫)へむかひてなげく人人は。いかばかりとかねばす。これは皆日蓮をかみのあなづらせ給ひしゆへなり。

七月二日

日 蓮 花 押

南條殿御返事

明治三十六年一月十七日富士大石寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ第二三四ノ三枚ダケ御眞蹟アリテ第一ト第五紙及ビ追申ノ文ハ失セリ其失セル所ハ興上足ノ御寫本ニ依テ校正ス又年號ハ到來建治元年ト寫ニ細注アリ(稻田海素慶記)

○孟蘭盆御書 後下六 考五七二

磨牙一俵(焼米)うり(瓜)なす(茄子)等佛前にささげ申上候畢。孟蘭盆と申候事は佛の御弟子の中に目連尊者と申して。舍利弗にならびて智慧第一神通第一と申して。須彌山に日月のならび大王に左右の臣のごとくをばせし人なり。此の人の父をば吉懺師子と申母をば青提女と申。其母の慳貪の科(こが)によりて餓鬼道に墮(お)ちて候しを目連尊者のすくい給より事をこりて候。其因縁は母は餓鬼道に墮(お)ちてなげき候けれども目連は凡夫なれば知(し)ることなし。幼少にして外道の家に入り四(し)る(章)陀(だ)十八大經と申す外道の一切經をならい(い)く(く)せ(せ)ども。いまだ其母の生所をしらず。其後十三のとし舍利弗と

もに釋迦佛(しやたいぶつ)まいりて御弟子となり。見惑をだん(断)じて初果ノ聖人となり修惑を断じて阿羅漢となりて三明をう(得)給へり。天眼をひらいて三千大千世界を明鏡のかけ(影)のごとく御らむありしかば。大地をみとを(見透)し三惡道を見る事氷の下に候魚を朝日にむかいて我等がとをしみるがごとし。其中に餓鬼道と申(こ)ころに我が母あり。のむ事なし食(くら)ふことなし。皮はさ(と)んで(う)金鳥(きんちゆう)をむし(雀)れるがごとく骨はまろ(き)き石をならべたるがごとし。頭(かぶ)は(ま)り(毛)のごとく頸(く)は(い)と(毛)のごとし腹は大海のごとし。口をはり手を合せて物をこ(こ)へ(を)る形はうへたるひる(餓)睡(すい)の人のか(香)をか(け)るがごとし。先生の子をみてな(な)か(泣)んとするすがたうへたるかた(た)ち(と)へ(を)とるに及ばず。い(い)かん(か)が(か)な(な)し(か)り(け)ん。法勝寺の修(しゆ)行(ぎやう)舜(じゆん)觀(くわん)(後)寬(くわん)が(い)わ(ら)う(疏)黃(すわう)の(う)鳴(な)が(さ)れ(て)は(だ)か(響)は(て)か(み)響(き)く(び)つ(き)頼(た)付(け)に(う)ち(を)い(や)せ(渡)を(と)ろ(へ)て海(うみ)へ(ん)に(や)す(ら)懸(か)い(て)も(く)づ(藻)屑(せ)を(と)り(て)こ(し)腰(こし)に(ま)き(魚)を(一)み(つ)け(て)右(みぎ)の(て)に(と)り(口)に(か)み(咬)ける時(とき)。本(もと)つ(か)い(仕)し(わ)ら(わ)産(う)の(た)づ(ぬ)め(を)見(み)し時(とき)。目連尊者(めれんそん)が(母)を(見)し(と)い(づ)れ(か)を(ろ)か(疎)なる(は)ら(い)は(い)ま(す)こ(し)か(な)し(と)わ(ま)さ(り)け(ん)。目連尊者(めれんそん)は(あ)ま(り)の(か)な(し)さ

に大神通をげん(現)じ給ひはん(飯)をまいらせたりしかば。母よろこびて右の  
手にははんをにぎり左の手にてはんをかく(陰)して口にをし入給(いれ)しかば。  
いかんがしたりけんはん變じて火となりやがてもへ(燃)あがり。とうしび(燈  
心)をあつめて火をつけたるがごとくばともへあがり。母の身のこことや  
け候しを目連見給(ま)て。あまりあわて(周章)さわぎ大神通を現じて大なる水を  
かけ候しかば。其水たきぎ(薪)となりていよいよ母の身のやけ候し事こりあ  
はれには候しが。其時目連みづからの神通かなわざりしかばはしり(走)かへ  
り。須臾に佛にまいりてなげき(歎)申せしやうは。我が身は外道の家に生じて  
候しが佛の御弟子になりて阿羅漢の身をへ(得)て。三界の生をはなれ三明六  
通の羅漢とはなりて候へども。乳母の大苦をすくはんとし候にかへりて大苦  
にあわせて候は。心うしどなげき候しかば。佛け説(い)云、汝が母はつみふか  
し汝一人が力及(い)べからず。又何の人なりとも天神地神邪魔外道道士四  
天王帝釋梵王の力も及(い)べからず。七月十五日に十方の聖僧をあつめて百  
味をんじき(飲食)をと(調)へて母のくは(苦)わすくうべしと云云。目連佛  
の仰(ま)のごとく行(な)しかば其母は餓鬼道一劫の苦を脱(の)れ給(たま)きと。孟蘭盆經と

申(ま)經にとかれて候。其によて滅後末代の人人は七月十五日に此法を行(な)候な  
り。此は常のごとし。日蓮案(シテ)云、目連尊者と申せし人は十界の中に聲聞道の  
人二百五十戒をかたく持(も)事石のごとし。三千の威儀(儀)備(そ)へてかけ(缺)ざる事は  
十五夜の月のごとし。智慧(智)日(日)に(似)たり神通は須彌山を十四さう(市)まき  
大山をうごかせし人(人)がかし。かゝる聖人だにも重報の乳母の恩(恩)は(報)じが  
たし。あまさへ(剩)は(う)せんせしかば大苦をまし給(たま)き。いまの僧等の二百  
五十戒は名計(計)にて事をかい(戒)によせて人をたばらかし一分の神通もなし。  
大石の天にのぼらんとせんがごとし。智慧は牛に(類)し羊にことならず。  
設(し)千萬人をあつめたりとも父母の一苦すくうべしや。せんするところは目連  
尊者が乳母の苦をすくわざりし事は。小乗の法を信じて二百五十戒と申(ま)持  
齋(し)にてありしゆへ(う)がかし。されば淨名經と申(ま)經には淨名居士と申(ま)男。目連房  
をせめて云、供(く)養(やう)汝(に)者(を)墮(お)三(三)惡道(惡)云云。文の心は二百五十戒のたうとき目  
連尊者をく(く)やう(供養)せん人は三惡道に墮(お)べしと云云。此又た目連一人が  
さく(聞)み(耳)にはあらず。一切の聲聞乃至末代の持齋等がさく(み)なり。  
此淨名經と申(ま)は法華經の御(ご)ためには數十番の末への郎從にて候。詮(せん)する

ところは目連尊者が自身のいまだ佛にならざるゆへうかし。自身佛にならずしては父母をだにもすくいがかたしいわうや他人をや。しかるに目連尊者と申す人は法華經と申す經にて正直捨方便とて。小乗の二百五十戒立すところになげすて南無妙法蓮華經と申せしかば。やがて佛になりて名號をば多摩羅跋栴檀香佛と申す。此時こり父母も佛になり給へ。故に法華經に云、我願既滿衆望亦足云云。目連が色身は父母の遺體なり。目連が色身佛になりしかば父母の身も又佛になりぬ。例せば日本國八十一代の安徳天皇と申せし主の御宇に。平氏の大將安藝守清盛と申せし人をはしき。度度の合戦に國敵をほろぼして上太政大臣まで官位をさわめ當今はまご(孫)となり。一門は雲客月卿につらなり。日本六十六國島二を掌の内にかいにぎりて候しが。人を順ふこと大風の草木をなびかしたるやうにて候し候とに。心をこ(憐)り身あがり結句は神佛をあなづりて神人と諸僧を手ににぎらむとせし候とに。山僧と七寺との諸僧のかたきとなりて。結句は去治承四年十二月二十二日に七寺の内ノ東大寺興福寺の兩寺を燒きはらいてありしかば。其大重罪 入道の身にかかりてかへるとし養和元年潤二月四日。身はすみ(炭)のごとく面は火のごとくす

みのをこれるがやうにて。結句は炎身より出でてあつちじに(熱死)に死ににき。其大重罪をば二男宗盛にゆづりしかば西海に沈とみへしかども東天に浮と出でて。右大將頼朝の御前に繩をつけてひきすへて候き。三男知盛は海に入つて魚の糞となりぬ。四男重衡は其身に繩をつけて京かまくら(鎌倉)を引かて。結句なら(奈真)七代寺にわたされて十萬人の大衆等我が佛のかたきなりとて一刀づつさざみぬ。悪の中の大悪は我が身に其苦をうくるのみならず子と孫と末へ七代までもかかり候けるなり。善の中の大善も又かくのごとし。目連尊者が法華經ヲ信しよいらせし大善は我が身佛になるのみならず父母佛になり給ふ。上七代下七代上無量生下無量生の父母等存外に佛となり給ふ。乃至子息夫妻所從檀那無量衆生三惡道をはなるのみならず。皆初住妙覺の佛となりぬ。故に法華經、第二三云、願以此功德普及於一切我等與衆生皆共成佛道云云。されば此等をもつて思ふに貴女は治部殿と申す孫を僧にてもち給へり。此僧は無戒也無智なり。二百五十戒一戒も持つことなし三千の威儀一も持たず。智慧は牛馬に在る(類)し威儀は猿猴に在る候へども。あをぐごころは釋迦佛 信する法は法華經なり。例せば虻の珠をにぎり龍の舍利を戴が

ごとし。藤は松にかかりて千尋ちひろをよち鶴は羽を恃たもて萬里をかける。此は自身  
 の力にはあらず。治部房も又かくのごとし。我が身は藤のごとくなれども法  
 華經の松にかかりて妙覺の山にもものぼりなん。一乗の羽をたのみて寂光の空  
 にもかけりぬべし。此の羽をもて父母祖父祖母乃至七代の末までもとぶらう  
 べき僧なり。あわれいみじき御たからはもたせ給たまてをばします女人かな。彼  
 の龍女は珠をさへげて佛となり給ふ。此女人は孫を法華經の行者となしてみ  
 ちびかれさせ給たまべし。事事ことごとりうらう(忽忽)にて候へばくはしくは申さず。又  
 又申まべく候。恐恐。

七月十三日

日 蓮花押

治部殿うばでせん御返事

明治三十五年五月廿八日京都妙覺寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ此書ハ全ク十六紙ニシテ  
 今六幅トセリ此書該寺ニ傳タル緣由ハ別記ニアリ(稻田海素殿記)

〇頼基陳狀

啓三三三三 鈔二五三 語四八 拾六四九 扶一一二四四

去六月二十三日、御下文。島田、左衛門入道殿、山城、民部入道殿、兩人の御承と  
 して同二十五日謹拜見仕候畢。右仰下之狀云、龍象御房の御說法の所に  
 被參候ける次第をばかた穩便ならざる由。見聞の人遍一方ならず、同口に  
 申合候事驚入候。徒黨、仁其數帶兵杖出入云云。此條無跡形一虛言也。  
 所詮誰人の申入候けるやらん御哀憐を蒙りて被召合實否を糾明され候は  
 ば可然事にて候。凡此事の根源は去六月九日日蓮聖人、御弟子三位公頼基  
 が宿所に來り申云。近日龍象房と申僧京都より下て大佛の門の西桑谷くわいやくに止  
 住して日夜に說法仕が。申云、現當の爲、佛法に御不審存む人は來りて問  
 答可申旨說法令むる間。鎌倉中の上下如釋尊しやくそん奉貴ほうき。しかれども問答  
 は及人なしと風聞し候。彼へ行向て遂問答一切衆生の後生の不審をは  
 らし候はむと思候。聞給はぬかと被申しかども折節官仕せりせつに無隙候し程に  
 思立たず候しかども。法門事と承てたびたび罷向て候ども。頼基は俗家  
 の分にて候一言不出候し上は惡口に不あ及事嚴察可足候。こゝに龍象房  
 說法の中に申云、此見聞滿座の御中に御不審の法門あらば可被仰おほと申さ



れし處に。日蓮房、弟子三位公問云、生を受しより死をまぬかるまじきこと  
 はり始めてをどろくべきに候はねども。ことさら當時日本國の災孽に死亡す  
 る者數を不知ら。眼前の無常人毎に思しらすと云ふ事なし。然所に京都よ  
 り上人御下りあて人人の不審をばらし給よし承て參り候つれども。御說法  
 の最中骨無くも候なばと存候し處に。可問事有らむ人は各各不憚問給  
 へと候し問悦入候。先づ不審に候事は末法に生を受けて邊土のいやしき身  
 に候へども。中國の佛法幸に此國にわたれり是非可信受處に經は五千七千  
 數多也。然而佛の説なれば所詮は一經にてころ候らむに。華嚴眞言乃至八宗  
 淨土禪とて十宗まで分れてをばします。此等の宗宗も門はことなりとも所詮  
 は一かと推する處に。弘法大師は我朝の眞言の元祖 法華經は華嚴經大日經に  
 相對すれば門の異なるのみならず其理は戲論の法 無明の邊域也。又法華宗の  
 天台大師等、評盜醍醐等云云。法相宗の元祖慈恩大師云、法華經は方便 深密  
 經は眞實 無性有情永不成佛云云。華嚴宗の澄觀云、華嚴經は本教 法華經は  
 末教或は華嚴は頓頓 法華は漸頓等云云。三論宗の嘉祥大師云、諸大乘經の  
 中には般若教第一云云。淨土宗の善導和尚云、念佛は十即十生百即百生法

華經等は千中無二云云。法然上人云、法華經を念佛に對して捨閉闍拋或は行  
 者群賊等云云。禪宗云、教外別傳不立文字云云。教主釋尊は法華經をば世  
 尊法久後要當說眞實。多寶佛は妙法華經、皆是眞實。十方分身の諸佛  
 は舌相至梵天とてころ見へ候。弘法大師は法華經をば戲論の法と被書きた  
 り。釋尊多寶十方諸佛は皆是眞實と被説て候。いづれをか信候へ。善導  
 和尚法然上人は法華經をば千中無一捨閉闍拋 釋尊多寶十方分身諸佛は無  
 一不成佛皆成佛道と云云。二佛與導和尚然上人水火也雲泥也何れをか  
 信候へ。何をか捨候へ。就中彼導然兩人所の仰雙觀經、法藏比丘の四  
 十八願の中に。第十八願云、設我得佛、唯除五逆、誹謗正法云云。たとひ彌  
 陀の本願實にして往生すべくとも。正法を誹謗せむ人人は彌陀佛の往生には  
 除かれ奉べき歟。又法華經の二卷には若人不信其人命終入阿鼻獄云  
 云。念佛宗に詮とする導然兩人は經文實ならば阿鼻大城をまぬかれ給ふべ  
 しや。彼上人、地獄に墮給せば末學弟子檀那等自然に惡道に墮事疑なかる  
 べし。此等より不審に候へ上人は如何と問給はれしかば。龍上人答云、上古  
 の賢者達をばいかでか疑奉べき。龍象等が如なる凡僧等は仰て信奉候

と答へ給しを。をし返して此仰てこり智者の仰ても不覺候へ。誰人か時の代にあをがるる人師等をば疑候べき。但涅槃經に佛最後の御遺言として依法不依人に見て候。人師にあやまりあらば經に依れと佛は説れて候。御邊はよもあやまりましまさざと被申候。御房の私の語と佛の金言と比には三位は如來の金言に付まいらせむと思候也と申されしを。象上人、人師にあやまり多し候はいつれの人師候かと問はれしかば。上に申つる所の弘法大師法然上人等の義に候はずやと答へ給候しかば。象上人、嗚呼叶候まじ我朝の人師の事は忝も問答仕まじ候。満座の聽衆皆其流にて御座す鬱憤も出來せば定みたりがはしき事候なむ恐あり恐あり。申されし處に。三位房云、人師のあやまり誰かと候へば。經論に背人師達をいだし候し憚ありかなふまじと仰候にこり。進退はまよりて覺候へ。法門と申は人を憚り世を恐て佛の説給が如く經文の實義を不申者愚者の至極也。智者上人とは覺給はず。惡法世に弘て人惡道に墮國土滅すべしと見候はむに。法師の身として争かいためず候べき。然則法華經には我不愛身命涅槃經には寧喪身命等云云。實の聖人にてをばせば何か身命を惜て世にも人にも

恐給べき。外典の中にも龍蓬と云し者。比干と申せし賢人は頸をはねられ胸をさかれしかども。夏の桀般の紂をばいさめてこり賢人の名をば流し候しか。内典には不輕菩薩は杖木をかはり師子尊者は頭をはねられ。竺の道生は蘇山にながされ法道三藏は面に火印をさされて江南にはなたれしかども。正法を弘めてこり聖人の名をば得候しかと難せられ候しかば。龍聖人云、さる人は末代にはありがたし我我は世をばはがり人を恐るる者にて候。さやうに被仰人とてもことばの如くにはよもをはしまし候はじと候しかば。此御房、争か人の心をば知給べき某こり當時日本國に聞給日蓮上人の弟子として候へ。某が師匠の聖人は末代の僧にて御坐候へども。當世の大名僧の如、望で請用もせず人をも誚はず聊か異なる惡名もたたず。只此國に眞言禪宗淨土宗等の惡法並に謗法の諸僧滿満て。上一人をはじめ奉りて下萬民に至るまで御歸依ある故に。法華經教主釋尊の大怨敵と成りて現世には天神地祇にすてられ他國のせめにあひ。後生には阿鼻大城に墮給べき由經文にまかせて立給し程に。此事申さば大あたあるべし不申者佛のせめのがれがたし。いはゆる涅槃經に若善比丘見壞法者當知是人佛法中怨等云云。世に恐

て不申者我身惡道に可墮と御覽にて。身命をすて去。建長年中より今年建治三年に至るまで二十餘年が間あはてをこたる事なし。然れば私の難は數を不知ら國王の勘氣は兩度に及ぶ。三位も文永八年九月十二日の勘氣の時は其奉の一行にて有しかば。同罪に被行て頸をはねらるべきにてありしは身命を惜ものにて候かと申されしかば。龍象房口を閉て色を變候しかば。此御房申されしは是程の御智慧にては人の不審をはらすべき由の仰無用に候けり。苦岸比丘勝意比丘等は我レ正法を知りて人をたすくべき由存せられて候しかども。我身も弟子檀那等も無間地獄に墮候き。御法門の分齊にてうごばくの人を救はむと説給が如くならば師檀共に無間地獄にや墮給はんずらむ。今日より後は如此御説法は御はからひあるべし。加様には申まじく候へとも惡法を以て人を地獄にをとさん邪師をみなながら。責顯はさずば返て佛法の中の怨なるべしと。佛の御いましめのがれがたき上。聽聞の上下皆惡道にをち給はん事不便に覺候へば如此申候也。智者と申は國のおやうきをいざめ人の邪見を申とどむるころ智者にては候なれ。是はいかなるゆゑが事ありとも世の恐しければいざめと申されむ上は力不及。某文殊

の智慧も富樓那の辯説も詮候はずとて被立候しかば。諸人歡喜をなし合掌。今暫御法門候へかして留申されしかどもやがて歸給了。此外は別の子細候はず。且は御推察あるべし。法華經を信參て佛道を願ひ候はむ者の。争か法門の時惡行を企惡口を宗とし候べき。しかしながら御さやうさく(遺送)可有候。其上日蓮聖人の弟子となりのぬる上罷歸ても御前に參りて法門問答の様かたり申候き。又た其邊に賴基しらぬもの候はず只賴基をうねみ候人つくり事にて候にや。早被召合時不可有其隱候。又被仰下。狀云。極樂寺の長老は世尊の出世と奉仰。此條難かむ(難)の次第に覺候。其故は日蓮聖人は御經にとかれてまします。如くば。久成如來の御使上行菩薩の垂造。法華本門の行者五五百歳の大導師にて御座候聖人を。頸をはねらるべき由の申狀を書て殺罪に申行はれ候しが。いかが候けむ死罪を止て佐渡の島まで遠流せられ候しは。良觀上人の所行に候はずや。其訴狀は別紙に有之。抑生草をだに伐べからずと六齋日夜説法に被給ながら。法華正法を弘むる僧を斷罪に可被行旨被申立者自語相違に候はずや如何。此僧豈天魔の入る僧に候はずや。但此事の起は良觀房常の説法云。日本國

の一切衆生を皆持齋になして八齋戒を持たせて。國中の殺生 天下の酒を止め  
 ひとする處に日蓮房が謗法に障られて此願難叶由歎給候間。日蓮聖人  
 此由を聞給ていかがして彼が誑惑の大慢心をたをして無間地獄の大苦をた  
 すけむと仰ありしかば。賴基等は此仰法華經の御方人 大慈悲の仰にては  
 候へども。當時日本國別して武家領食の世さらざる人にてをばしますを。た  
 やすく仰ある事いかかと弟子共同口に恐れ申候し程に。去文永八年 辛未 六  
 月十八日大旱魃の時。彼御房祈雨の法を行て萬民をたすけんと付申候由日  
 蓮聖人聞給て。此體は小事なれども此次では日蓮が法驗を萬人に知らせば  
 やと仰ありて。良觀房の所へ仰つかはすに云。七日内にふらし給はば。日蓮  
 が念佛無間と申法門すてて良觀上人の弟子と成て二百五十戒持つべし。雨  
 ふらぬ候はどならば彼御房の持戒げ(氣)なるが大誑惑は顯然なるべし。上代も  
 祈雨に付て勝負を決したる例これ多。所謂護命と傳教大師と守敏と弘法と  
 也。仍、良觀房の所へ周防房 入澤ノ入道と申念佛者を遣。御房と入道は良  
 觀が弟子又念佛者也。いまに日蓮が法門を用事なし是を以て勝負とせむ。七  
 日以内に雨降ならば本の八齋戒念佛を以て往生すべしと思つべし。又雨ら

すば一向に法華經になるべしといはれしかば。是等悦て極樂寺の良觀房に  
 此由を申候けり。良觀房悦ない(逆)て七日内に雨ふらすべし由弟子百二十  
 餘人頭より煙を出聲を天にひびかし。或は念佛或は請雨經或は法華經或は  
 八齋戒を説て種種に祈請す。四五日まで雨の氣無たましるを失て多寶寺の  
 弟子等數百人呼集力を盡して祈したるに。七日内に露ばかりも雨降らず。  
 其時日蓮聖人使を遣事二度に及。いかに泉式部と云し姪女能因法師と申  
 せし破戒の僧 狂言綺語の三十一字を以て忽にふらせし雨を。持戒持律の良觀  
 房は法華眞言の義理を極慈悲第一と聞給上人の。數百人の衆徒を率て七  
 日之間にいかにかにふらし給はぬやらむ。是を以て思ひ給へ一丈堀を不越者  
 三丈三丈の堀を越てんや。やす(易)き雨をだにふらし給はず況やかた(難)き往  
 生成佛をや。然ば今よりは日蓮怨み給邪見をば是を以て翻給へ。後生をり  
 るしくをばし給はば約束のまゝにいろぎ來給へ。雨ふらす法と佛になる道  
 をしへ奉らむ。七日内に雨こころふらし給はざらめ。旱魃 彌興盛に八風ま  
 すます吹重て民のなげき彌彌深。すみやかに其いのりやめ給へと第七日  
 の申時使者ありのまゝに申處に。良觀房は涙を流す弟子檀那同く聲をたし

まず口惜がる。日蓮御勘氣を蒙る時此事御許有しかば有りのまゝに申給さる。然ば良觀房身の上の恥を思はば跡をくらまして山林にもまじはり。約束のまゝに日蓮が弟子ともなりたれば道心の少にてもあるべきに。さはなくして無盡の讒言を構へて殺罪に申行はむとせしは貴き僧かど。日蓮聖人かたり給さる。又賴基も見聞き候き。佗事に於てはかけはく(掛畏)も主君の御事畏入り候へども。此事はいかに思候ともいかでかと思はれ候へき。又仰下狀云龍象房極樂寺、長老見參、後は釋迦彌陀とあをき奉ると云云。此條又恐入り候。彼龍象房は洛中にして人の骨肉を朝夕の食物とする由令露顯問。山門の衆徒蜂起して世末代に及んで惡鬼國中に出現せり。山玉の御力を以て對治加へむとて住所を焼失し其身を誅罰せむとする處に。自然に逃失し行方を不知ラ處に。たまたま鎌倉中に又人、肉を食之間情ある人恐怖せしめて候に。佛菩薩と仰給事所從の身として争か主君の御あやまりをいさめ申さず候へき。御内のをとなしき人いかにこゝろ存候へ。同下狀云是非につけて主親の所存には相隨て佛神の冥にも世間の禮にも手本と云云。此事最第一の大事にて候へば私の申狀恐入り候間本文を引べく候。孝經云子不可以不爭於父

臣不可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>爭<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>君<sub>ニ</sub>。鄭立曰、君父有<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>義<sub>ニ</sub>臣子不<sub>レ</sub>諫<sub>ニ</sub>則亡國破家ノ道也。新序曰、主ノ暴<sub>ヲ</sub>不<sub>レ</sub>諫<sub>ニ</sub>非<sub>ニ</sub>忠臣<sub>ニ</sub>也畏<sub>テ</sub>死<sub>ヲ</sub>不<sub>レ</sub>言<sub>ニ</sub>非<sub>ニ</sub>勇士<sub>ニ</sub>也。傳教大師云、凡當<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>誼<sub>ニ</sub>則子不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>爭<sub>ニ</sub>于<sub>ニ</sub>父<sub>ニ</sub>臣不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>爭<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>君<sub>ニ</sub>。當<sub>ニ</sub>知<sub>ル</sub>君臣父子師弟不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>爭<sub>ニ</sub>于<sub>ニ</sub>師<sub>ニ</sub>文。法華經云、我不<sub>レ</sub>愛<sub>ニ</sub>身<sub>ニ</sub>命<sub>ニ</sub>但惜<sub>ニ</sub>無<sub>レ</sub>上<sub>レ</sub>道<sub>ニ</sub>文。涅槃經云、譬如下王、使善能談論、巧<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>方便<sub>ニ</sub>奉<sub>ニ</sub>命<sub>ニ</sub>他國<sub>ニ</sub>寧<sub>ニ</sub>喪<sub>ニ</sub>身<sub>ニ</sub>命<sub>ニ</sub>終<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>匿<sub>ニ</sub>王<sub>ニ</sub>所說<sub>ニ</sub>言<sub>ニ</sub>教<sub>ニ</sub>智者<sub>ハ</sub>不<sub>レ</sub>爾<sub>ニ</sub>文。章安大師云、蓋喪身命不<sub>レ</sub>匿<sub>ニ</sub>教<sub>ニ</sub>者身<sub>ハ</sub>輕<sub>ニ</sub>法<sub>ハ</sub>重<sub>ニ</sub>死<sub>ニ</sub>身<sub>ハ</sub>弘<sub>ニ</sub>法<sub>ハ</sub>文。又云、壞<sub>ニ</sub>亂<sub>ニ</sub>佛法<sub>ニ</sub>中<sub>ニ</sub>怨<sub>ニ</sub>無<sub>レ</sub>慈<sub>ニ</sub>詐<sub>ニ</sub>親<sub>ニ</sub>則<sub>ニ</sub>是<sub>ニ</sub>彼<sub>ニ</sub>怨<sub>ニ</sub>能<sub>レ</sub>治<sub>ニ</sub>者<sub>ハ</sub>爲<sub>ニ</sub>彼<sub>ニ</sub>除<sub>ニ</sub>惡<sub>ニ</sub>則<sub>ニ</sub>是<sub>ニ</sub>彼<sub>ニ</sub>親<sub>ニ</sub>文。賴基をば傍輩とて無禮なりと思はれ候らめども。世ノ事にをさ候ては是非父母主君の仰に隨て參候へし。其にと(取)て重恩の主の惡法の者にたばらかされまじして。無道に墮給はむをなげくはか内也。阿闍世王は提婆六師を師として教主釋尊を敵とせしかば摩竭提國皆佛敎の敵となりて。闍王の眷屬五十八萬人佛弟子を敵とする中に。耆婆大臣計佛弟子也。大王は上の賴基を思食が如く佛弟子たる事を御心よからず思食しかども。最後には六大臣の邪義をすて耆婆が正法にこゝろつかせ給候しが。其の如く御最後をば賴基や救參候はんすらむ。如く此令申候へば阿闍世

は五逆罪の者也彼に對するかと思食ぬべし。恐にては候へども彼には百千萬倍の重罪にて御座すべしと。御經の文には顯然に見せ給て候。所謂今此三界は皆是我有其中衆生悉是吾子文。文の如くは教主釋尊は日本國の一切衆生の父母也師匠也主君也阿彌陀佛は此三の義ましますとす。而に三徳の佛を閣て佗佛を晝夜朝夕に稱名し。六萬八萬の名號を唱まします。あに不孝の御所作にわたらせ給はずや。彌陀の願も釋迦如來の説せ給しかども終にくひ返給て唯我一人と定給ぬ。其後は全く二人三人と見候はず。隨て入にも父母二人なし何の經に彌陀は此國の父何論に母たる旨見へて候。觀經等の念佛の法門は法華經説せ給はむ爲のしはらくのしつらひ也。塔くまひ爲の足代の如し。而を佛法なれば始終あるべしと思人大僻案也。塔立て後足代を貴げどのはかなき者也。又日よりも星は明と申者なるべし。此人を經に説て云雖復教詔而不信受其人命終入阿鼻獄。當世日本國の一切衆生の釋迦佛を抛て阿彌陀佛を念法華經を抛て觀經等を信人。或は如此此謗法の者を供養せむ俗男俗女等。存外に五逆七逆八虐罪ををかせる者を智者と竭(渴)仰する諸大名僧並國主等也如是展轉至無數劫是也。如此此備事をな

まじのに承て候間次以て令申候。官仕をつかまつる者上下ありと申せども分分に隨て主君を重せざるは候はず。上の御ため現世後生あしくわたらせ給へべき事を祕かにも承て候はむに。傍輩世に憚て申上ざらむは與同罪に候まじと歟。隨て賴基は父子二代命を君にまいらせたる事顯然也。故親父中務故君の御勘氣かふらせ給ける時。數百人の御内の臣等心かはりし候けるに。中務一人最後の御共奉して伊豆國まで參て候き。賴基は去文永十一年二月十二日の鎌倉の合戦の時。折節伊豆國に候しかば十日申時に承て唯一人管根山を一時に馳越へて御前に自害八人の内に候き。自然に世しづまり候しかば。于今君も安穩にころわたらせ給候へ。爾來大事小事に付て御心やすき者にころ思合れて候。賴基が今更何につけて疎縁に思まいらせ候へ。後生までも隨從しまいらせて賴基成佛し候はば君をもすくひまいらせ。君成佛しましはば賴基もたすけられまいらせむとて存候へ。其に付て諸僧の説法を聽聞仕て何か成佛の法どうかかひ候處に。日蓮聖人、御前は三界主一切衆生の父母釋迦如來の御使。上行菩薩にて御坐候ける事の法華經に説れてましましけるを信まいらせたるに候。今ころ眞言宗と申惡

法日本國に渡りて四百餘年。去延曆二十四年に傳教大師日本國にわたし給たりしかども此國にあしかりなむ思食候間。宗の字をゆるさず天台法華宗の方便となし給。其後傳教大師御入滅の次をうかがひて弘法大師傳教に偏執して宗の字を加し給。叡山、用事なかりしは、慈覺智證短才にして二人、身は常山に居ながら心は東寺の弘法に同意するかの故に。我大師には背して始めて叡山に眞言宗を立ぬ。日本亡國の起是也。爾來三百餘年或は眞言勝法華勝一同なむと諍論事されざりしかば王法も無左右不盡。人王七十七代後白河法皇御宇に天台座主明雲一向眞言座主になりしかば。明雲は義仲にころされぬ頭破作七分是也。第八十二代隱岐法皇御時禪宗念佛宗出來て眞言の大惡法に加へて國土に流布せしかば。天照太神正八幡百王百代の御誓やぶれて王法すでに盡ぬ。關東の權大夫義時に天照太神正八幡の御計として國務をつけ給。爰に彼の三の惡法關東に落下りて存外に御歸依あり。故に梵釋二天日月四天の成し先代未有の天變地天を以ていさむれども。用給はざれば鄰國に仰付て法華經誹謗の人を治罰し給。間。天照太神正八幡も力及給はず。日蓮聖人一人此事を知食せり。如

此嚴重の法華經にてをばして候間。主君をも導まいらせむと存候故に。無量の小事をわすれて于今仕られまいらせ候。賴基を讒言申。仁は君の御爲不忠の者に候はずや。御内を能り出候はば君たちまちに無間地獄に墮させ給べし。さては賴基佛に成り候ても甲斐なしとなげき存候。抑彼の小乘戒は富樓那と申せし大阿羅漢諸天の爲に二百五十戒を説候しを。淨名居士たん(彌)して云、無以穢食置於寶器等云云。鴛鴦摩羅は文殊を呵嘖し嗚呼蚊蚋行不不知大乘空理。又小乘戒をば文殊は十七の失を出し如來は八種譬喩を以て是をりしり給。に。驢乳と説。蝦蟆に譬られたり。此等をば鑒眞の末弟子は傳教大師をば惡口の人と云。嵯峨天皇には奏申候しかども。經文なれば力及候はず。南都の奏狀やぶれて叡山の戒壇立候し上は。すでに捨られ候し小乘候はずや。賴基良觀房を蚊蚋蝦蟆の法師也と申。も經文分明に候はば御とがめあるべからず。剩へ起請に及べし。由蒙仰之條存外に歎入候。賴基不法時病にて起請を書候程ならば君忽に法華經の御罰を蒙せ給べし。良觀房が讒訴に依りて釋迦如來の御使日蓮聖人を流罪奉しかば。聖人の申給しが如く百日が内に合戰出來て若干の武者滅亡せ

し中に。名越なごいの公達きんたち横死にあはせ給ぬ。是偏に良觀房が失ひ奉りたるに候はずや。今又龍象 良觀が心に用意せさせ給て。頼基に起請を書きしめ御座さば君又其罪に當らせ給はざるべしや。如ごと此道理を不し知ら故歟。又君をあたし奉らむと思ふ故歟。頼基に事を寄せて大事だいじ出さむとたばかり候人等御尋まあて可レ被レ召シ合セ候。恐惶謹言。

建治三年丁丑六月二十五日

四條中務尉頼基 請文

奏堂云此一章ハ頼基勘氣ヲ蒙ルノ日日蓮大士頼基ニ代テ此書ヲ裁シ其主君江馬北條入道ニ進セシム(以下略之)

明治三十五年十二月十七日富士北山本門寺ニ於テ興上足ノ再治本ノ御寫ヲ以テ校正ス但此書ニ草案ト再治ノ二本アリ其御草案ハ今ト大同ナリ今ハ再治ヲ取ル其奥云正治五年閏十月二十日駿河富士上方重須談所ニテ再治本ヲ以テ書寫了白蓮七十一歳トアリ(稻田海業處記)

○四條金吾殿御返事

啓二七九一

鈔一七三三

扶一〇三八

去月二十五日の御文同月の二十七日の酉の時に來りて候。仰おほ下くださるる状と又起請かまくまじきよしの御せいじやう(誓狀)とを見候へば。優曇華のさきたるをみるか赤梅檀のふたば(慶葉)になるをぬたるか。めづら(珍)しかうば(香)し。三明六通を得給う上う法華經にて初地初住にのぼらせ給へる證果の大阿羅漢。得無生忍の菩薩なりし舍利弗 目連 迦葉等だにも。娑婆世界の末法に法華經を弘通せん事の大難こらへ(忍)かねければかなふまじき由辭じ退候たいき。まして三惑未斷の末代の凡夫が争か此經の行者となるべき。設た日蓮一人は杖木瓦石惡口王難をも忍しのども妻子を帯せる無智の俗なんどは争か可い叶いる。中中信せざらんはよかりなん。すへとをら(通)ずしばし(暫時)ならば人にわらはれなんと不便にをもひ候しに。度度の難二箇度の御勘氣に心ざしをあらはし給たまだにも不思議なるに。かくをどさるるに二所の所領をすてて法華經を信じとをすべしと御起請候事いかにも申ま計かなし。普賢文殊等を末代はいかんがど佛思食して。妙法蓮華經の五字をば地涌千界の上首上行等の四人にこり仰おほつけられて候へ。只事の心を案ずるに日蓮が道をたすけんと上行菩薩貴邊の御身



に入りかはらせ給へるか。又教主釋尊の御計にか。彼の御内の人人うちにはびこつて良觀龍象が計ひにてやぢやう(定)あるらん。起請をかかせ給へなはいよいよかつげら(被奴)をござり(驕)てかたがたにふれ申さば。鎌倉内に日蓮が弟子等一人もなくせめうしなひなん。凡夫のならひ身の上ははからひがたし。これをよくよくしるを賢人聖人とは申なり。遠きをばしばらくをかせ給へ。近きは武藏、かう(守)殿兩所をすてて入道になり。結句は多の所領男女のさうだち(公達)御せん等をすてて御遁世と承る。どの(駭)は子なしたのもしき兄弟なしわづかの二所の所領なり。一生はゆめ(夢)の上明日をぞ(期)せず。いかなる乞食にはなるとも法華經にきずをつけ給へからず。されば同くはなげきたるけしき(氣色)なくて。此狀にかきたるがごとくすこしもへつら(譚)はず振舞仰もあるべし。中中へつらふならばあしかりなん。設ひ所領をめされ追出し給つとも十羅刹女の御計にてあつあるらむとふかくたのま(深恃)せ給へし。日蓮はなが(流罪)されずしてかまくら(鎌倉)にだにもありしかば。有しいくさ(軍)に一定打殺されなん。此も又御内にてはあしかりぬべければ釋迦佛の御計にてやあるらむ。陳狀は申して候へども又うれに僧は候へども。あまりの

ればつかなさに三位房をつかはすべく候に。いまだ所勞きらきらしく候はず候へば同事に此御房をまいらせ候。だいがく(大學)の三郎殿かたき(漣)の太郎殿かどき(喜木)殿かにいとまに隨てかかせてあげ(井上)させ給へし。これはあげなば事されなむ。いたういがすとも内内うちをしたゝめ。又ほかのかつばら(被奴原)にもあまねくさはがせてさしだしたらば。若や此文かまくら内にもひろう(披露)し。上へもまいる事もやあるらん。わざはひの幸はこれなり。法華經の御事は已前に申ふりぬ。しかれども小事こり善よりはをこて候へ。大事になりぬれば必大なるさはぎが大なる幸となるなり。此陳狀人ごとにみるならば彼等がはぢ(耻)あらわるべし。只一口に申給へ。我とは御内を出て所領をあぐべからず。上よりめされいださむは法華經の御布施。幸と思へしどの、しらせ給へ。かへすがへす奉行人にへつらふけしき(氣色)なかれ。此所領は上より給たるにはあらず。大事の御所勞を法華經の薬をもつてたすけまいらせて給て候所領なれば。召ならば御所勞こり又かへり候はむずれ。爾時は頼基に御たいじやう(愈狀)候ども用ひまいらせ候まじく候と。うちあてにくさうげ(積體氣)にてかへるべし。あなかしこあなかしこ。御よりあひ

(寄合)あるべからず。よる(夜)は用心きびしく夜廻の殿原かたらひ(語)て用ひ常にはよりおはるべし。今度御内をだにもいだけされずば十に九は内のものねらひなむ。かまへてきたなきしに(死)すべからず。

建治三年丁丑七月

日 蓮 花押

四條金吾殿御返事

○彌三郎殿御返事 考二九

是は無智の俗にて候へども承り候しに貴く思ひ進ませ候しは。法華の第二、卷に今此三界とかや申文にて候也。此文の意は今此日本國は釋迦佛の御領也。天照太神八幡大菩薩神武天皇等の一切の神國主並に萬民までも釋迦佛の御所領の内なる上。此佛は我等衆生に三の故御坐す大恩の佛也。一國主也二師匠也三親父也。此三徳を備へ給事は十方の佛の中に唯釋迦佛計也。されば今の日本國の一切衆生は設釋迦佛にねんごろに仕ふる事。當時の阿彌陀佛の如くすとも。又佗佛を並べて同じ様にもてなし進ませば大なる失也。譬ば我主の而も智者にて御坐さんを佗國の王に思ひ替へて。日本國にすみながら漢土

高麗の王を重んじて日本國の王にねるるか(疎縁)ならんをば。此國の大王いみじと申す者ならんや。況や日本國の諸僧は一人もなく釋迦如來の御弟子として頭をうり衣を著たり。阿彌陀佛の弟子にはあらぬがし。然るに釋迦堂法華堂畫像木像法華經一部も持ち候はぬ僧共が。三徳全備はり給へる釋迦佛をば聞きて。一徳もなき阿彌陀佛を國こがりて鄉村家ごとに人の數よりも多く立ならべ。阿彌陀佛の名號を一向に申して一日に六萬八萬なんぞす。打見て候所はあら貴や貴やと見へ候へども。法華經を以て見進させ候へば中中日日に十惡を造る惡人よりも過重きは善人也。惡人は何れの佛にもよらまいらせ候はねば思替る邊もなし。若又善人とも成ば法華經に付進する事もや有なん。日本國の人人は何にも阿彌陀佛より釋迦佛念佛よりも法華經を重くしたしく心よせし思進せぬる事難かるべし。されば此人人は善人に似て惡人也。惡人の中には一閻浮提第一の大謗法の者大闡提の人也。釋迦佛此人をば法華經の二の卷に其人命終入阿鼻獄と定させ給へり。されば今の日本國の諸僧等は提婆達多瞿伽梨尊者にも過たる大惡人也。又在家の人人は此等を貴み供養し給故に此國眼前は無間地獄と變じて。諸人現身に大

飢渴 大疫病先代になき大苦を受る上他國より責らるべし。此は偏に梵天帝釋日月等の御はからひ也。かゝる事をば日本國には但日蓮一人計り知つて始は云べき歟云々まじき歟とすられもひけれども。さりとは何にすべき。一切衆生の父母たる上佛の仰を背くべき歟。我身ころ何様にもならめと思ひて云々出しかば二十餘年所をれば弟子等を殺され。我身も疵を蒙り二度まで流され結句は頸切られんとす。是偏に日本國の一切衆生の大苦にあはんを兼て知て歎き候也。されば心あらん人人は我等が爲にと思食すべし。若知恩有り心人人は二當らん杖には一は替へるべき事かかし。さころ無からめ還て怨をなしなんぞせらるる事は心得ず候。又在家の人人の能も聞ほどかすして或は所を追ひ或は弟子等を怨るる心ねぬさよ。設知らずとも誤りて現の親を敵とと思ひたがへて言り或は打殺したらんは何に科を免るべき。此人人は我あらざ(荒氣)をば知らずして日蓮があらざの様に思へり。譬は物ねたみする女の眼を瞋かしてとわり(後妻)をにら(眼)むれば己が氣色のうと(疎)ましさを知らずして。還とわりの眼れろろしと云々が如し。此等の事は偏に國主の御尋なき故也。又何なれば御尋なきと申すに。此國の人人餘り科多しして一定

今生には佗國に責られ後生には無間地獄に墮すべき惡業の定まりたるが故也。經文歴歴と候しかば信じて進ませて候。此事は各各設我等が如なる云にかひなき者共を責れとし或は所を追せ給候とも。よも終には只是候はじ。此御房の御心をば設天照太神正八幡もよも隨へさせ給ひ候はじ。まして凡夫をや。されば度度の大事にもれく(憚)する心なく彌よ強盛に御坐すと承候と。加様のすぢに申し給へし。さて其法師物申さば取返してさて申しつる事は僻事歟と返して。釋迦佛は親也師也主也と申文。法華經には候歟と問て。有と申さばさて阿彌陀佛は御房の親主師と申。經文は候歟と責て。無と云はんする歟又有と云はんする歟。若さる經文有と申さば御房の父は二人歟と責給へ。又無といはばさては御房は親をば捨てて何に佗人をもてなすかと責給へ。其上法華經は佗經には似させ給はねばころとて四十餘年等の文を引かるべし。即往安樂の文にかからばさて此には先つまり給へる事は承伏歟と責て。うれもとて又申へし。構へて構へて所領惜み妻子を顧りみ又人を憑てあやむ事無れ但偏に思切べし。今年の世間を鏡とせよ若干の人の死るに今まで生きて有つるは此事にあはん爲也けり。此ころ宇治川を

渡せし所よ是こり勢多を渡せし所よ名を揚か名をくだすか也。人身、難く受、法華經、難く信、とは是也。釋迦多寶十方の佛來集して我身に入りかはり我を助け給へと觀念せさせ給へし。地頭のもとに召する事あらば先は此趣を能能申さるべく候。恐恐謹言。

建治三年丁丑八月四日

日蓮花押

彌三郎殿御返事

○日女御前御返事

微下三 考八三

御本尊供養の御爲に鷲目五貫白米一駄菓子其數送り給候畢抑此御本尊は在世五十年の中には八年八年の間にも涌出品より屬累品まで八品に顯給なり。さて滅後には正法像法末法の中には。正像二千年にはいまだ末門の本尊と申名だにもなし。何に況や顯給はんをや又顯すべき人なし。天台妙樂傳教等は内には鑿給へども故こりあるらめ言には出給はず。彼の顔淵が聞きし事意にはさることといへども言に顯していはざるが如し。然るに佛滅後二千年過て末法の始の五百年に出現せさせ給ふべき由。經文赫赫たり

明明たり天台妙樂等の解釋分明也。爰に日蓮いかなる不思議にてや候らん龍樹天親等天台妙樂等だにも顯し給はざる大曼荼羅を。末法二百餘年の比はとめて法華弘通のはた(旌)じるしとして顯し奉るなり。是全く日蓮が自作にあらず多寶塔中、大牟尼世尊分身の諸佛すりかたぎ(摺形木)たる本尊也。されば首題の五字、中央にかがり四天王は寶塔の四方に坐し。釋迦多寶本化の四菩薩肩を並へ普賢文殊等舍利弗目連等坐を屈し日天月天第六天の魔王龍王阿脩羅。其外不動愛染は南北の二方に陳を取り惡逆の達多愚癡の龍女一座をほり。三千世界の人の壽命を奪ふ惡鬼たる鬼子母神十羅刹女等。加之日本國の守護神たる天照太神八幡大菩薩天神七代地神五代の神神。總じて大小神祇等體の神つらなる其餘の用の神豈もるべきや。寶塔品云、接諸大衆皆在虛空云云。此等の佛菩薩大聖等摠じて序品列坐の二界八番の雜衆等一人もれず。此御本尊の中に住し給妙法五字の光明にてらされて本有の尊形となる是を本尊とは申也。經云、諸法實相是也。妙藥云、實相、必諸法諸法、必十如乃至十界、必身土云云。又云、實相、深理本有、妙法蓮華經等云云。傳教大師云、一念三千即自受用身自受用身者出尊形、佛文。此

故ニ未曾有の大曼荼羅とは名付奉るなり。佛滅後二千二百二十餘年には此御本尊いまだ出現し給はずと云フ事也。かゝる御本尊を供養し奉り給ふ女人。現在には幸をまねぎ後生には此御本尊左右前後に立ちりひて闇に燈の如く險難の處に強力を得たるが如く。彼こへまはり此へより日女御前をかこみまほり給フべきなり。相構へ相構とわり(後斐)を我家へよ(寄)せたくもなき様に謗法の者をせかせ給フべし。捨テ惡知識ヲ親ニ近善友ニとは是也。此御本尊全く餘所に求る事なかれ。只我等衆生ノ法華經ヲ持テ南無妙法蓮華經と唱る胸中の肉團にねはしますなり。是を九識心王眞如の都とは申ス也。十界具足とは十界一界もかけず一界にある也。依テ之曼陀羅とは申ス也。曼陀羅と云フは天竺の名也此には輪圓具足とも功德聚とも名くる也。此御本尊も只信心の二字にをさまれり以信得入とは是也。日蓮が弟子檀那等正直捨方便不受餘經一偈と無二に信する故に。此御本尊の寶塔の中へ入べきなりたのもしたのもし。如何にも後生をたしな(暗)み給ふべし。たしなみ給ふべし。穴賢。南無妙法蓮華經とばかり唱へて佛になるべき事尤モ大切也。信心の厚薄によるべきなり。佛法の根本は信を以て源とす。されば止觀、四ニ云、佛法ハ如シ海ノ唯信能入。弘

決ノ四ニ云、佛法ハ如シ海ノ唯信能入者。孔丘之言尙信ヲ爲レ首ト況ヤ佛法ノ深理無レ信寧ロ入。故ニ華嚴ニ信ヲ爲レ道ノ元功德ノ母ト等。又止ノ一ニ云、何聞ニ圓ノ法ヲ起シ圓ノ信ヲ立テ圓ノ行ヲ住ニ圓ノ位ニ。弘ノ一ニ云、言ニ圓信ト者依テ理ニ起シ信ヲ信ヲ爲レ行ノ本ト云云。外典ニ云、漢王信ニ臣之説ヲ也河上ノ波忽冰リ李廣思ニ父之讎ニ也草中ノ石飲レ羽ヲと云へり。所詮天台妙樂ノ釋分明に信を以て本とせり。彼漢王も疑はずして大臣のことばを信せしかば立波こほり行ふかし。石に矢のたつ是又父のかたきと思し至信の故也。何に況や佛法にわいてをや。法華經を受テ持テ南無妙法蓮華經と唱る即五種の修行を具足するなり。此事傳教大師入唐して道邃和尚に値テ奉テ五種願修の妙行と云フ事を相傳し給ふなり。日蓮が弟子檀那の肝要是より外に求る事なかれ。神力品ニ云。委くは又又可レ申ス候。穴賢穴賢。

建治三年八月二十三日

日蓮 花押

日女御前御返事

○四條金吾殿御返事

啓三六一〇三

鈔二五七七

語五三九

音下四六

拾八三八

扶一五五〇

御文あらあらうけ給て長さ夜のあけとさき道をかへりたるがごとし。夫佛法と申は勝負をとさとし王法と申は賞罰を本とせり。故に佛をば世雄と號し王をば自在となづけたり。中にも天竺をば月氏という我國をば日本と申一閻浮提八萬の國の中に大なる國は天竺小なる國は日本也。名のめでたきは印度第二扶桑第一也。佛法は月の國より始めて日の國にとどまるべし。月は西より出で東に向ひ日は東より西へ行事天然のことはり。磁石と鐵と雷と象華とのごとし。誰か此ことばりをやぶらん。此國に佛法わたりし由來をたづぬれば。天神七代地神五代すきて人王の代となりて第一神武天皇乃至第三十代欽明天皇と申せし王をはしき。位につかせ給て三十二年治世給しに。第十三年壬申十月十三日辛酉に。此國より西に百濟國と申國あり日本國の大王の御知行の國也。其國の大王聖明王と申せし國王あり。年貢を日本國にまいらせしついでに金銅の釋迦佛並に一切經法師尼等をわたしたりしかば。天皇大に喜て群臣に仰て西蕃の佛をあがめ奉るべしやいなや。蘇我の大臣いなめ(稱目)の宿禰と申せし人云。西蕃の諸國みな此を禮すとよあさ(稱秋)やまと

(日本)あに獨り背哉と申。物部の大むらじ(連)をこし(尾輿)の中臣のかまこ(鎌子)等奏曰。我國家天下に君たる人はつねに天地しやうく(社稷)百八十神を春夏秋冬にさいはい(祭拜)するを事とす。しかるを今更あらためて西蕃神を拜せば。をりらぐは我國の神いかりをなさんと云云。爾時天皇わかちがたくして勅宣す。此事只心みに蘇我の大臣につけて一人はあがめさすべし他人用事なかれ。蘇我の大臣うけ取りて大に悦給て。此釋迦佛を我が居住のをばだ(小鷦田)と申るところに入まいらせて安置せり。物部大連不思議なりとていざざをりし程に。日本國に大疫病をこりて死せる者大半に及ぶすでに國民盡べかりしかば。物部大連隙を得て。此佛を失ふべきよし申せしかば勅宣なる。早々佗國の佛法を可棄云云。物部大連御使として佛をば取りて炭をもてをこしつち(髓)をもて打くたき。佛殿をば火をかけてやきはらひ僧尼をばむち(管)をくわう。其時天に雲なくして大風ふき雨ふり内裏天火にやけあがて。大王並に物部大連蘇我臣三人共に疫病ありきるがごとくやくがごとし。大連は終に壽絶ぬ蘇我と王とはからくして蘇生す。而ども佛法を用ユることなくして十九年すぎぬ。第三十一代の敏達天皇は欽明第二の太子治十四年なり。

左右の兩臣は一は物部の大連が子にて弓削の守屋父のあとをついで大連に任ず。蘇我の宿禰の子は蘇我馬子と云云。此王の御代に聖德太子生給へり用明の御子敏達のをい(男)なり。御年二歳の二月東に向つて無名の指を開て南無佛と唱へ給へば御舍利掌にあり。是日本國の釋迦念佛の始也。太子八歳なりしに八歳太子云、西國、聖人釋迦牟尼佛遺像末世尊之、則銷禍蒙福、蔑之、則招災、縮壽、等云云。大連物部弓削宿禰、守屋等、いかりて云、蘇我は勅宣を背きて他國の神を禮す等云云。又疫病未息、人民すでにたぬべし、弓削守屋又此間奏云云。勅宣云、蘇我馬子興行佛法、宜卻佛法等云云。此與守屋中臣、臣勝海大連等兩臣一寺に向つて堂塔を切たらし佛像をやきやふり。寺には火をはなち僧尼の袈裟をはぎ答をもつてせ(責)む。又天皇並に守屋馬子等疫病す。其言云、燒がごとしきるがごとし。又瘡をこるはうさ(疱瘡)といふ。馬子歎て云、尚仰三寶、勅宣云、汝獨行、但斷餘人等云云。馬子欣悅し精舎を造りて三寶を崇ぬ。天皇は終に八月十五日崩御云云。此年は太子は十四なり。第三十二代用明天皇治二年欽明の太子聖德太子の父也。治二年丁未四月に天皇疫病あり、皇勅云、欲歸三寶云云。蘇我大臣可

隨詔、遂引法師ヲ入ル於内裏、豐國法師是也。物部守屋大連等大に瞋り横に睨云、天皇厭魅と終に皇隱とせ給。五月に物部守屋が一族澁河の家にひきこもり多勢をあつめぬ。太子と馬子と押し寄せてた、かう五月六月七月の間に四箇度合戦す。二度は太子まけ給ふ第四度(目)に太子願を立て云、釋迦如來の御舍利塔を立て四天王寺を建立せんと。馬子願云、百濟より所渡釋迦佛を寺を立てて崇重すべしと云云。弓削(名乗)て云、此は我放つ矢にはあらず我先祖崇重の府都の大明神の放ち給ふ矢なりと。此矢はるかに飛んで太子の鎧に中る。太子なる此は我が放つ矢にはあらず四天王の放ち給つ矢なりとて。迹見赤檮と申、舍人にいさせ給へば矢はるかに飛んで守屋が胸に中りぬ。はたのかはかつ(秦川橋)をちあひて頸をとる。此合戦は用明崩御崇峻未即位給、其中間也。第三十三崇峻天皇位につき給。太子は四天王寺を建立す此釋迦如來の御舍利なり。馬子は元興寺と申、寺を建立して百濟國よりわたり候し教主釋尊を崇重す。今代に世間第一の不思議は善光寺の阿彌陀如來という誑惑これなり。又釋迦佛にあだをなせしゆへに三代の天皇並に物部の一族ひなしくなりしなり。又太子教主釋尊の像一體つくらせ給て

元興寺に居せしむ今の橋寺の御本尊これなり。此こり日本國に釋迦佛つくろしはじめなれ。漢土には後漢の第二の明帝永平七年に金神の夢を見博士蔡愔王遵等の十八人を月氏につかはして佛法を尋させ給しかば。中天竺の聖人摩騰迦竺法蘭と申せし二人の聖人を同永平十年丁卯の歲迎へ取て崇重ありしかば。漢土にて本より皇の御いのり(祈)せし儒家道家の人人數千人此事をうねみてうつた(訴)へしかば。同永平十四年正月十五日に召合せられしかば。漢土の道士悦をなして唐土の神百靈を本尊としてありき。二人の聖人は佛の御舍利と釋迦佛の畫像と五部の經を本尊と特估給。道士は本より王ノ前にして習たりし仙經三墳五典二聖三王の書を新につみこめてやきしかば。古はやけざりしがはい(灰)となりぬ。先には水にうかびしが水に沈ぬ。鬼神を呼しも來らず。あまりのはづかしさに褚善信費叔才なんぞ申せし道士等はたもひ死にしぬ。二人の聖人の説法ありしかば舍利は天に登りて光を放て日輪みゆる事なし。畫像の釋迦佛は眉間より光を放給ふ。呂懸通等の六百餘人の道士は歸伏して出家す三十日か間に十寺立ちぬ。されば釋迦佛は賞罰ただしき佛也。上に擧る三代の帝並に二人の臣下釋迦如來の敵

とならせ給て。今生は空しく後生は惡道に墮ぬ。今ノ代又これにかはるべからず。漢土の道士信費等日本の守屋等は漢土日本の大小の神祇を信用して教主釋尊の御敵となりしかば。神は佛に隨奉り行者は皆はるびぬ。今ノ代も如く此上に擧る所の百濟國の佛は教主釋尊也。名を阿彌陀佛と云て日本國をたばちかして釋尊を他佛にかへたり。神と佛と佛との差別てあれども釋尊をすつる心はただ一なり。されば今の代の滅せん事又疑なかるべし。是は未申法門也可秘可秘。又吾一門の人人の中にも信心もうすく日蓮が申事を背給はば蘇我が如くなるべし。其故は佛法日本に立し事は蘇我の宿禰と馬子との父子二人の故がし。釋迦如來の出世の時の梵天帝釋の如くにてころあらまじなれど。物部と守屋とを失し故に只一門になりて位もあがり國をも知行し一門も繁昌せし故に。高擧をなして崇峻天皇を失たてまつり王子を多殺し。結局は太子の御子三十三人を馬子がまご(孫)入鹿の臣下失ひまいらせし故に。皇極天皇の中臣鎌子が計として教主釋尊を造り奉りてあながちに申せしかば。入鹿の臣並に父等の一族一時に滅ぬ。此をもて御推察あるべし。又我此一門の中にも申しとをらせ給はざらん人人はかへ



りて失あるべし。日蓮をうらみさせ給うな少輔房能登房等を御覽あるべし。か  
 まへてかまへて此間はよ(餘)の事なりとも御起請かかせ給うべからず。火はを  
 びただしき様なれども暫くあればしめ(滅)る。水はのろ(鈍)き様なれども無(左  
 右)失(が)たし。御邊は腹あしき人なれば火の燃(が)ごとし。一定人にすかさ  
 なん。又主のうらうら(運々)と言和(ことば)にすか(賺)させ給うならば火に水をかけた  
 る様に御わたりありぬと覺ゆ。また(鍛)はぬかね(金)はさかんなる火に入(れ)  
 ばとく(疾)とけ(湯)候氷をゆ(湯)に入(が)ごとし。劔(つるぎ)などは大火に入(れ)ども  
 暫(しば)とけず是きたへる故也。まへ(前)にかう申(は)きたうなるべし。佛法と申(は)  
 道理也道理と申(は)主に勝物也。いかにいとを(愛)しはな(離)れじと思(め)妻(な  
 れ)ども死しぬればかひなし。いかに所領ををししとをばすとも死しては他人の  
 物(す)でにさかへ(榮)て年久しすこしも惜む事なけれ。又(さ)ささ(さ)さ(さ)申(が)ごとく  
 さ(さ)さ(さ)よりも百千萬億倍御用心あるべし。日蓮は少(わか)き今生のいのり(祈)  
 なし只佛にならんとをもふ計(り)也。されども殿の御事をばひまなく法華經釋  
 迦佛日天に申(也)。其故は法華經の命(いのち)を繼(つ)ぐ人なればと思(也)。穴賢穴賢。あ  
 らかるべからず。吾(が)家にあらずんば人に寄(よ)りあ(ふ)事なけれ。又夜廻(よるまはり)の殿原はひと  
 りもたのもしき事はなけれども。法華經の故に屋敷を取られたる人人なり常  
 はむつ(懸)ばせ給(う)べし。又夜の用心の爲(と)申(か)たがた殿の守りとなるべ  
 し。吾方の人人をば少少の事をばみずさかすあるべし。さて又法門なをを  
 聞(き)ばやと仰(おほ)候はんに悦(よろこ)んで見(ま)ね給(う)べからず。いかに候はんずらん。御弟子  
 共に申(して)こり見候はめとやはや(和々)とあるべし。いかにもうれしさに  
 るに顯(あら)れたんと覺(おぼ)え聞(き)んと思(い)ふ心だにも付(つ)かせ給(う)ならば。火をつけてもすが  
 ごとく天より雨の下(よ)りがごとく萬事をすてられんするなり。又今度いかなる便  
 も出来せばしたゝめ候し陳(ちん)狀(じやう)を上(あ)げらるべし。大事の文(ぶん)なればひとさはぎ(一  
 懸)はかならずあるべし。穴賢穴賢。

日蓮花押

四條金吾殿

○四條金吾殿御返事

法華經本迹相對論迹門スルニ尙始成正覺旨を明す。故レいまだ留難るなんかかれり。本門ハかゝる留難ヲ去りたり。雖レ然ト題目ノ五字に相對する時ハ末法の機ニかなはずる法なり。眞實一切衆生色心留難ヲ止むる祕術。唯南無妙法蓮華經なり。

日蓮

四條金吾殿御返事

○松野殿御返事

鷲目一貫文油一升衣ころも一筆十管給候。今に始めぬ御志申盡ツシがたく候へば法華經釋迦佛に任せ奉り候。先立さきだつてより申候。但在家の御身は餘念もなく日夜朝夕南無妙法蓮華經と唱候て最後臨終の時を見させ給へ。妙覺の山に走り登り四方を御覽せよ。法界寂光土にして瑠璃を以て地とし金繩かねなはを以て八の道をさかひ。天より四種の花ふり虚空に音樂聞ゆ。諸佛菩薩は皆常樂我淨の風にうよめ給へば。我等も必ず其數に列ならん。法華經はかゝるいみじき御經にてをはしまいらせ候。委細はいろいろ候間申さず候。恐恐謹言。

建治三年丁丑九月九日

日蓮花押

松野殿御返事

追申候。目連樹十兩計給候べく候。

○兵衛志殿御書 考四・三

久クうけ給ハねばよくればつかなく候。何よりもあはれにふしぎ(不思議)なる事は大夫志殿と殿との御事不思議に候。常さまには世末になり候へば聖人賢人も皆かくれ。ただざんじむねいじん(譏人倭人)わざん(和譏)さよくり(曲理)の者のみこころ國には充滿すべきと見へて候へば。喩ば水すくなくなれば池さがしく風ふけば大海しづかならず。代末になり候へばかんばち(和)きれい(具)疫癘(具)大雨大風ふきかさなり候へば。廣き心もせばくなり道心ある人も邪見になるどころ見へて候へ。されば他人はさてをきぬ。父母と夫妻と兄弟と諍ツ事れつし(獵師)としか(鹿)とねこ(猫)とねずみ(鼠)とたか(鷹)ときじ(雉)との如しと見へて候。良觀等の天魔法師らが親父左衛門大夫殿をすかし。わどの(和殿)ばら二人を失はんとせしに。殿の御心賢くして日蓮がいさめを御もちる有し

ゆへに。二のわ(輪)の車をたすけ二の足の人をになへるが如く二の羽のどぶが如く日月の一切衆生を助くるが如く。兄弟の御力にて親父を法華經に入しませさせ給ぬる御計偏に貴邊の御身にあり。又眞實の經の御ことばりを代末になりて佛法あながちにみだれば大聖人世に出べしと見へて候。喩へば松のしも(霜)の後に木の王と見へ菊は草の後に仙草と見へて候。代のわさまれるには賢人不見、代の亂れたるにころ聖人愚人は顯候へ。あはれ平、左衛門殿さがみ(相摸)殿、日蓮をだに用とられて候しかば。すぎにし蒙古國の朝使のくびはよも切せまいらせ候はじ。くやくしくはすらなん。人王八十一代安徳天皇と申、大王は天台、座主明雲等の眞言師等數百人かたらひて。源、右將軍頼朝を調伏せしかば還著於本人とて。明雲は義仲に切ぬ安徳天皇、西海に沈給。人王八十二三四隱岐、法皇、阿波、院、佐渡、院、當今已上四人、座主慈圓僧正、御室、三井等の四十餘人の高僧等をもて。平、將軍義時を調伏し給。程に。又還著於本人とて上の四王島島に放給。此の大惡法は弘法慈覺智證の三大師法華經最第一の釋尊の金言を破りて。法華最第二最第三大日經最第一と讀み給。し僻見を御信用有りて。今生には國と身とをほろぼし後生には無間地獄に墮給ぬ。今度は又此調伏三度なり。今我弟子等死したらん、人人は佛眼をもて是を見給。らん。命つれなくて生たらん眼に見よ。國主等は他國へ責、わたされ。調伏の人人は或は狂死或は佗國或は山林にかくるべし。教主釋尊、御使、二度までこうぢ(街路)をわたし。弟子等をろう(牢)に入れ或は殺し或は害し或は所國をわしし故に。其科必ず其國國萬民の身に一一にかかるべし。或は又白癩黑癩諸惡重病の人人はほかるべし。我弟子等此山を存せさせ給へ。恐恐謹言。

九月九日  
蓮花押

此文は別は兵衛の志殿へ。摠は我一門の人人御覽有べし。他人に聞かせ給。な。

明治三十五年十二月十六日富士北山本門寺ニ於テ興上足ノ御寫ヲ以テ對校ス(稻田海妻皮記)

○崇峻天皇御書 啓二八三 鈔一八六 語三三三 音下二五 拾四四六 扶一〇六四

白小袖一領 錢一ゆひ。又富木殿の御文のみなによも。かき(柿)なし(梨)なまひじきひ(千)るひじき。やうやうの物うけ取りしなじな御使にたび候ぬ。

さてはなによりも上の御いたはり(所勞)なげき入って候。たとひ上は御信用なき様に候へども。どの(殿)其内にをばして其御恩のかけ(懸)にて法華經をやしなひまいらせ給へ候へば。偏に上の御祈とすなり候らん。大木の下の小木大河の邊の草は正しく其雨にあたらす其水をぬすといへども。露をつたへいさ(氣)をぬてさから(榮)る事に候。此もかくのごとし。阿闍世王は佛の御かたきなれども其内にありし耆婆大臣 佛に志ありて常に供養ありしかば。其功大王に歸すところ見へて候へ。佛法の中に内黨外護と申す大なる大事ありて宗論にて候。法華經には我深々敬汝等。涅槃經には一切衆生悉有佛性。馬鳴菩薩の起信論には以眞如法常薰習故妄心即滅法身顯現。彌勒菩薩の瑜伽論には見たり。かくれ(隠)たる事のあらはれ(顯)たる徳となり候なり。されば御内の人人には天魔ついて前より此事を知りて殿の此法門を供養するをさ(支)ぬんがために。今度の大妄語をば造り出したりしを。御信心深ければ十羅刹たすけ奉らんがために此病はをこれるか。上は我かたきとばをばさぬども一たんかれらが申す事を用給ぬるによりて。御しよらう(所勞)の大事になりてながしら(長引)せ給うか。彼等が柱とたのむ龍象すでにたうれぬ。和

説せし人も又其病にをかされぬ。良觀は又一重の大科の者なれば大事に値う。大事をひきをこしていかにもなり候はんずらん。よもただは候はじ。此につけても殿の御身もあぶな(危)く思ひませ候。一定かたきにぬらはれさせ給ふなんすぐるく(變)の石は二並とぬればかけられず車の輪は二つあれば道にかたぶかず。敵も二人ある者をばいふせ(危)がり候。いかにとが(科)ありども弟ども且も身をはなち給うな。殿は一定腹あしき相か(面)に顯たり。いかに大事と思へども腹あしき者をば天は守らせ給はぬと知らせ給へ。殿の人にあやまたれてをばさば設と佛にはなり給うとも彼等が悦とと云ふ。此よりの歎とと申し口惜とがるべし。彼等がいかにせんとはげみつるに。古よりも上に引と付られまいらせてをばすれば。外のすがた(妻)はしづま(靜)りたる様にあれども内の胸はもふ(燃)る計りにや有らん。常には彼等に見へぬ様に古よりも家のこ(子)を敬ひさうたち(公達)まいらせ給てをばさんには。上の召とありども且とくつしむべし。入道殿いかにもならせ給はば彼人人はまどひ者になるべきをばかへりみず。物をばへぬ心とどの(殿)のいよいよ來とを見ては。一定後のを(炎)を胸にたきと氣とをさかさま(逆)につく(吐)らん。若とさうたちさり

(權)者の女房たちいかに上の御うらう(所勞)はと問ひ申されば。いかなる人にも候へ膝をかかめて手を合某が力の可及御所勞には候はず候を。いかに辭退申せどもただと仰候へば。御内の者にて候間かくて候とて。びむ(鬚)をもかかず。ひたたれ(直垂)こは(強)からず。さはやかなる小袖色ある物なれども(著)ずして且らくねう(忍)じて御覽あれ。返返御心へ(得)の上なれども末代のありさまを佛の説せ給て候には。濁世には聖人も居しがたし。大火の中(の)石の如し。且らくはこらふるやうなれども終にはやけくた(燒摧)けて灰となる。賢人も五常は口に説きて身には振舞がたしと見へて候。かう(甲)の座をば去れと申す。かし。うこばく(若干)の人の殿を造り落さんとしつるにをどされずしてはやかち(勝)ぬる身が。穩便ならずして造り落されなば。世間に申すこぎこひ(漕漕)での船こば(溢)れ又食の後に湯の無きが如し。上よりへや(部屋)を給て居してをばせば。其處にては何事無とも日ぐれ曉なんど入り返りなんどに定てねらうらん。又我家の妻戸の脇持佛堂家の内の板敷の下か天井なんどをば。あながちに心ひて振舞給へ。今度はさきよりも彼等はたばかり賢かるらん。いかに申すとも鎌倉のむがら(荏柄)夜廻りの殿原にはすぎじ。

いかに心にあはぬ事有りともかたらひ給へ。義経はいかにも平家をばせめたとしがたかりしかども。成良をかたらひて平家をほろぼし。大將殿はれさだ(長田)を親のかたきとをばせしかども。平家を落さざりしには頸を切り給はず。況や此四人は遠は法華經のゆへ近は日蓮がゆへに命を懸けたるやしき(屋敷)を上へ召されたり。日蓮と法華經とを信する人人をば前前彼人人いかなる事ありともかへりみ給べし。其上殿の家へ此人人常にかよう(通)ならばかたき(敵)はよる行あはじとをぢるべし。させる親のかたきならねば顯れてとはよも思はじ。かくれん者は是程の兵士はなきなり。常にむつ(腫)ばせ給へ。殿は腹悪き人にてよも用ひさせ給はじ。若さるならば日蓮が祈りの力及がたし。龍象と殿の兄とは殿の御ためにはあし(悪)かりつる人ぞかし。天の御計に殿の御心の如くなるがかし。いかに天の御心に背かんとはをばするが。設千萬の財をみちたりとも上にすてられまいらせ給ては何の詮かあるべき。已に上にはをや(親)の様に思はれまいらせ水の器に隨が如くこうし(權)の母を思ひ老者の杖をたのむが如く。主のどの(殿)を思食されたるは法華經の御たすけにあらずや。あらうらや(羨)ましやとて御内の人人は思はる

るらめ。とくどく此四人かたら(語)ひて日蓮にき(聞)かせ給へ。さるならば強盛に天に申べし。又殿の故御父御母の御事も左衛門尉があまりに歎き候すと天にも申入ッて候也。定ッて釋迦佛の御前に子細候らん。返々今に忘れぬ事は頸切れんとせし時。殿はとも(供)して馬の口に付てなきかなし(泣悲)み給しをば。いかなる世にか忘らん。設殿の罪ふかくして地獄に入り給はば。日蓮をいかに佛になれと釋迦佛こしら(誘)へさせ給ッとも用ひまいらせ候べからず。同地獄なるべし。日蓮と殿と共に地獄に入らば釋迦佛法華經も地獄にこうをばしまさずらめ。暗に月の入がごとく湯に水を入がごとく氷に火をたくがごとく日輪にやみ(暗)をなく(投)るが如くこり候はんずれ。若すこしも此事をたがへさせ給ッならば日蓮うらみさせ給な。此世間の疫病ほどのまう(申)がごとく年歸りなば上へあがりぬとをば候。十羅刹の御計か今且世にをはして物を御覽あれかし。又世間のすぎぬやうばし歎て人に聞かせ給ッな。若さるならば賢人にははづ(外)れたる事なり。若さるならば妻子があと(後)にとどまりてはぢ(恥)を云とは思はぬども。男のわか(別)れのれし(情)とて他人に向て我夫のはぢをみなかた(語)るなり。此偏にかれが

失にはあらず我ふるまひ(振舞)のわし(悪)かりつる故也。人身は受ッがたし爪上の土人身は持ッがたし艸の上の露。百二十まで持て名をくたし(應)て死せんよりは。生きて一日なりとも名をあげん事こり大切なれ。中務三郎左衛門尉は主の御ためにも佛法の御ためにも。世間の心ね(根)もよ(吉)かりけりよかりけりと。鎌倉の人人の口にうたはれ給へ。穴賢穴賢。藏の財よりも身の財すぐれたり身の財より心の財第一なり。此御文を御覽あらんよりは心の財をつませ給ッべし。第一祕藏の物語あり書てまいらせん。日本始ッて國王二人人に殺され給ッ。其一人は崇峻天皇也。此王は欽明天皇の御太子 聖徳太子の伯父也。人王第三十三代の皇にてをばせしが聖徳太子を召ッて勅宣下。汝は聖智の者と聞く朕を相してまいらせよと云云。太子三度まで辭退申させ給しかども頻りの勅宣なれば止がたくして敬て相しまいらせ給。君は人に殺され給ッべき相ましますと。王の御氣色かはらせ給てなにと云ッ證據を以て此事を信すべし。太子申させ給はく御眼は赤き筋とをりて候人にわたまるる相也。皇帝勅宣を重テ下ッしいかにしてか此難を脱らん。太子云ッ免脱がたし。但五常と申ッものはもの(兵)あり此を身に離し給ッば害を脱給はん。此つはも

のどば内典には忍波羅蜜と申して六波羅蜜の其一也と云云。且は此を持給て  
 をはせしがややもすれば腹あしき王にて是を破らせ給と云。有時人猪の子をま  
 いらせたりしかば。かうがい(舞刀)をぬきて猪の子の眼をつぶつぶとさせ  
 給て。いつか(何日)にくし(憎)と思つやつ(奴)をかくせんと仰ありしかば。太  
 子其座にをはせしが。あらあさましやあさましや君は一定人にあたまれ給とな  
 ん。此御言は身を害する劍なりとて。太子多の財を取り寄せて御前に此言を  
 聞し者に御ひきで物ありしかども。有人蘇我ノ大臣馬子と申せし人に語りし  
 かば。馬子我事なりとて東ノ漢ノ直駒 直磐井と申者、子をかたらひて王を  
 害しまいらせつ。されば王位の身なれども思つ事をばたやすく申ぬ。孔子  
 と申せし賢人は九思一言とてこのたび(九度)れもひて一度申。周公旦と申  
 せし人は沐する時は三度握り食時は三度はさ給と云。たしかにさこしめせ我  
 ばし恨みさせ給つな。佛法と申は是にて候。一代の肝心は法華經 法華經  
 の修行の肝心は不輕品にて候なり。不輕菩薩の人を敬しはいかなる事。教  
 主釋尊の出世の本懐は人の振舞にて候ける。穴賢穴賢。賢さを人と云は  
 かなきを畜といふ。

建治三年丁丑九月十一日

日 蓮 花 押

四條左衛門尉殿御返事

○富木入道殿御返事 啓三三二七 鈔三三三六 語四四一 記下二九 拾七二七 扶三三二  
 御文粗拜見仕候畢。御狀ニ云、常忍ノ云、記ノ九ニ云、稟權出界名爲虛出云云。了  
 性房云、全ク以テ無ニ其釋ニ云云。記ノ九ニ云、品ノ虛無有虛出 至昔虛爲實故ニ者爲  
 字去聲稟權出 出界名爲虛出。三乘ハ無シ不皆出ニ三界ヲ人天無シ不爲  
 出ニ三途ニ並ニ名爲虛出云云。文句ノ九ニ云、無シ有ニ虛出 而モ不入ラ實ニ者 故  
 知昔ノ虛ハ爲レ實ノ故也云云。壽量品ニ云、諸ノ善男子如來見テ諸ノ衆生樂ヲ於小  
 法ニ德薄垢重ノ者乃至以諸衆生乃至未曾暫廢云云。此經の文を承テ天台妙樂  
 釋也。此經文ハ者初成道ノ華嚴ノ別圓乃至法華經ノ迹門十四品。或ニ云ニ小法  
 或ハ德薄垢重或ハ虛出等ト説ル經文也。若然者華嚴經ノ華嚴宗 深密經ノ法相宗  
 般若經ノ三論宗 大日經ノ眞言宗 觀經ノ淨土宗 楞伽經ノ禪宗等の諸經ノ諸宗は。  
 如ニ依經ノ讀ニ誦 其經ヲ不レ出テ三界ヲ不レ出テ三途ヲ者也。何ニ況ヤ或ハ彼を稱レ實ト或  
 は勝等云云。此人人向テ天ニ吐レ唾ヲ 觸レテ地ヲ爲レ忿テ者歟。於ニ此法門ニ如來滅後

月氏一千五百餘年付法藏の二十四人龍樹天親等知つて未レ顯レ此。漢土一千餘年の餘人も未レ知レ之。但天台妙樂等粗演レ之。雖レ然未レ顯レ其實義。歟傳教大師以テ如レ是。今日蓮粗勘レ之。法華經之此文。重テ演レ涅槃經ニ云、若於三法ニ修ニ異ノ想ヲ者ハ當ニ知レ是ノ輩ハ清淨ノ三歸則無ク依處ニ所有ノ禁戒皆不ニ具足セ。終ニ不能レ證ニ聲聞緣覺菩薩之果ヲ等云云。此經文正ク顯レ說法華經ノ壽量品ヲ也。壽量品は譬ハ木ニ爾前迹門をば譬レ影ニ之文なり。經文に又有レ之。五時八教當分跨節大小ノ益ハ如レ影ノ本門の法門は如レ木ノ云云。又壽量品已前之在世之益は關中ノ木影也過去に聞ク壽量品一者ノ事也等云云。又不信ハ非ニ謗法ニ申メ事。又云、不信ノ者不レ墮ニ地獄ニ事。五ノ卷ニ云ク生レ疑テ不信者ハ則當ニ墮ク惡道ニ云云。總テ御心へ候へ。法華經與ニ爾前引キ向ク判ニ勝劣淺深ヲ當分跨節ノ事有リ三様。日蓮が法門は第三の法門也。世間ニ粗如ク夢ノ一二をば申セども第三不レ申テ候。第三ノ法門は天台妙樂傳教も粗示レ之。未ニ事畢ハ所詮讓リ與末法之今ニ也五五百歲は是也。但此法門ノ御論談は余は不レ承候。彼は廣學多聞の者也。はばかり(憚)はばかりみた(見)みた(候)しかば。此方のまけ(負)なんども申ッつけられなばいかながし候べき。但彼法師等が彼の釋を知リ候はぬはさてをき候ぬ。六十

卷になしなんと申メは天のせめなり。謗法の科の法華經の御使に値ッて顯レられ候なり。又此沙汰の事を定めてゆへありて出來せり。かしま(賀島)の大田次郎兵衛大進房又本院主もいかにとや申メよくよく(聞)かせ給テ候へ。此等は經文に子細ある事なり。法華經の行者をば第六天の魔王の必障べきにて候。十境の中の魔境此也。魔の習ヒは善を障へて惡を造シしむるをば悦フ事に候。強テ惡を不レ造者をば力不レ及シして善を造ししむ。又二乗の行をなす物をばあながちに怨をなして善をすゝむるなり。又菩薩の行をなす物をば遮テ二乗の行をすゝむ。最後に純圓の行を一向になす者をば兼別等に墮なり。止觀の八等を御らむあるべし。又彼云、止觀ノ行者は持戒等云云。文句の九には初二三の行者の持戒をば此をせい(制)す經文又分明也。止觀に相違の事は妙樂問答有リ之レ記ノ九可見。初隨喜有リ二利根の行者持戒を兼たり鈍根は持戒誓止之。又正像末の不同もあり。攝受折伏の異あり。傳教大師の市の虎ノ事思ヒ合すべし。此より後は下總にては御法門候べからず。了性思念をつめ(詰)つる上は他人と御論候わばかりてあさ(淺)くなりなん。彼了性と思念とは年來日蓮をうしるとうけ給へる。彼等程の蚊虻の者が日蓮程の師子王を不レ聞



不見して。うはのうらにりしる程のれこじん(嗚呼人)なり。天台法華宗の者  
 ならば我は南無妙法蓮華經と唱へて。念佛なんぞ申す者をばあれ(彼)はさる事な  
 んぞ申すだにもさくわい(奇怪)なるべきに。其義なき上(上)偶(偶)申す人をうしるでう  
 (條)あらふしぎ(不思議)ふしぎ。大進房が事さささかき(書)つかわして候やう  
 につよ(強)づよとかき上(上)申させ給へ候へ。大進房には十羅刹のつかせ給て引  
 かへしせさせ給つとをばへ候。又魔王の使者なんぞがつきて候けるがはなれ  
 て候とをばへ候。惡鬼入其身はよもろら事にては候はじ。事事重候(重)とも  
 此使(使)うるぎ候へばよる(夜)かき(書)て候。恐恐謹言。

十月一日

日 蓮花押

○兵衛志殿女房御返事 微下(下) 考八二

銅(銅)御器(御器)二給(給)畢(畢)。釋迦佛(釋迦佛)三十、御年佛(御年佛)になり始(始)てをばし候時。牧牛女(牧牛女)と申せ  
 し女人(女人)乳(乳)のかい(劑)をに(煮)て佛(佛)にまいらせんとし候し程に。いれてまいら  
 すべき器(器)なし。毗沙門天王(毗沙門天王)等の四天王(四天王)四鉢(四鉢)を佛(佛)にまいらせたりし。其鉢(鉢)を  
 うちかさねてかい(劑)をまいらせしに佛(佛)にはならせ給。其鉢(鉢)後(後)には人ももら  
 (盛)ぞりしかども常に飯(飯)のみち(満)し也。後(後)馬鳴菩薩(馬鳴菩薩)と申せし菩薩(菩薩)傳(傳)へて金錢  
 三貫(三貫)ぼら(報)じたりし也。今御器(御器)二を千里(千里)にをくり釋迦佛(釋迦佛)にまいらせ給へ  
 ば。かの福(福)のごとくなるべし。委(委)は申(申)さず候。

建治三年丁丑十一月七日

日 蓮花押

兵衛志殿女房御返事

○太田殿女房御返事 啓三六三 鈔二五五 語五五九 拾八三 扶一五七

柿(柿)のあをうらの小袖(小袖)わた十兩(十兩)に及(及)で候か。此大地(大地)の下(下)に二(二)の地獄(地獄)あり。一  
 には熱地獄(熱地獄)すみ(炭)ををこし野(野)に火(火)をつけせうま(燒亡)の火鐵(火鐵)のゆ(湯)のど  
 とし。罪人(罪人)のやくる事(事)は大火(大火)に紙(紙)をなげ(火)にかなくづ(木屑)をなぐるがど  
 とし。この地獄(地獄)へはやさとり(燒盜)と火(火)をかけてかたきをせめ物(物)をねたみて  
 胸(胸)をこがす女人(女人)の墮(墮)る地獄(地獄)也。二には寒地獄(寒地獄)此地獄(此地獄)に八(八)あり。涅槃經(涅槃經)云、  
 八種(八種)の寒地獄(寒地獄)所謂(所謂)阿波波地獄(阿波波地獄)阿吒吒地獄(阿吒吒地獄)阿羅羅地獄(阿羅羅地獄)阿婆婆地獄(阿婆婆地獄)優鉢羅  
 地獄(優鉢羅地獄)波頭摩地獄(波頭摩地獄)拘物頭地獄(拘物頭地獄)芬陀利地獄(芬陀利地獄)云云。此八大(八大)かん(寒)地獄(地獄)は或(或)はか  
 ん(寒)にせめられたるこ(聲)或(或)は身のいる等(等)にて候。此國(此國)のすわ(諏訪)の御(御)いけ

或は越中のたて(立)山のかへる(北風)。加賀の白山しらふやまのれい(嶺)のとり(鳥)のはね(羽)をとぢられ。やもめをうな(竄婦)のすり(襪)のひゆ(冷)る。ほろ(維千)の雪にせめられたるをもてしるしめすべし。かん(寒)にせめられてとどがい(願)のわなめく等を阿波波阿吒吒阿羅羅等と申。かんにせめられて。身のくれないに(似)たるを紅蓮大紅蓮等と申。なり。いかなる人の此地獄にをづるがと申せば。此世にて人の衣服をぬすみとり父母師匠等のさむげなるをみまいらせて。我はあつくあたゝかにして晝夜をすす人人の墮る地獄也。六道の中に天道と申。は其所に生ずるより衣服とゝのをりて生るるところ也。人道の中に商那和修鮮白比丘尼等は悲母の胎内より衣服とゝのをりて生給へり。是はたうと(貴)き衣きぬをまいらせたる人也。商那和修と申せし人は裸形なりしよ(清)くあつ(厚)き衣きぬをまいらせたる人也。商那和修と申せし人は裸形なりし。辟支佛に衣きぬをまいらせて世生生に衣服身に隨ふ。憍曇彌と申せし女人は佛にさんばら衣きぬをまいらせて一切衆生喜見佛となり給。今法華經に衣きぬをまいらせ給。女人あり。後生にはかん地獄の苦をまぬかれさせ給。のみならず今生には大難をはらひ。其功德のあまりを男女のきんだち(公達)きぬ(衣)にきぬをか

さねいろ(色)にいろをかさね給べし。穴賢穴賢。

建治二年丁丑十一月十八日

日 蓮 御在判

太田入道殿女房御返事

○曾谷入道殿御返事 微上三 考四三四

妙法蓮華經一部一卷小字經御供養のために御布施に小袖二重 鷲目十貫 並 扇百本。文句ノ一ニ云、如是者舉ニ所聞之法體ヲ記ノ一ニ云、若非ニ超八之如是ニ安爲ニ此經之所聞ニ云云。華嚴經ノ題ニ云、大方廣佛華嚴經如是我聞云云。摩訶般若波羅蜜經如是我聞云云。大日經ノ題ニ云、大毗盧遮那神變加持經如是我聞云云。一切經の如是は何なる如是がやと尋ねれば上ノ題目を指して如是とは申也。佛何ノ經にてもとかせ給。し其所詮の理をさして題目とはせさせ給。しを。阿難文殊 金剛手等滅後に結集し給。し時。題目をうちをい(打置)て如是我聞と申せし也。一經の内の肝心は題目にねさまれり。例せば天竺と申。國あり九萬里七十箇國也然ども其中の人畜草木山河大地皆月氏と申。二字の内にねされ(歴々)たり。譬は一四天下の内に四洲あり其中の一切の萬物は月に移りて

すこしもかくるる事なし。經も又如是、其經の中の法門は其經の題目の中にあり。阿含經の題目は一經の所詮無常の理をたゞめたり。外道の經の題目のあう(阿耨)の二字にすぐれたる事百千萬倍也。九十五種の外道阿含經の題目を聞いてみな邪執を倒し無常の正路にれもむきぬ。般若經の題目を聞いては體空、但中、不但中の法門をさとり。華嚴經の題目を聞、人は但中、不但中のさとりあり。大日經方等般若經の題目を聞、人は或、折空或、體空或、但空或、不但空或、但中、不但中の理をばさるとれども。いまた十界互具百界千如三千世間の妙覺の功德をばさかず。その詮を説ざれば法華經より外は理即の凡夫也。彼經經の佛菩薩はいまだ法華經の名字即に及ばず。何、況、題目をも唱へざれば觀行即にいたるべしや。故、妙樂大師、記云、若非、超八之如是、安、爲、此經之所聞云云。彼の諸經の題目は八教の内也。網目の如、此經の題目は八教の網目に超、大綱と申、物也。今妙法蓮華經と申す人人はるの心をしらざれども法華經の心をうるのみならず一代の大綱を覺り給へり。例せば一二三歳の太子位につき給、ぬれば。國は我が所領也。攝政關白已下は我所從なりとはし(知)せ給はねどもなにも此太子の物也。譬ば小兒は分別の心なければ悲

母の乳を口にのみぬれば自然に生長するを。趙高が様に心れど(憐)れる臣下ありて太子をあなづれば身をほろぼす。諸經諸宗の學者等法華經の題目ばかりを唱、る太子をあなづりて趙高が如くして無間地獄に墮、る也。又法華經の行者の心もしらず題目計、を唱、るが。諸宗の智者にたゞされて退心をれこそは。こがい(胡亥)と申せし太子が趙高にたゞされころさ(殺)れしが如し。南無妙法蓮華經と申、は一代の肝心たるのみならず法華經の心也。體也。所詮也。かゝるいみじき法門なれども佛滅後二千二百二十餘年の間。月氏に付法藏の二十四人弘通し給はず。漢土の天台妙樂も流布し給はず。日本國には聖德太子傳教大師も宣説し給はず。されば和法師が申、は僻事にてころ有、らめと諸人疑、て信せず是又第一の道理也。譬ば昭君なんどをあやしの兵なんどがれかし(犯)たてまつるを。みな人よもさはあらじと思へり。大臣公卿なんどの様なる天台傳教の弘通なからん法華經の肝心南無妙法蓮華經を。和法師程のものがいかで唱、べしと云云。汝等是を知、や鳥と申、鳥は無下のげす鳥なれども鷲、鵬の不知、年中の吉凶を知れり。蛇と申、蟲は龍象に不、及、七日の間の洪水を知、か。設、龍樹天台の知、給はざる法門なりとも經文顯然ならば

なにをか疑はせ給ふべき。日蓮をいやしみて南無妙法蓮華經と唱へさせ給はぬは小兒が乳をうたがふてなめず病人が醫師を疑て薬を服せざるが如し。龍樹天親等は是を知り給へども時なく機なければ弘通し給へざるか。餘人は又しらずして宣傳せざるか。佛法は時により機によりて弘る事なれば。云々にかひなき日蓮が時にころあたりて候らめ。所詮妙法蓮華經の五字をば當時の人は名と計思へり。さにては候はず體也體とは心にて候。章安云、蓋序王者叙三經、立意、述於文、心云云。此釋、心は妙法蓮華經と申すは文にあらず義にあらず一經の心なりと釋せられて候。されば題目をはなれて法華經の心を尋る者は猿をはなれて肝をたづねしはかなき龜也。山林をすてて菓を大海の邊にもとめし猿猴也。はかなしはかなし。

建治三年丁丑霜月二十八日

日蓮花押

曾谷次郎入道殿

○庵室修復書

去文永十一年六月十七日にこの山のなかにき(木)をうちきりてかりりめにあむち(庵室)をつくりて候しが。やうやく四年がほどもはしら(柱)くち(朽)かきかへ(牆壁)をもち候へどもなを(直)す事なくて。よる(夜)ひ(火)をとばさねども月のひかりにて聖教をよみまいらせ。われと御經をまさ(巻)まいらせ候はねども風をのづからふきかへ(吹返)しまいらせ候しが。今年は十二のはしら(柱)四方にかふべ(頭)をな(投)げ。四方のかべは一(所)にたう(倒)れぬ。うだい(有待)たもちがた(保難)ければ。月はす(住)め雨はとどま(止)れとはげみ候つるほども。人ふ(夫)なくしてかくしやうども(學生共)をせめ。食なくしてゆき(雪)をもちて命をたすけて候ところに。さき(前)にうへのどの(上野殿)よりちも(幸)二駄これ一だはたま(珠)にもすぎ。

明治三十六年三月十八日延山御眞蹟ノ寫ヲ以テ校正ス(稻田海素記)

○大白牛車書 微上一五 考三一四

夫法華經第二卷ニ云ク乘リ此寶乘ニ直ニ至道場ニ云云。日蓮は建長五年四月二十八日初テ此大白牛車の一乘法華の相傳を申シ顯はせり。而ニ諸宗の人師等雲霞の如くよせ來リ候。中にも眞言淨土禪宗等蜂の如く起りせめたゝかふ。日蓮大白牛車の牛の角最第一也と申テたゝかふ。兩の角は本迹二門の如く二乗作佛 久遠實成是也。すでに弘法大師は法華最第一の角を最第三となをし。一念三千久遠實成即身成佛は法華に限れり是をも眞言經にありとなをせり。かゝる謗法の族を責んとするに返テ彌怨をなし候。譬ば角をなをさんとて牛をころしたるが如くなりぬべく候ひしかども。いかでさは候べき。抑此車と申ハ本迹二門の輪を妙法蓮華經の牛にかけ。三界の火宅を生死生死とぐるりぐるりとまは(廻)り候ところの車也。ただ信心のくさび(轆)に志のあぶ(膏)らをささせ給テ靈山淨土へまいり給ッべし。又心王は牛の如し生死は兩の輪の如し。傳教 大師云ク生死ノ二法ハ一心ノ妙用有無ノ二道ハ本覺ノ眞徳云云。天台云ク十如只是乃至今境是體云云。此文釋能案じ給ッべし。南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經。

十二月十七日

日蓮花押

○聖密房御書 啓三六二八 鈔二五八〇 語五四四 拾八五一 扶一五五四

大日經をば善無畏不空金剛智等の義ニ云ク大日經の理と法華經の理とは同事なり。但印と眞言とが法華經は劣なりと立たり。良諳和尚廣修維錫なんぞ申人ハ大日經は華嚴經法華經涅槃經等には及ばず但方等部の經なるべし。日本の弘法大師云ク法華經は猶華嚴經等に劣れりまして大日經には及ッべからず等云云。又云ク法華經は釋迦の説 大日經は大日如來の説 教主既にことなり。又釋迦如來は大日如來の御使として顯教をとき給ッこれは密教の初門なるべし。或云ク法華經の肝心壽量品の佛は顯教の中にしては佛なれども密教に對すれば具縛の凡夫なりと云云。日蓮勘云ク大日經は新譯の經唐ノ玄宗皇帝の御時開元四年に天竺の善無畏三藏もて來る。法華經は舊譯の經後秦の御宇に羅什三藏もて來る。其中間二百餘年なり。法華經互テ後百餘年を経て天台智者大師教門には五時四教を立てて。上五百餘年の學者の教相をやぶり。觀門には一念三千の法門をとりて始めて法華經の理を得たり。天台大師已前の三論

宗已後の法相宗には八界を立て十界を論せず一念三千の法門をば立つべきやうなし。華嚴宗は天台已前には南北の諸師華嚴經は法華經に勝たりとは申しけれども華嚴宗の名は候はず。唐の代に高宗の后則天皇后と申す人の御時法藏法師澄觀なんど申す人華嚴宗の名を立てたり。此宗は教相に五教を立て觀門には十立六相なんど申す法門なり。をびただしきやうにみへたりしかども。澄觀は天台をば(被)するやうにてなを天台の一念三千の法門をかり(借)とりて我經の心如工畫師の文の心とす。これは華嚴宗は天台に落たりというべきか。又一念三千の法門を盜とりたりというべきか。澄觀は持戒の人大小の戒を一塵をよやぶらざれども一念三千の法門をばぬすみとれりよくよく口傳あるべし。眞言宗の名は天竺にありやいな(否)や大なる不審なるべし。但眞言經にてありけるを善無畏等の宗の名を漢土にして付たりけるかよくよくしるべし。就中善無畏等法華經と大日經との勝劣をはん(判)するに理同事勝の釋をばつくりて。一念三千の理は法華經大日經これ同じなんどいへども。印と眞言とが法華經には無ければ事法は大日經に劣れり。事相かけぬれば事理俱密もなしと存せり。今日本國及諸宗の學者等並にこと(殊)に用へべからざる

る天台宗共にこの義をゆるせり。例せば諸宗の人人をばるねめども一同に彌陀の名をとなへて自宗の本尊をすてたるがごとし。天台宗の人人は一同に眞言宗に落たる者なり。日蓮理のゆくところを不審して云々善無畏三藏の法華經と大日經とを理は同じく事は勝たりと立は。天台大師の始て立給へる一念三千の理を今日大日經にとり入て同と自由に判する條ゆるさるべしや。例せば先に人丸(ひとたまご)がほのぼのとあかし(明石)のうら(浦)のあさざり(朝霧)にしま(島)かくれゆくふね(船)をしずをもうとよめるを。紀のしくばう(瀬望)源のしがう(順)なんどが判云々。此歌はうたの父うたの母等云云。今の人我うたよめりと申てほのぼのと乃至船をしずをもうと一字をもたがへずよみて。我が才は人丸(ひとたまご)にとらずと申すをば人これを用へしや。やまかつ(山左)海人(うみびと)なんどは用事(もちごと)もありなん。天台大師の始て立給へる一念三千の法門は佛の父佛の母なるべし。百餘年已後の善無畏三藏がこの法門をぬすみとりて大日經と法華經とは理同(りどう)なるべし。理同と申すは一念三千なりとかけるをば智慧かしこき人は用へしや。事勝(じしょう)と申すは印眞言(いんしんごん)なしなんど申すは天竺の大日經法華經の勝劣か漢土の法華經大日經の勝劣か。不空三藏の法華經の儀軌には法華經

に印 眞言をうへて譯せり。仁王經にも羅什の譯には印 眞言なし不空の譯の仁王經には印 眞言これあり。此等の天竺の經經には無量の事あれども。月氏漢土國をへだててとをくことどもちて來がたければ經を略するなるべし。法華經には印 眞言なれども二乗作佛劫國名號 久遠實成と申さば(規換)の事あり。大日經等には印 眞言はあれども二乗作佛 久遠實成これなし。二乗作佛と印 眞言とを並ぶるに天地の勝劣なり。四十餘年の經經には二乗は敗種の人と一字二字ならず無量無邊の經經に嫌はれ。法華經にはこれを破して二乗作佛を宣たり。いづれの經經にか印 眞言を嫌ふことばあるや。るの言なければ又大日經にも其名を嫌はず但印 眞言をとけり。印と申は手の用なり手佛にならずば手の印 佛になるべしや。眞言と申は口の用なり口 佛にならずば口の眞言 佛になるべしや。二乗の三業は法華經に値たてまつらざる無量劫千二百餘尊の印 眞言を行すとも佛になるべからず。勝れたる二乗作佛の事法をばとかすと申して劣る印 眞言をとける事法をば勝れたりと申は。理によれば盜人なり事によれば劣謂勝見の外道なり。此失によりて閻魔の責をばかほりし人なり。後にくい(悔)かへして天台大師を仰いで法華にうつりて惡

道をば脱しなり。久遠實成なんどは大日經にはをもひもよらず。久遠實成は一切の佛の本地譬へば大海は久遠實成 魚鳥は千二百餘尊なり。久遠實成なくば千二百餘尊はうさくさ(華)の根なきがごとし夜の露の日輪の出づる程なるべし。天台宗の人人この事を辨へずして眞言師にたばらかされたり。眞言師は又自宗の誤をしらすいたづらに惡道の邪念をつみとく。空海和尚は此理を辨へざる上華嚴宗のすでにやぶられし邪義を借とりて。法華經は猶華嚴經にをどれりと僻見せり。龜毛の長短 兎角の有無。龜の甲には毛なしなんが長短をあらうい兎の頭には角なしなんの有無を論せん。理同と申人いまだ閻魔のせめを脱れず大日經に劣る華嚴經に猶劣と申人謗法を脱べしや。人はかかれども其謗法の義同かるべし。弘法第一の御弟子かきのもと(柿本)き(紀)の僧正紺青鬼となりし。これをもてしるべし。空海悔改なくば惡道疑べしどもをばい其流をうけたる人人又いかん。問云、わ法師一人此惡言をばく如何。答云、日蓮は此人人を難ずるにはあらず但不審する計なり。いか(怒)ればせばさでをばしませ。外道の法門は一千年八百年五天にはびこりて輪王より萬民からう(頭)をかたふけたりしかども。九十五種共に佛にやぶら

れたりき。攝論師せんろんしが邪義百餘年なりしもやぶれき。南北の三百餘年の邪見もやぶれき。日本二百六十餘年の六宗の義もやぶれき。其上此事は傳教大師のあるがみ或書の中にやぶられて候を申すなり。日本國は大乘に五宗あり法相三論華嚴真言天台小乘に三宗あり俱舎成實律宗なり。真言華嚴三論法相は大乘よりいでたりといへどもくわしく論ずれば皆小乘なり。宗と申すは戒定慧の三學を備へたる物なり。其中に定慧はさてをきぬ。戒をもて大小のばうじ(勝示)をうちわかつものなり。東寺真言法相三論華嚴等は戒壇なきゆへに東大寺に入つて小乘律宗の驢乳臭糞の戒を持つ。戒を用つて論せば此等の宗は小乘の宗なるべし。比叡山には天台宗真言宗の二宗傳教大師習つたへ給たりしかども。天台圓頓圓定圓慧圓戒の戒壇立つべきよし申させ給しゆへに。天台宗に對しては真言宗の名あるべからずとをばして。天台法華宗の止觀真言とありばして公家へまいらせ給き。傳教より慈覺たまはらせ給し誓戒の文には。天台法華宗の止觀真言と正くのせられて真言宗の名をけつ(削)られたり。天台法華宗は佛立宗と申して佛より立られて候。真言宗の真言は當分の宗論師人師始て宗の名をたてたり。而を事を大日如來彌勒菩薩等に

よせたるなり。佛御存知の御意は但法華經一宗なるべし。小乘には二宗十八宗二十宗候へども但所詮の理は無常の理なり。法相宗は唯心有境。大乘宗無量の宗ありとも所詮は唯心有境とだにいはば但一宗なり。三論宗は唯心無境。無量の宗ありとも所詮唯心無境ならば但一宗なり。此は大乘の空有の一分歟。華嚴宗真言宗あが(上)らば但中くだ(下)らば大乘の空有なるべし。經文の説相は猶華嚴般若にも及ばず。但しよき人とをばしき人人の多々信たるあいだ。下女を王のあい(愛)するに(似)たり。大日經等は下女のごとし理は但中にすぎず。論師人師は王のごとし人のあいするによていば(威)望があるなるべし。上の問答等は當時は世すね(未)になりて人の智淺、慢心高キゆへに用ふる事はなくとも。聖人賢人なんども出たらん時は子細もやあらんすらん。不便にをもひまいらすれば目安めやすに注せり。御ひまにはならはせ給へし。これは大事の法門なり。こくう(虚空)菩薩にまいりて。つねによみ奉らせ給へし。

日蓮花押

聖密房遺之



# 高祖遺文錄卷之二十四

## ○法華經二十重勝諸教義

微下二〇 卷八三

### 南無妙法蓮華經

東春云、問、何故、謗、經、入、無、問、耶。答、一、乘、是、極、樂、經、謗、極、妙、法、故、感、極、苦、處、也。初者謗極法及以尊人故。受極賤獸報。二者謗平等大慧之經故。受愚獸報。三者佛有權實。二教執權。而破實。故得一目報。四謗法。毀人。之時。心生瞋恚。故受蛇身。報。經。其形長大者。瞋。大法。故。受。大。苦。身。報。不。對。聞。法。故。受。瞋。病。報。不。受。行。法。故。受。無。足。報。愚。癡。謗。經。故。得。暗。鈍。報。憍。慢。心。謗。故。得。煙。陋。報。謗。微。妙。法。故。得。醜。陋。報。謗。正。直。經。故。得。背。偃。報。經。貧。窮。下。賤。為。人。所。使。者。經。備。萬。德。為。福。貴。一。謗。富。貴。經。故。得。貧。賤。報。乘。於。一。乘。而。遊。四。方。得。大。自。在。今。謗。自。在。經。故。得。不。自。在。報。故。云。為。人。所。使。此。經。能。破。凡。夫。二。乘。菩。薩。病。下。經。云。若。人。有。病。病。即。消。滅。一。謗。無。病。經。故。得。多。病。報。記。四。云。今。依。義。附。文。略。有。二。雙。以。辦。異。相。一。與。二。乘。近。記。

二開如來、遠本。二隨喜、歎。第五十、人。四聞益、至。一生補處。五釋迦、指。三逆、調達。為本師。六文殊、以八歲、龍女、為所化。七凡聞、一句、咸、與、授記。八守、護、經、名、功、不、可、量。九聞、品、受、持、永、辭、女、質、十若、聞、讀、誦、不、老、不、死。十一五種、法師、現、獲、相、似。十二安樂行、夢、入、銅、輪。十三若、惱、亂、者、頭、破、七、分、十、四、有、二、供、養、者、福、過、十、號。十五況、已、今、當、一、代、所、絕。十六歎、其、教、法、十、喻、稱、揚。十七從、地、涌、出、阿、逸、多、不、識、一、人。十八東方、蓮、華、龍、尊、王、未、知、相、本。十九況、迹、化、舉、三、千、墨、點。二十本、成、喻、五、百、微、塵。本迹、事、希、諸、教、不、說、云。一與、二、乘、近、記。者、經、云、舍、利、弗、汝、於、未、來、世、過、無、量、無、邊、不、可、思、議、劫。供、養、若、千、千、萬、億、佛。奉、持、正、法。具、足、菩、薩、所、行、之、道。當、得、作、佛。號、曰、華、光、如、來。國、名、離、垢。私、云、三、周、聲、聞、授、記。有、三、總、別。經、第、五、云、我、先、總、說、一、切、聲、聞、皆、已、授、記。文。弘、決、六、云、徧、尋、法、華、已、前、諸、教、實、無、二、乘、作、佛、之、文。云。二開、如、來、遠、本、者、經、云、我、實、成、佛。已、來、無、量、無、邊、百、千、萬、億、那、由、佗、劫。譬、如、三、百、千、萬、億、那、由、佗、阿、僧、祇、三、千、大、千、世、界。假、使、有、人、抹、為、微、塵。二隨、喜、歎、第、五、十、人、者、經、云、不、如、是、第、五、十、人、聞、法、華、經、一、偈、隨、喜、功、德。百、分、千、分、百、千、萬。

億分不及其二乃至算數譬喻所不能知。如經云。四聞益。至一生補處。一者經云。復有二。四天下微塵數。菩薩摩訶薩。一生當得阿耨多羅三藐三菩提。五釋迦。指三逆。調達。為本師。一者經云。爾時。王者則我身。是時。仙人者。今提婆達多。是由提婆達多。善知識。故。令我具足。六波羅蜜。六。文殊。以八歲。龍女。為所化。一者經云。文殊師利。言。有。娑竭羅龍王。女。於刹那。頃。發菩提心。得。不退轉。慈悲。仁讓。志意。和雅。能至。菩提。七。凡聞。一句。咸。與。授記。一者經云。聞。妙法華經。一偈。一句。乃至。一念。隨喜者。我皆與。授記。當。得。阿耨多羅三藐三菩提。又如來。滅度。之後。若有。人。聞。妙法華經。乃至。一偈。一句。乃至。一念。隨喜者。我亦與。授記。阿耨菩提。記。云云。八。守。護。經。名。功。不可。量。者。陀羅尼品。云。汝等。但。能。擁。護。受。持。法華。名。者。其。福。不可。量。九。聞。持。者。盡。是。女。身。後。不。復。受。若。聞。讀。誦。不。老。不。死。者。七。卷。云。若。人。有。病。得。聞。是。經。病。即。消。滅。不。老。不。死。十一。五。種。法。師。現。獲。三。相。似。者。經。云。云。若。讀。若。誦。若。解。說。若。書。寫。是。人。當。得。八。百。眼。功。德。千。二。百。耳。功。德。八。百。鼻。功。德。千。二。百。舌。功。德。八。百。身。功。德。千。二。百。意。功。德。千。二。百。以。是。功。德。

莊嚴。六。根。皆。令。清。淨。云云。十二。四。安。樂。行。夢。入。銅。輪。者。經。云。又。見。自。身。在。山。林。中。修。習。善。法。證。諸。實。相。深。入。禪。定。見。十。方。佛。又。云。夢。作。國。王。捨。宮。殿。眷。屬。及。上。妙。五。欲。行。詣。於。道。場。在。善。提。樹。下。而。處。師。子。座。求。道。過。七。日。得。諸。佛。之。智。十三。若。惱。亂。者。頭。破。七。分。者。陀羅尼品。云。若。不。順。我。呪。惱。亂。說。法。者。頭。破。作。七。分。如。阿。梨。樹。枝。十四。有。供。養。者。福。過。十。號。者。經。云。有。人。求。佛。道。而。於。一。劫。中。合。掌。在。我。前。以。無。數。偈。讚。由。是。讚。佛。故。得。無。量。功。德。數。美。持。經。者。其。福。復。過。彼。十五。況。已。今。當。一。代。所。絕。者。經。云。已。說。今。說。當。說。而。於。其。中。此。法。華。經。最。為。難。信。難。解。又。云。藥。王。今。告。汝。我。所。說。諸。經。而。於。此。經。中。法。華。最。第一。云云。十六。歡。其。教。法。十。喻。稱。揚。者。藥。王。品。云。譬。如。一。切。川。流。江。河。諸。水。之。中。海。為。第一。一。乘。山。之。中。須。彌。山。為。第一。一。衆。星。之。中。月。天。子。三。日。天。子。四。轉。輪。聖。王。五。帝。釋。六。大。梵。天。王。七。一。切。凡。夫。聖。人。四。果。支。佛。八。聲。聞。辟。支。佛。中。菩。薩。九。佛。十。七。從。地。涌。出。阿。逸。多。不。識。一。人。一。者。涌。出。品。云。四。方。地。震。裂。皆。從。中。涌。出。世。尊。我。昔。來。未。曾。見。是。事。我。於。此。衆。中。乃。不。識。一。人。一。忽。然。從。地。出。願。說。其。因。緣。十八。東。方。蓮。華。龍。尊。王。未。知。相。本。者。妙。音。品。云。妙。音。菩。薩。

不<sup>レ</sup>起<sup>レ</sup>于<sup>レ</sup>座<sup>一</sup>身不<sup>レ</sup>動搖<sup>一</sup>而入<sup>三</sup>三昧<sup>一</sup>。以<sup>三</sup>三昧力<sup>一</sup>化<sup>レ</sup>作<sup>八</sup>萬四千<sup>ノ</sup>衆寶<sup>ノ</sup>蓮<sup>華</sup>。爾<sup>ノ</sup>時<sup>ニ</sup>文殊師利法王子<sup>見<sup>テ</sup>是<sup>ノ</sup>蓮華<sup>ヲ</sup>而白<sup>ク</sup>佛<sup>ニ</sup>言<sup>ハ</sup>世尊<sup>是</sup>何<sup>ノ</sup>因緣<sup>先<sup>ッ</sup></sup>現<sup>レ</sup>此<sup>ニ</sup>瑞<sup>ヲ</sup>。十九<sup>ニ</sup>泥<sup>ヲ</sup>迹<sup>ニ</sup>化<sup>ニ</sup>舉<sup>ニ</sup>三千<sup>ノ</sup>墨<sup>點<sup>ヲ</sup></sup>者<sup>化<sup>レ</sup>城<sup>諷<sup>品<sup>ニ</sup></sup></sup>云<sup>ク</sup>譬<sup>如<sup>シ</sup></sup>下<sup>ニ</sup>三千大千世界<sup>ノ</sup>所有<sup>ノ</sup>地<sup>種<sup>ヲ</sup></sup>。假<sup>使<sup>ハ</sup></sup>有<sup>レ</sup>人<sup>磨<sup>テ</sup></sup>以<sup>テ</sup>爲<sup>レ</sup>墨<sup>ト</sup>過<sup>テ</sup>於<sup>レ</sup>東方<sup>ノ</sup>千<sup>ノ</sup>國<sup>土<sup>ヲ</sup></sup>乃<sup>チ</sup>下<sup>ニ</sup>一點<sup>ヲ</sup>大<sup>サ</sup>如<sup>シ</sup>微<sup>塵<sup>ノ</sup></sup>。又<sup>過<sup>シ</sup></sup>千<sup>ノ</sup>國<sup>土<sup>ヲ</sup></sup>復<sup>下<sup>中<sup>ニ</sup></sup></sup>一點<sup>ヲ</sup>。彼<sup>佛<sup>滅<sup>度<sup>已</sup></sup></sup>來<sup>復<sup>過<sup>シ</sup></sup></sup>是<sup>ノ</sup>數<sup>ニ</sup>。二十<sup>ニ</sup>本<sup>成<sup>ヲ</sup></sup>。譬<sup>如<sup>シ</sup></sup>下<sup>ニ</sup>五百<sup>ノ</sup>微<sup>塵<sup>ニ</sup></sup>者<sup>經<sup>ニ</sup></sup>云<sup>ク</sup>我<sup>實<sup>ニ</sup></sup>成<sup>佛<sup>已</sup></sup>來<sup>無<sup>量<sup>無<sup>邊<sup>百<sup>千<sup>萬<sup>億<sup>那<sup>由<sup>他<sup>劫<sup>ヲ</sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup>。譬<sup>如<sup>シ</sup></sup>下<sup>ニ</sup>五百<sup>ノ</sup>千<sup>萬<sup>億<sup>那<sup>由<sup>他<sup>阿<sup>僧<sup>祇<sup>ノ</sup></sup></sup></sup></sup></sup>三千大千世界<sup>ヲ</sup>盡<sup>ク</sup>以<sup>テ</sup>爲<sup>レ</sup>塵<sup>一</sup>塵<sup>ヲ</sup>一劫<sup>ト</sup>云<sup>ク</sup>。涅槃經<sup>ニ</sup>云<sup>ク</sup>除<sup>テ</sup>此<sup>正<sup>法<sup>ヲ</sup></sup></sup>更<sup>ニ</sup>無<sup>シ</sup>救<sup>護<sup>ニ</sup></sup>是<sup>ノ</sup>故<sup>ニ</sup>應<sup>ニ</sup>當<sup>還<sup>ニ</sup></sup>歸<sup>ス</sup>正<sup>法<sup>ニ</sup></sup>。釋<sup>ニ</sup>云<sup>ク</sup>妙<sup>法<sup>之</sup></sup>外<sup>更<sup>ニ</sup></sup>無<sup>シ</sup>餘<sup>ノ</sup>經<sup>ニ</sup>唯<sup>有<sup>ニ</sup></sup>一<sup>乘<sup>ノ</sup></sup>法<sup>ニ</sup>更<sup>ニ</sup>無<sup>シ</sup>餘<sup>ノ</sup>乘<sup>一</sup>云<sup>ク</sup>。釋<sup>ニ</sup>云<sup>ク</sup>除<sup>テ</sup>諸<sup>法<sup>實<sup>相<sup>ヲ</sup></sup></sup>餘<sup>ハ</sup>皆<sup>名<sup>ニ</sup></sup>摩<sup>訶<sup>羅<sup>ノ</sup></sup></sup>事<sup>ト</sup>。</sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup>

建治三年丁丑

花押

西山殿

○法華初心成佛鈔

啓二九八七

沙一八三三

語三〇九

拾五三〇

扶一一二〇

問<sup>テ</sup>云<sup>ク</sup>八宗九宗十宗<sup>中<sup>ニ</sup></sup>何<sup>ガ</sup>釋<sup>迦<sup>佛<sup>ノ</sup></sup></sup>立<sup>テ</sup>給<sup>ヘ</sup>る<sup>宗<sup>ナ</sup></sup>る<sup>耶<sup>。</sup></sup>答<sup>テ</sup>云<sup>ク</sup>法<sup>華<sup>宗<sup>ハ</sup></sup></sup>釋<sup>迦<sup>所<sup>立<sup>ノ</sup></sup></sup>宗<sup>也<sup>。</sup></sup>其<sup>故<sup>ハ</sup></sup>已<sup>說<sup>今<sup>說<sup>當<sup>說<sup>中<sup>ニ</sup></sup></sup></sup></sup>法<sup>華<sup>經<sup>第<sup>一<sup>也<sup>。</sup></sup></sup></sup>也<sup>。</sup>說<sup>キ</sup>給<sup>フ</sup>是<sup>釋<sup>迦<sup>佛<sup>立<sup>テ</sup></sup></sup>給<sup>フ</sup>處<sup>ノ</sup>御<sup>語<sup>也<sup>。</sup></sup>故<sup>ニ</sup>法<sup>華<sup>經<sup>を</sup></sup>ば<sup>佛<sup>立<sup>宗<sup>ト</sup></sup></sup>云<sup>ク</sup>又<sup>ハ</sup>法<sup>華<sup>宗<sup>ト</sup></sup></sup>云<sup>ク</sup>。又<sup>天<sup>台<sup>宗<sup>ト</sup></sup></sup>云<sup>ク</sup>も<sup>云<sup>ク</sup></sup>なり。故<sup>ニ</sup>傳<sup>教<sup>大<sup>師<sup>ノ</sup></sup></sup>釋<sup>ニ</sup>云<sup>ク</sup>天<sup>台<sup>所<sup>釋<sup>ノ</sup></sup></sup>法<sup>華<sup>之<sup>宗<sup>ハ</sup></sup></sup>釋<sup>迦<sup>世<sup>尊<sup>所<sup>立<sup>之<sup>宗<sup>ト</sup></sup></sup></sup>と<sup>云<sup>ク</sup></sup>云<sup>ヘ</sup>り。法<sup>華<sup>より</sup></sup>外<sup>ノ</sup>經<sup>ニ</sup>は<sup>全<sup>ク</sup></sup>已<sup>今<sup>當<sup>ノ</sup></sup></sup>文<sup>ナ</sup>き<sup>ナ</sup>り。已<sup>說<sup>者<sup>法<sup>華<sup>より</sup></sup></sup></sup>前<sup>、</sup>四十餘年<sup>ノ</sup>諸<sup>經<sup>を</sup></sup>云<sup>ク</sup>。今<sup>說<sup>者<sup>無<sup>量<sup>義<sup>經<sup>を</sup></sup></sup></sup>云<sup>ク</sup>。當<sup>說<sup>者<sup>涅槃<sup>經<sup>を</sup></sup></sup></sup>云<sup>ク</sup>。此<sup>三<sup>說<sup>ノ</sup></sup></sup>外<sup>ニ</sup>法<sup>華<sup>經<sup>計<sup>リ</sup></sup></sup>成<sup>佛<sup>す</sup></sup>る<sup>宗<sup>也<sup>。</sup></sup>佛<sup>定<sup>給<sup>ヘ</sup></sup></sup>り。餘<sup>宗<sup>ハ</sup></sup>佛<sup>涅槃<sup>し</sup></sup>給<sup>フ</sup>後<sup>或<sup>ハ</sup></sup>菩薩<sup>或<sup>ハ</sup></sup>人<sup>師<sup>達<sup>ノ</sup></sup></sup>建<sup>立<sup>す</sup></sup>る<sup>宗<sup>也<sup>。</sup></sup>佛<sup>ノ</sup>御<sup>定<sup>を</sup></sup>背<sup>キ</sup>テ<sup>菩<sup>薩<sup>人<sup>師<sup>ノ</sup></sup></sup></sup>立<sup>テ</sup>たる<sup>宗<sup>を</sup></sup>用<sup>ユ</sup>べき<sup>歟<sup>。</sup></sup>菩薩<sup>人<sup>師<sup>ノ</sup></sup></sup>語<sup>を</sup>背<sup>キ</sup>テ<sup>佛<sup>ノ</sup></sup>立<sup>テ</sup>給<sup>ヘ</sup>る<sup>宗<sup>を</sup></sup>用<sup>ユ</sup>べき<sup>歟<sup>。</sup></sup>又<sup>何<sup>れ</sup>を</sup>も思<sup>フ</sup>思<sup>フ</sup>に<sup>我<sup>心<sup>に</sup></sup></sup>任<sup>セ</sup>テ<sup>志<sup>あ</sup></sup>らん<sup>經<sup>法<sup>を</sup></sup></sup>持<sup>ツ</sup>べき<sup>歟<sup>。</sup></sup>思<sup>フ</sup>處<sup>に</sup>佛<sup>是<sup>を</sup></sup>兼<sup>テ</sup>知<sup>シ</sup>召<sup>テ</sup>未<sup>法<sup>濁<sup>惡<sup>ノ</sup></sup></sup>世<sup>に</sup>眞<sup>實<sup>ノ</sup></sup>道<sup>心<sup>あ</sup></sup>らん<sup>人<sup>人<sup>ノ</sup></sup></sup>持<sup>ツ</sup>べき<sup>經<sup>を</sup></sup></sup>定<sup>給<sup>ヘ</sup></sup>り。經<sup>ニ</sup>云<sup>ク</sup>依<sup>テ</sup>法<sup>不<sup>レ</sup></sup>依<sup>テ</sup>人<sup>ニ</sup>依<sup>テ</sup>義<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>依<sup>テ</sup>語<sup>ニ</sup>依<sup>テ</sup>知<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>依<sup>テ</sup>識<sup>ニ</sup>依<sup>テ</sup>了<sup>義<sup>經<sup>ニ</sup></sup></sup>不<sup>レ</sup>依<sup>テ</sup>了<sup>義<sup>經<sup>ニ</sup></sup></sup>云<sup>ク</sup>。此文<sup>ノ</sup>心<sup>ハ</sup>菩<sup>薩<sup>人<sup>師<sup>ノ</sup></sup></sup>言<sup>ニ</sup>は<sup>依<sup>ル</sup></sup>べ<sup>か</sup>ら<sup>ず</sup>佛<sup>ノ</sup>御<sup>定<sup>を</sup></sup></sup>用<sup>ユ</sup>よ。華<sup>嚴<sup>前<sup>各<sup>ノ</sup></sup></sup>方<sup>等<sup>般<sup>若<sup>經<sup>等<sup>ノ</sup></sup></sup></sup>眞<sup>言<sup>禪<sup>宗<sup>念<sup>佛<sup>等<sup>ノ</sup></sup></sup></sup>法<sup>ニ</sup>は<sup>依<sup>ラ</sup></sup>ざ<sup>れ</sup>。了<sup>義<sup>經<sup>を</sup></sup></sup>持<sup>ツ</sup>べ<sup>し</sup>了<sup>義<sup>經<sup>と</sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup></sup>

云は法華經を持つべしと云文也。問云、今日本國を見るに當時五濁の障重く、  
 鬪諍堅固にして瞋恚の心猛く嫉妬の思甚し。かゝる國かゝる時には何の經  
 をか弘むべき耶。答云、法華經を弘むべき國也其故は法華經云、閻浮提内  
 廣令流布使不斷絶等云云。瑜伽論には丑寅の隅に大乘妙法蓮華經の流  
 布すべき小國ありと見たり。安然和尚云、我日本國等云云。天竺よりは丑  
 寅の角に此日本國は當る也。又慧心僧都、一乘要決云、日本一州圓機純一、朝  
 野遠近同歸一乘、細素貴賤悉期成佛云云。此文の心は日本國は京鎌倉筑  
 紫、鎮西みちとく、陸奥遠も近も法華一乘の機のみ有て。上も下も貴も賤も  
 持戒も破戒も男も女も皆たしなべて法華經にて成佛すべき國也と云文也。譬  
 ば岷崙山に石なく蓬萊山に毒なきが如く日本國は純に法華經の國也。而も  
 法華經は自元めでたき御經なれば誰か信せざると語には云て。而も晝夜  
 朝暮に彌陀念佛を申人、藥はめでたしとほめて朝夕毒を服する者の如し。或  
 は念佛も法華經も一也と云はん人は。石も玉も上臈も下臈も毒も藥も一也と  
 云はん者の如し。其上法華經を怨み嫉み惡み毀り輕め賤む族のみ多し。經云、  
 一切世間多怨難信。又云、如來現在猶多怨嫉況滅度後の經文少しも違はず當れ

りのされば傳教大師、釋云、語代、則像、終末、初、尋、地、唐、東、羯、西、原、人、則  
 五濁之生鬪諍之時經云、猶多怨嫉況滅度後此言良有以也。此等の文釋  
 をもつて知べし。日本國に法華經より外の眞言禪律宗念佛宗等の經教、山山  
 寺寺朝野遠近に弘るといへども。正く國に相應して佛の御本意に相叶ひ生  
 死を離るべき法にはあらざる也。問云、華嚴宗には五教を立て餘の一切の經  
 は劣れり華嚴經は勝ると云ひ。眞言宗には十住心を立て餘の一切の經は顯教な  
 れば劣也眞言宗は密教なれば勝たりと云。禪宗には餘の一切の經をば教内と  
 簡て教外別傳不立文字と立て。壁に向て悟れば禪宗獨り勝たりと云。淨  
 土宗には正雜二行を立て法華經等の一切の經をば捨閉閣抛じ雜行と簡ひ。淨土  
 の三部經を機に叶ひめでたき正行也と云。各各我慢を立て互に偏執を作す。  
 何れか釋迦佛の御本意なる耶。答云、宗宗各別に我が經こそすべけれ餘經  
 は劣れりと云て。我宗吉と云事は唯是人師の言にて佛説にあらず。但し法  
 華經計、こり佛五法の譬と説きて五時の教に當て此經の勝たる由を説き。或  
 は又已今當の三説の中に佛になる道は法華經に及ぶ經なしと云事は正しく佛  
 の金言也。然に我經は法華經に勝たり我宗は法華宗に勝たりと云はん人

は。下臘が上臘を凡下と下し相傳の從者が主に敵對して我が下人也と云が如し何が大罪に行なはれざらんや。法華經より餘經を下す事は人師の言にあらず經文分明也。譬は國王の萬人に勝たりと名乗り侍の凡下と下臘と云んに何の禍があるべきや。此經は是佛の御本意也天台妙樂之正意也。問云釋迦一期の説法は皆衆生のため也。衆生の根性萬差なれば説法も種種也何も皆得道なるを本意とす。然れば我有縁の經は人の爲には無縁也人の有縁の經は我爲には無縁也。故に餘經念佛によりて得道なるべき者の爲には觀經等はめでたし法華經等は無用也。法華によりて成佛得道なるべき者の爲には餘經無用也法華經はめでたし。四十餘年未顯眞實と説も雖示種種道其實爲佛乘と云も正直捨方便但説無上道と云も。法華得道の機の前の事也と云事。世こづつてあはれ然るべき道理哉なんと思へり如何心うべきや。若爾者大乘小乘の差別もなく權教實教の不同もなき也。何をか佛の本意と説き何をか成佛の法と説給へる耶甚いふかしいふかしの。答云凡佛の出世は始より妙法を説んと思食しかども衆生の機縁萬差にしてとのをらざり(不調)しかば。三七日の間思惟し四十餘年の程こしらへれさせて最後に此妙法を

説給フ。故に若但讚佛乘衆生沒在苦不能信是法破法不信故墜於三惡道と説き。世尊法久後要當説眞實とも云へり。此文の意は始より此佛乘を説んと思食しかども。佛法の氣分もなき衆生は信せずして定て誘を至さん。故に機をひとしなは誘へ給はば。初に華嚴阿含方等般若等の經を四十餘年の間とて最後に法華經を説給時。四十餘年の塵席にありし身乎目連等の萬二千の聲聞一丈殊彌勒等の八萬の菩薩萬億の輪王等梵天帝釋等の無量の天人。各爾前に聞し處の法をば失於如來無量知見と云云。法華經を聞ては無上寶聚不求自得と悦び給ふ。されば我從佛昔來數聞世尊説未嘗聞如此深妙之上法とも。佛説希有法昔所未嘗聞とも説給。此等の文の心は四十餘年之程若干の説法を聽聞せしかども。法華經の様なる法をば摠てきかず又佛も終に説せ給はずと法華經を讚たる文也。四十二年の聽と今經の聽とをばわけ(分)たくらふ(比)べからず。然るに今經をうれば法華經得道の人の爲にして爾前得道の者の爲には無用也と云事大なる誤也。をのづから四十二年の經の内には一機一縁の爲にしつらう處の方便なれば設有縁無縁の沙汰はありとも。法華經は爾前の經

經の座にして得益しつる機をもを押さぬ(衆東)て一純に調て説給し間。有縁無縁の沙汰あるべからざる也。悲哉大小權實みだりがはしく佛の本懷を失て。爾前得道の者のためには法華經無用也と云へる事を能能慎べし恐べし。古の徳一大師と云し人此義を人にも教へ我心にも存じてさて法華經を讀給しを。傳教大師此人を破し給ふ言に雖讚法華經遠死法華心と責給しかば。徳一大師は舌入にさけて失給ひき。問云。天台釋の中に菩薩處處得入と云文は法華經は但二乗の爲にして菩薩の爲ならず。菩薩は爾前の經の中にして得道なると見たり。若爾者未顯眞實も正直捨方便等も總じて法華經八卷の内皆以て二乗の爲にして。菩薩は一人も有まじきと意うべき歟如何。答云。法華經は但二乗の爲にして菩薩の爲ならずと云事は。天台より已前唐土に南三北七と申して十人の學匠の義也。天台は其義を破し失て今は弘まらず。若菩薩なしと云はば菩薩聞是法疑網皆已除と云へる豈是菩薩の得益なしと云はんや。うれに尙鈍根の菩薩は二乗とつれ(運)て得益あれども利根の菩薩は爾前の經にて得益すと云はば。利根鈍根等雨法雨と説き一切菩薩阿耨多羅三藐三菩提皆屬此經と説くは何に。此

等の文の心は利根にてもあれ鈍根にてもあれ持戒にてもあれ破戒にてもあれ貴もあれ賤もあれ。一切の菩薩凡夫二乗は法華經にて成佛得道なるべしと云文なるをや。又法華得益の菩薩は皆鈍根也と云はば普賢文殊彌勒藥王等の八萬の菩薩をば鈍根也と云へべき歟。其外に爾前の經にて得道する利根の菩薩と云は何様なる菩薩や。抑爾前に菩薩の得道と云は法華經の如得道にて候歟。其ならば法華經の得道にて爾前の得分にあらず。又法華經より外の得道ならば已今當の中には何れや。いかさまにも法華經ならぬ得道は當分の得道にて眞實の得道にあらず。故に無量義經には是故衆生得道差別と云ひ又終不得成無上菩提と云へり。文の心は爾前の經經には得道の差別を説と云へども。終に無上菩提の法華經の得道はなしとて佛は説給て候へ。問云。當時は釋尊入滅の後今に二千二百三十餘年也。一切經の中に何の經が時に相應して弘まり利生も有べき耶。大集經の五箇の五百歳の中の第五の五百歳に當時はあたれり。其第五の五百歳をば鬪諍堅固白法隱没と云て人の心たけく腹あしく貪欲瞋恚強盛なれば軍合戦のみ盛にして。佛法の中に先引きし所の眞言禪宗念佛持戒等の白法は隱没すべしと佛説

給へり。第一の五百歳第二の五百歳第三の五百歳第四の五百歳を見んに。成佛の道より未顯眞實なれ世間の事法は佛の御言一分も違はず。以て是思に之當時の闢諍堅固白法隱没の金言も違つ事ありし。若爾者末法には何の法も得益あるべからず何の佛菩薩も利生あるべからずと見たり如何。さてもだし(黙止)て何の佛菩薩にもつかへ奉らず何の法をも行せず(憑)方なくして候べき歟。後世をば如何が思定め候べきや。答云、末法當時は久遠實成の釋迦佛上行菩薩無邊行菩薩等の弘きせ給へべき法華經二十八品の肝心たる南無妙法蓮華經の七字計り。此國に弘を利生得益もあり上行菩薩の御利生盛んなるべし時也。其故は經文明白也道心堅固にして志あらん人は委く是を尋聞すべき也。淨土宗の人人末法萬年餘經悉滅彌陀一教と云ひ。又當今末法是五濁惡世唯有淨土一門可通入路と云つて。虚言して大集經に云く引とも彼經に都て此文なし。其上あるべき様もなし。佛の在世の御言に當今末法五濁惡世には但淨土の一門のみ入るべき道也とは説給へからざる道理顯然也。本經には當來之世經道滅盡(特)留此經止住百歳と説けり。末法一萬年の百歳とは全く見ゆす。然に平等覺經太阿彌陀經に見んに佛滅後一千年後の

百歳と云う意なられたれ。然るに善導が感へる釋をば尤も道理と人皆思へり是は諸僻案の者也。但し心あらん人は世間のことばりをもつて推察せよ。大早魃のあらん時は大海が先にひるべき歟小河が先にひるべき歟。佛是を説給には法華經は大海也觀經阿彌陀經等は小河也。されば念佛等の小河の白法こそ先にひるべしと經文にも説給て候ひぬれ。大集經の五箇の五百歳の中は末法には自始雙觀經等經道滅盡すと聞たり經道滅盡と云は經の利生の滅すと云ふ事也。色の經糸有にはよるべからず。されば當時は經道滅盡の時に至つて二百歳に餘れり。此時は但法華經のみ利生得益あるべし。されば此經を受持して南無妙法蓮華經と唱奉るべしと見たり。藥王品には後五百歳中廣宣流布於閻浮提無令斷絶と説給ひ。天台大師は後五百歳遠沾妙道と釋し。妙樂大師は且據大教可流行一時と釋して。後五百歳の間に法華經弘て其後は閻浮提の内に絶失る事有べからずと見たり。安樂行品ニ云於後末世法欲滅時受持讀誦斯經者文。神力品ニ云爾時佛告上行等菩薩大衆爲屬累ノ故説此經ノ功德ヲ猶不能盡。以て要

言<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>如來ノ一切ノ所有之法如來ノ一切ノ自在ノ神力如來ノ一切ノ祕要之藏如來ノ一切ノ甚深之事皆於<sup>ニ</sup>此經ニ宣示顯說云云。此等の文の心は釋尊入滅の後第五の五百歳と説<sup>ク</sup>も末世と云<sup>フ</sup>も濁惡世と説<sup>ク</sup>も。正像二千年過<sup>キ</sup>て末法の始二百餘歳の今時は唯法華經計<sup>リ</sup>弘<sup>ム</sup>るべしと云<sup>フ</sup>文也。其故は人既にひが(僻)み法も實にしるしなく佛神の威驗もましまさず。今生後生の祈も叶はず。かへらん時はたよりを得て天魔波旬亂れ入り。國土常に飢渴して天下も疫癘し佗國侵逼難<sup>シ</sup>自界叛逆難<sup>シ</sup>とて我國に軍合戰常に有<sup>リ</sup>て。後には佗國より兵<sup>ト</sup>もぞろひ來<sup>リ</sup>て此國を責<sup>ム</sup>べしと見<sup>エ</sup>たり。如<sup>シ</sup>此國諍堅固の時餘經の白法は驗し失せて法華經の大良藥を以て此大難をば治すべしと見<sup>エ</sup>たり。法華經を以て國土を祈らば上一人より下萬民に至<sup>ル</sup>まで悉く悦び榮へ給<sup>フ</sup>べし鎮護國家の大白法也。但し阿闍世王阿育大王は始<sup>メ</sup>は惡王也しかども。耆婆大臣の語を用ひ夜叉尊者を信じ給<sup>ヒ</sup>て後にこ<sup>ノ</sup>賢王の名をば留<sup>メ</sup>給<sup>シ</sup>か。南三北七を捨<sup>テ</sup>て智顛法師を用ひ給<sup>ヒ</sup>し陳主。六宗の碩徳を捨<sup>テ</sup>て最澄法師を用ひ給<sup>ヒ</sup>し桓武天皇は今に賢王の名を留<sup>メ</sup>給<sup>ヘ</sup>り。智顛法師と云<sup>フ</sup>は後には天台大師と號<sup>シ</sup>奉<sup>ル</sup>最澄法師は後には傳教大師と云<sup>フ</sup>是也。今の國主も又如<sup>シ</sup>是<sup>ノ</sup>。現世安穩

後生善處なるべき此大白法を信じて國土に弘め給<sup>ハ</sup>ば。萬國に其身を仰がれ後代に賢人の名を留<sup>メ</sup>給<sup>フ</sup>べし。不<sup>レ</sup>知<sup>ラ</sup>又無邊行菩薩の化身にてやましますらん。又妙法の五字を弘め給<sup>ハ</sup>はん智者をばいかに賤くとも上行菩薩の化身歟又釋迦如來の御使歟と思<sup>フ</sup>べし。又藥王菩薩藥上菩薩觀音勢至等の菩薩は正像二千年の御使也。此等の菩薩達の御番は早過<sup>ラ</sup>れば上古の様に利生有<sup>ル</sup>まじき也。されば當世の祈を御覽せよ一切叶はざる者也。末法今の世の番衆は上行無邊行等にてをばします也。此等を能<sup>ク</sup>明<sup>ラ</sup>め信じてこ<sup>ノ</sup>法の驗も佛菩薩の利生も有<sup>ル</sup>べしとは見<sup>エ</sup>たれ。譬<sup>ハ</sup>よき火打とよき石のかごとよきはくると此<sup>ノ</sup>三寄<sup>リ</sup>合<sup>ヒ</sup>て火を用<sup>ユ</sup>る也。祈も又如<sup>シ</sup>是<sup>ノ</sup>よき師とよき檀那とよき法と此<sup>ノ</sup>三寄<sup>リ</sup>合<sup>ヒ</sup>て祈を成就し國土の大難をも拂<sup>ス</sup>べき者也。よき師者指<sup>シ</sup>たる世間の失無<sup>シ</sup>して聊のへつら(鱈)ふことなく少欲知足にして慈悲有<sup>ル</sup>ん僧の。經文に任せて法華經を讀<sup>ミ</sup>持<sup>テ</sup>て人をも勸めて持たせん僧をば佛は一切の僧の中に吉第一の法師也と讚<sup>ム</sup>られたり。吉檀那者貴人にもよらず賤人をもくまらず上にもよらず下をもいやします。一切人をば用<sup>ヒ</sup>ずして一切經の中に法華經を持<sup>タ</sup>ん人をば一切の人の中に吉人也と佛は説<sup>キ</sup>給<sup>ヘ</sup>り。吉法者此法華經



を最爲第一の法と説れたり。已説の經の中にも今説の經の中にも當説の經の中にも此經第一と見えて候へば吉法也。禪宗眞言宗等の經法は第二第三也殊に取り分て申せば眞言の法は第七重の劣也。然に日本國には第二第三乃至第七重の劣の法をもつて御祈禱あれども未だ其證據をみず。最上第一の妙法をもつて御祈禱あるべき歟。是を正直捨方便但説無上道唯此一事實と云へり誰か疑をなすべきや。問云、無智の人來りて生死を離るべき道を問はん時は何の經の意をか説べき佛如何が教へ給へるや。答云、法華經を説べき也。所以に法師品ニ云、若有レ人問、何等ノ衆生於ニ未來世ニ當ニ得ニ作佛ニ應ニ示メ是ノ諸人等於ニ未來世ニ必得ニ作佛ニ云云。安樂行品ニ云、有レ所ニ難問ニ不以下レ以ニテ小乘ノ法ヲ答レ但以ニ大乘ヲ而爲解説ニ云云。此等の文の心は何なる衆生か佛になるべきと問はば。法華經を受持し奉らん人必ず佛になるべしと答べき也。是佛の御本意也。付之ニ不審あり衆生の根性區にして念佛を聞くと願ふ人もあり法華經を説て聞かせんは何のを得益かあるべき。又念佛を聞んが爲に請じたらん時にも強て法華經を説べき歟。佛の説法も機に隨て得益有るをこり本意とし給らんと不審する人あら

ば云べし。自元末法の世には無智の人に機に叶ひ叶はざるを願はず但強て法華經の五字の名號を説て持たすべき也。其故は釋迦佛昔不輕菩薩と云はれ毀られ或は打れ追はれ一しなならず或は怨まれ嫉まれ給しかども。少もこり(戀)もなくして強て法華經を説給し故に今釋迦佛となり給也。不輕菩薩を罵りまいらせし人は口もゆがまず打奉しかいな(肘)もすくまず付法藏の師子尊者も外道に殺されぬ。又法道三藏も火印を面にあてられて江南に流され給し。しづかし。まして末法にかひなき僧の法華經を弘めんにはかゝる難あるべしと經文に正しく見たり。されば人是用ひず機に叶はずと云へども強て法華經の五字の題名を聞かすべきなり。是ならでは佛になる道はなきが故也。又或人不審して云、機に叶はざる法華經を強て説て謗せさせて惡道に人を墮さんよりは機に叶へる念佛を説て發心せしむべし。利益もなく謗せさせて返つて地獄に墮さんは法華經の行者にもあらず。邪見の人にてこり有らめと不審せば。云べし經文には何體にもあれ末法には強て法華經を説べきと佛の説給へるをば。さていかか心うべく候耶。釋迦佛不輕菩薩天台妙樂

傳教等はさて邪見の人外道にてははしまし候べき歟。又惡道にも墮おず三界の生を離はなれたる一乘いちじやうを云いふ者ものをば。佛のの給はく設たてひ犬野干の心をば發たすとも二乗の心をもつべからず。五逆十惡を作つくりて地獄には墮おつとも一乗の心をもつべからず。なんどと禁いめられしいふか。惡道にちちざる程の利益は爭あるべきなれども其をば佛の御本意とも思食しさず。地獄には墮おつとも佛になる法華經を耳みみにふれぬれば是を種たねとして必ず佛になる也。されば天台妙樂も此心を以て強つよて法華經を説いふべしとは釋はなし給へり。譬たとは人の地に依よりて倒たれたる者の返かへつて地をれさへて起たが如ごとし。地獄には墮おれども疾は浮うで佛になる也。當世の人何なになくとも法華經に背そむく失うに依よりて地獄に墮おつん事疑うなき故ゆに。とてもかくても法華經を強つよて説いふ聞きすべし。信しんせん人は佛になるべし。謗ぼうせん者は毒鼓どくこの縁ゆかりとなつて佛になるべき也。何いかにとしても佛の種たねは法華經より外ほかになさなり。權教をもて佛になる由よしだにあらば。なにしにか佛は強つよて法華經を説いて謗ぼうするも信しんするも利益あるべしと説いふ我不愛身命わがみとは仰おほせらるべきや。よくよく此等を道心だうしんましまさん人は御心得ごこころあるべき也。問と云いふ無智むちの人ひとも法華經を信しんじたらば即身成佛じくしんぶつすべき歟。又何また何なにの淨土じやうどに往生おんじやうすべきや。答こたへ云いふ法華經ほふわきやうを持もつに

れいては深く法華經の心を知り。止觀しこくの坐禪ざぜんをし一念三千十境十乘の觀法くわんぽうをこらさん人は實じつに即身成佛じくしんぶつし解とを開ひらく事ことも有あるべし。其外そのほかに法華經の心をもしらす無智むちにしてひらひ信心しんしんの人は淨土じやうどに必かならず生まべしと見みえたり。されば生ま十方佛前じふぱうぶつぜんと説いふ。或あるは即往安樂世界じくじやうあんらくせかいと説いふ。是こゝ法華經を信しんする者の往生おんじやうすと云いふ明文也。付つ之これ不審ふしんあり其故そのゆゑは我身わがみは一ひとにして十方の佛前に生まべしと云いふ事心得こころられず。何なにれにてもあれ一方ひとに限かぎるべし正ただに何なにの方かたをか信しんじて往生おんじやうすべきや。答こたへ云いふ一方ひとにさだめずして十方と説いふは最もいはれある也。所以ゆゑに法華經を信しんする人の一期終しゆうる時には十方世界じふぱうせかいの中に法華經を説いふ佛のみもどもに生まるべき也。餘あまの華嚴阿含方等般若經けつぎやうあわんぱうとうはんにやうきやうを説いふ淨土じやうどへは生まるべからず。淨土じやうど十方じふぱうに多おほくして聲聞しやうもんの法ぽうと説いふ淨土じやうどもあり辟支佛びやくしぶつの法ぽうを説いふ淨土じやうどもあり或あるは菩薩ぼさつの法ぽうを説いふ淨土じやうどもあり。法華經を信しんする者は此等の淨土じやうどには一向いっかう生まれずして法華經を説いふ淨土じやうどへ直ただに往生おんじやうして。座席ざせきに列ならびて法華經を聽聞しやうもんしてやがてに佛ぶつになるべき也。然しかに今世いまよにして法華經は機はりに叶あはずと云いふうとめて西方淨土さいぱうじやうどにて法華經をさとるべしと云いはん者は。阿彌陀あみだの淨土じやうどにても法華經をさとるべからず十方じふぱうの淨土じやうどにも生まるべからず。法華經に背そむく答重たうじゆうが故ゆゑに永とこく地獄

に墮べしと見たり。其人命終入阿鼻獄と云へる是也。問云、即往安樂世界阿彌陀佛と云云。此文、心は法華經を受持し奉らん女人は阿彌陀佛の淨土に生べしと説き給へり。念佛を申しても阿彌陀の淨土に生べしと云ふ。淨土既に同じ念佛も法華經も等と心に候べき歟如何。答云、觀經は權教也法華經は實教也全く等しかるべからず。其故は佛世に出させ給て四十餘年の間多、の法を説き給しかども。二乗と惡人と女人とをば簡ひはてられて成佛すべしとは一言も仰せられざりしに。此經にこそ敗種の二乗も三逆の調達も五障の女人も佛になるとは説き給候つれ。其旨經文に見たり。華嚴經には女人、地獄、使能斷佛種子外面、似菩薩内心、如夜叉云へり。銀色女經には三世の諸佛の眼は抜て大地に落とも法界の女人は永く佛になるべからずと見たり。又經云、女人は大鬼神也能一切の人を喰つと。龍樹菩薩の大論には一度女人を見れば永く地獄の業を結つと見たり。されば實にてや有りけん善導和尚は謗法なれども女人をみずして一期生と云はれたり。又業平が歌にも律をいてあれたるやと(宿)のうれ(憂)たきはかりにも鬼のすだく(集)なりけりと云も。女人をば鬼とよめるにこそ侍れ。又女人には五障三従と云、事有が故に

罪深しと見たり。五障と者一には梵天王二には帝釋三には魔王四には轉輪聖王五には佛にならずと見たり。又三従と者女人は幼き時は親に従て心にまかせず。人となりては男に従て心にまかせず。年よりぬれば子に従て心にまかせず。加様に幼き時より老耄に至るまで三人に従て心にまかせず。思事をもいはず見たき事をもみず聽聞したき事をもまかす是を三従とは説也。されば榮啓期が三樂を立たるにも女人の身と生れざるを一の樂といへり。加様に内典外典にも嫌はれたる女人の身なれども。此經を讀まねどもかかねども身と口と意とにうけ持て。殊に口に南無妙法蓮華經と唱へ奉る女人は在世の龍女、憍曇彌、耶輸陀羅女の如、にやすやすと佛になるべしと云、經文也。又安樂世界と云、は一切の淨土をば皆安樂と説也。又阿彌陀と云、も觀經の阿彌陀にはあらず。所以に觀經の阿彌陀佛は法藏比丘の阿彌陀四十八願の主と十劫成道の佛也。法華經にも迹門の阿彌陀は大通智勝佛の十六王子の中の第九の阿彌陀にて法華經大願の主の佛也。本門の阿彌陀は釋迦分身の阿彌陀也。隨て釋にも不須更指觀經等也と釋し給へり。問云、經に難解難入と云へり世間の人此文を引て法華經は機に叶はずと申候は道理

と覺は候は如何。答云、謂れなき事也。其故は此經を能も心なぬ人の云事也。法華より已前の經は難ク解リ難ク入リ法華の座に來りては易ク解リ易ク入リと云事也。されば妙樂大師の御釋ニ云、法華已前、不了義故ニ故ニ云、難解ト即指下今、教威皆入實ニ故ニ云、易知ト文。此文ノ心は法華より已前の經にては機つたなくして難ク解リ難ク入リ。今の經に來りては機賢く成りて易ク解リ易ク入リと釋し給へり。其上難解難入と説たる經が機に叶はずば先念佛を捨させ給べき也。其故は雙觀經に難中之難、無過ニ此難ト説キ阿彌陀經には難信之法と云へり。文の心は此經を受持タん事は難キか中の難キ也此に過たる難キはなし難信の法也と見ゆたり。問云、經文に四十餘年未タ顯ニ眞實ト云ヒ又過ニ無量無邊不可思議阿僧祇劫ヲ終ニ不得成ニ無上菩提ト云へり。此文は何體の事にて候哉。答云、此文の心は釋迦佛一期五十年の說法の中に始の華嚴經にも眞實ととかす中の方等般若にも眞實をとかず。此故に禪宗念佛戒等を行する人は無量無邊劫をば過とも佛にならじと云フ文也。佛四十二年の歲月を経て後法華經を説給ふ文には世尊、法久後、要當ニ説ニ眞實ト仰せられしかば。舍利弗等の千二百の羅漢、萬二千の聲聞、彌勒等の八萬人の菩薩、梵王、帝釋等の萬億

の天人。阿闍世王等の無量無邊の國王佛の御言を領解する文には。我等從昔來數、聞ニ世尊ノ説ヲ未ダ曾テ聞ニ如是ノ深妙之上法ト云ツテ。我等佛に不奉離、四十二年若干の說法を聽聞しつれどもいまだ如是ノ貴き法華經をばきかずと云へる。此等の明文をばいかか心なて世間の人は法華經と餘經と等しく思ひ。剩へ機に叶はねば闇の夜の錦ころも(去年)の曆なんぞ云ひて。適持つ人を見ては賤み輕め惡み嫉み口をすくめなんぞする是併ら謗法也。爭か往生成佛もあるべきや必無間地獄に墮すべき者と見たり。問云、凡佛法を能心得て佛意に叶へる人をば世間には是を重んじ一切是を貴む。然に當世法華經を持つ人人をば世こつて惡み嫉み輕め賤み或は所を追ひ出し或は流罪し。供養をなすまでは思もよらず怨敵の様ににくまるるは。いかさまにも心わらくして佛意にもかなはずひ(僻)がさまに法を心得たるなるべし。經文には如何が説たるや。答云、經文の如くならば末法、法華經の行者は人に惡まるる程に持ッを實の大乗の僧とす。又經を弘めて人を利益する法師也。人に吉と思はれ人の心に隨て貴と思はれん僧をば。法華經のかたき世間の惡知識也と思へし。此人を經文には獵師の目を細めにして鹿をねらひ貓の爪を隠して鼠をね

らふが如くにして。在家の俗男俗女の檀那をへつらひいつわりたばらかすべしと説き給へり。其上勸持品には法華經の敵人三類を擧げられたるに。一には在家の俗男俗女也此俗男俗女は法華經の行者を憎み罵り打ちはりさき殺し。所を追ひ出さし或は上へ讒奏して遠流しなすけなくあだむ者也。二には出家の人也此人は慢心高きして内心には物も知らざれども智者げにもてなして世間の人に學匠と思はれて。法華經の行者を見ては怨み嫉み輕め賤み犬野干よりもわろきやうを人に云うとめ。法華經をば我一人心得たりと思つ者也。三には阿練若の僧也此僧は極めて貴き相を形に顯はし三衣一鉢を帶して。山林の閑なる所に籠り居て在世の羅漢の如く諸人に貴まれ佛の如く萬人に仰がれて。法華經を如く説く讀み持奉らん僧を見ては憎み嫉んで云く大愚癡の者大邪見の者也總て慈悲なき者外道の法を説くなんど云はん。上一人より仰じて信を取らせ給はば其已下萬人も如く佛の供養をなすべし。法華經を如く説くよみ持たん人は必此三類の敵人に怨まるべき也と佛説き給へり。問云く佛の名號を持つ様に法華經の名號を取り分けて持つべき證據ありや如何。答云く經云く佛告諸羅刹女ニ善哉善哉汝等但能擁護受持法華名者上福不可量と云云。此文

の意は十羅刹の法華の名を持つ人を護らんと誓言を立給を。大覺世尊讚めて言、善哉善哉汝等南無妙法蓮華經と受持たん人を守らん功德。いくら程とも計りがたくめでたき功德也神妙也と仰せられたる文也。是我等衆生の行住坐臥に南無妙法蓮華經と唱ふべしと云、文也。凡妙法蓮華經者我等衆生の佛性と梵王帝釋等の佛性と舍利弗目連等の佛性と文殊彌勒等の佛性と。三世の諸佛の解の妙法と一體不二なる理を妙法蓮華經と名たる也。故に一度妙法蓮華經と唱れば一切の佛一切の法一切の菩薩一切の聲聞。一切の梵王帝釋閻魔法王日月衆星天神地神乃至地獄餓鬼畜生脩羅人天一切衆生の心中の佛性を。唯一音に喚び顯はし奉る功德無量無邊也。我が己心の妙法蓮華經を本尊とあがめ奉りて。我が己心中の佛性南無妙法蓮華經とよびよばれて顯はれ給ふ處を佛とは云ふ也。譬は籠の中の鳥なけば空とぶ鳥のよばれて集るが如し。空とぶ鳥の集れば籠の中の鳥も出んとするが如し。口に妙法をよび奉れば我身の佛性もよばれて必顯はれ給ふ。梵王帝釋の佛性はよばれて我等を守り給ふ。佛菩薩の佛性はよばれて悦び給ふ。されば若暫持者、我則歡喜諸佛亦然と説き給は此心也。されば三世の諸佛も妙法蓮華經の五字を以て佛に成り給し也。

三世の諸佛の出世の本懐一切衆生皆成佛道の妙法と云フは是也。是等の趣を能能心得て佛になる道には。我慢偏執の心なく南無妙法蓮華經と唱へ奉るべき者也。

日蓮 御在判

○實相寺御書 徵上ハ 考二三九

新春ノ御札ノ中ニ云ク駿河ノ國實相寺ノ住侶尾張阿闍梨と申ス者。玄義四ノ卷に引テ涅槃經ヲ以テ小乗ヲ破シ大乘ヲ以テ大乘ヲ破シ小乗ノ盲目ノ因也と被レ釋之由申シ候なるは實にて候やらん。反詰云ク以テ小乗ヲ破シ大乘ヲ以テ大乘ヲ破シ小乗ヲ者盲目ならば。弘法大師慈覺大師智證等はされば盲目となり給たりける歟。善無畏金剛智不空等は盲目と成リ給と殿はの給フかどつめよ。玄義ノ四ニ云ク問フ法華ニ開レ纏ヲ纏皆入レ妙ニ涅槃何ノ意更ニ明ニ次第ノ五行ヲ耶。答フ法華は爲ニ佛世ノ人ノ破レ權ヲ入レ實ニ無ク復有レ纏教意整足。涅槃ハ爲下末代ノ凡夫ノ見思ノ病重ク定ニ執一實ニ誹ニ誘シ方便ニ雖服ニ甘呂ヲ(露)不能ニ即レ事ニ而眞傷命ヲ早天上故ニ扶ニ戒定慧ヲ顯ニ大涅槃ヲ得ニ法華ノ意ヲ於テ涅槃ニ不用ニ次第ノ行ヲ也。籤ノ四ニ云ク次ニ料簡ノ中言ニ扶戒定慧ヲ者事戒事定前三教ノ慧並ニ爲レ扶ニ事法ヲ故ニ具如ニ止觀ノ對治助開ノ

中ニ說一。今時ノ行者或ハ一向ニ尙レ理ヲ則謂ヒ己均レ聖ニ及執レ實ニ謗ス權ヲ。或ハ一向ニ尙レ事ヲ則推リ功ヲ高位ニ及ヒ謗レ實ヲ許ス權ヲ。既ニ處ニ末代ニ不レ思ニ聖旨ヲ其レ誰カ不レ墮ニ斯之ニ失ニ。得ニ法華ノ意ヲ則初後俱ニ頓請フ揣リ心ヲ撫テ臆ヲ自曉ニ浮沈ヲ等云云。迷ニ惑此釋ニ者歟。此釋ハ所詮或一向尙理者等ニ達磨宗ニ也。及執實謗權者華嚴宗眞言宗也。或一向尙事者淨土宗律宗也。及謗實許權者法相宗也。夫法華經ノ妙ノ一字有ニ二義一ハ相待妙破レ纏ヲ顯ス妙ヲ一ハ絕待妙開レ纏ヲ顯ス妙ヲ。爾前ノ諸經並ニ法華已後ノ諸經ハ破レ纏顯妙之一分雖レ說レ之ヲ開レ纏顯妙ハ全分無レ之。爾依ニ憑諸經ニ人師於テ彼彼ノ經經ニ存シ破顯ノ二妙ヲ或ハ盜ニ天台ノ智慧ヲ或ハ民家に行フ天下ヲ耳。設ヒ雖存ニ開レ纏ヲ破レ義難免レ歟何況ニ上ニ所レ舉ル一向執權或ハ一向執實等ノ者をや。而彼阿闍梨等は不レ顧ミ自科一者嫉妬之間自眼ヲ回轉レ觀レ眩ニ大山ノ歟。先以テ實ヲ破レ權ヲ絶ニ權執ヲ入レ實ニ者釋迦多寶十方ノ諸佛ノ常儀也。以テ實ヲ破レ權ヲ者爲ニ盲目ト者釋尊者盲目ノ人歟乃至天台傳教ノ盲目ノ人師歟如何可レ笑フ返ス返。四十九院等ノ事彼別當等ハ無智ノ者間向ニ日蓮ニ恐レ之ヲ小田一房等爲レ怨ヲ歟。彌目彼等カ邪法可レ滅ス先兆也。根露枝枯源竭流盡云フ本文不レ虛シ歟。弘法慈覺智證三大師ノ法華經誹謗ノ大科四百餘年之間隱根露枝枯。今日蓮糾ニ

明之ヲ拘留外道カ爲レ石ト數百年陳那菩薩ニ被レ責、石即爲レ水ト。尼嚙立塔ハ馬鳴  
類之ヲ臥師子ニ觸レ手ヲ爲レ噴等は也。

建治四年正月十六日

日 蓮 花 押

駿河國實相寺豐前公御房御返事

明治三十五年十二月十四日富士北山本門寺ニ於テ興師ノ御寫ヲ以テ對校ス但シ「四十九」已下五行  
六字ハ興師ノ御寫並ニ滿本等ニモナシ若シ此ニ依レハ餘外十六ノ如ク一章トスベキ歟又初文ノ難  
讀ノ處ハ滿本ニ依テ校ス(稻田海素記)

○四條金吾御書

啓三六九七

鈔二五七六

語五三七

扶一五四七

應取のたけ(嶽)身延のたけな、いた(七面)がれのたけい、だに(飯谷)と申。木  
のもとかや(萱)のね(根)いわ(巖)の上土の上いかにたづね候へどもを(生)ひて候  
どころなし。されば海にあらざればわかめ(海藻)なし山にあらざればくさび  
ら(茸)なし。法華經にあらざれば佛になる道なかりけるか。これはさてをき候  
ぬ。なによりも承てすすし(爽)く候事はいくばくの御にく(憎)まれの人の御出  
仕に人かすにめしぐ(召具)せられさせ給て。一日二日ならず御ひまもなきよ

しうれしと申ばかりなし。ねもんのたいう(右衛門大夫)のをや(親)に立あひて  
上の御一言にてかへりてゆり(許)たると殿のすねん(數年)が間のにくまれ。去  
年のふゆ(冬)はかうとさきしにかへりて日日の御出仕の御ともいかなる事ぞ。  
ひとへに天の御計法華經の御力にあらずや。其上圓教房の來りて候しが申候  
はねま(江馬)の四郎殿の御出仕に御どものさふらひ二十四五。其中にしう(主)  
はさてをきたてまつりぬ。ぬし(ま)のせい(身長)といひかを(面)たましひ(魂)  
むま(馬)下人までも中務のさねもんのじやう(左衛門尉)第一なり。あはれ(天晴)  
をとこ(男)やをとこやとかまくら(鎌倉)わらはへ(童)はつじち(辻)にて申あひ  
て候しとかたり候。これにつけてもあまりにあやしく候。孔子は九思一言周  
公旦は浴する時は三度にぎり食する時は三度はかせ給。古の賢人なり今の人  
のかがみなり。されば今度はことに身をつくしませ給べし。よる(夜)はいか  
なる事ありとも一人うと(外)へ出させ給べからず。たとひ上の御めし有と  
もまづ下人をこがへつかわして。なひなひ(内々)一定をききさだめてはらま  
き(腹巻)をきてはちまき(鉢巻)し。先後左右に人をたてて出仕し。御所のかた  
わらに心よせのやかたか又我がやかたかにぬぎをきてまいらせ給べし。家

へかへらんにばさき(前)に人を入れてとのわき(戸側)はしのした(橋下)ひまら(概)のしりたかき(高殿)一切くらさところをみせて入るべし。せうまう(燒亡)には我が家よりも人の家よりもあれ。たから(財)ををしみてあわてて火をけすところへづつとよるべからず。まして走り出る事なけれ。出仕より主の御どもして御かへりの時はみかき(御門)より馬よりをりて。いとまのさしあうよしはうくわんに申しているぎかへるべし。上のをせなりともよ(夜)に入つて御どもして御所にひさしかるべからず。かへらむには第一心にふかき(うじん)用心)あるべし。こゝをばかならずかたきのうかがうところなり。人のさけ(酒)たばんと申どもあやしみてあるひは言をいだしあるひは用ことなけれ。又御をど(舍弟)どもには常はふびんのよしあるべし。つねにゆせに(湯錢)さうりのあた(神履)なんぞ心あるべし。もしやの事のあらむにはかたきはゆるさむ。我ためにいのち(命)をうしなはんずる者ぐかしとをばして。どがありともせうせうの失をばしらぬやうにてあるべし。又女るひはいかなる失ありとも一向に御けうくん(教訓)までもあるべからず。ましていさかう(争)ことなけれ。涅槃經云、罪雖極重不及(ホサ)女人二等云云。文の心はいかなる失ありとも女のどがををこなはざれ。此賢人なり此佛弟子なりと申文より。此文は阿闍世王父を殺すのみならず母をあやまたむとせし時菩薩 月光の兩臣がいさめたる經文なり。我母心ぐるしくをもひて臨終までも心にかけていもうど(女弟)どもなれば失をめん(免)じて不便といふならば。母の心やすみて孝養となるべしとふかくをばすべし。佗人をも不便といふがしいわらやをどをどどもをや。もしやの事の有には一所にていかにもなるべし。此等ころとどまりあてなげ(歎)かんずればをもひで(思出)にとふかくをばすべし。かやう申は佗事はさてをさぬ。雙六は二ある石はかけられず鳥は一の羽にてとぶことなし。將門(まさかた)ただたふ(貞任)がやうなりしいふしやう(勇將)も一人は叶はず。されば舍弟等を子ども郎等ともうちたのみてをばせば。もしや法華經もひろまらせ給て世にもあらせ給わば一方のかたうど(方人)たるべし。すでにきやう(京)のたいり(内裏)院のころ(御所)かまくら(鎌倉)の御所並に御らしるみ(後見)の御所。一年が内二度正月と十二月とにやけ(燒失)候ぬ。これ只事にはあらず謗法の眞言師等を御師とたのませ給上。かれら法華經をあたみ候ゆへに。天のせめ法華經十羅刹の御いさめあるなり。かへりて大さんげ(懺悔)あるなら

りとも女のどがををこなはざれ。此賢人なり此佛弟子なりと申文より。此文は阿闍世王父を殺すのみならず母をあやまたむとせし時菩薩 月光の兩臣がいさめたる經文なり。我母心ぐるしくをもひて臨終までも心にかけていもうど(女弟)どもなれば失をめん(免)じて不便といふならば。母の心やすみて孝養となるべしとふかくをばすべし。佗人をも不便といふがしいわらやをどをどどもをや。もしやの事の有には一所にていかにもなるべし。此等ころとどまりあてなげ(歎)かんずればをもひで(思出)にとふかくをばすべし。かやう申は佗事はさてをさぬ。雙六は二ある石はかけられず鳥は一の羽にてとぶことなし。將門(まさかた)ただたふ(貞任)がやうなりしいふしやう(勇將)も一人は叶はず。されば舍弟等を子ども郎等ともうちたのみてをばせば。もしや法華經もひろまらせ給て世にもあらせ給わば一方のかたうど(方人)たるべし。すでにきやう(京)のたいり(内裏)院のころ(御所)かまくら(鎌倉)の御所並に御らしるみ(後見)の御所。一年が内二度正月と十二月とにやけ(燒失)候ぬ。これ只事にはあらず謗法の眞言師等を御師とたのませ給上。かれら法華經をあたみ候ゆへに。天のせめ法華經十羅刹の御いさめあるなり。かへりて大さんげ(懺悔)あるなら



ばたすかるへんもあらんずらん。いたう天の此國ををしませ給うへに大なる御いさめあるか。すでに佗國が此國をうちまきて國主國民を失はん上。佛神の寺社百千萬がほろびんずるを天眼をもつて見下てなげかせ給なり。又法華經の御名をいういう(優々)たるものどもの唱を誹謗正法の者どもがををせし候を天のにくませ給う故なり。あなかしこあなかしこ。今年かしこ(賢)くして物を御らんせよ。山海空市まぬかるところあらばゆきて今年はずぎぬべし。阿私陀仙人が佛の生れ給しを見て。いのちををしみしがごとしをしみしがごとし。恐恐謹言。

正月二十五日

日 蓮 花 押

中務左衛門尉殿

明治三十五年六月十日京都妙傳寺ニ於テ開山意師延山御正本對照ノ本ヲ以テ校正ス但シ間々朝師ノ御本ニモ依ル(稻田海素記)

○松野殿御返事

微上三三 考四一

種種ノ物送り給候畢。山中のすまる思遣せ給て雪の中ふみ分けて御訪候事。御志定て法華經十羅刹も知食候覽。さては涅槃經云ク人命不停過於山水。今日雖存明日難保。摩耶經云ク譬如旃陀羅羊至屠家人命亦如是。步步近死地。法華經云ク三界無安猶如火宅。衆苦充滿甚可怖畏。等云云。此等の經文は我等が慈父大覺世尊末代の凡夫をいさめ給。いとけなき子どもをさし驚かし給へる經文也。雖然須臾も驚く心なく刹那も道心を發さず。野邊に捨られなば一夜の中にはだか(裸)になるべき身をかざら(飾)んがために。いとまを入れ衣を重んとはげむ。命終なば三日の内に水と成りて流れ塵と成りて地にまじはり煙と成りて天に登り。跡も見えず成りぬべき身を養はんとして多クの財をたくはふ。此ことよりは事ふり(古)候ぬ。但當世の體こ衰れに候へ。日本國數年の間打續きけかち(飢渴)ゆきて衣食たへ畜るひをば食つくし。結句人をくらう者出來して或は死人或は小兒或は病人等の肉を裂取て。魚鹿等に加へて賣しかば人は是を買く(啖)へり。此國存の外に大惡鬼となれり。又去年の春より今年の二月中旬まで疫病國に充滿す。

松野殿御返事 (遺二四ノ三二)

千六百九十九 (外九ノ一)

十家に五家自家に五十家皆やみ死シ。或は身はやまねども心は大苦に値へり。やむ者よりも怖おそし。たまたま生いき残のこたれども。或は影の如くうる(添)し子もなく眼の如く面かほをならべし。夫妻もなく天地の如く憑たし父母もればせず。生まても何にかせん。心あらん人人争か世を厭いとはざらん。三界無安とは佛説キ給て候へども法に過まりて見み候。然るに予は凡夫にて候へどもかゝるべき事を佛兼ても説キをかせ給て候を國主に申シきかせ進すすませ候ぬ。其につけて御用キは無なしして彌あ怨だをなせしかば力及ばず此國既に謗法わうぼうと成なりぬ。法華經の敵に成り候へば三世十方の佛神の敵と成れり。御心にも推すかせさせ給キ候へ。日蓮何なる大科有アども法華經の行者なるべし。南無阿彌陀佛と申さば何なる大科有アども念佛者にて無なしとは申シがたし。南無妙法蓮華經と我口にも唱へ候故に罵ののられ打うちはられ流ながされ命いのちに及びしかども。勸め申せば法華經の行者ならずや。法華經には行者を怨うらむ者は阿鼻地獄の人と定む。四ノ卷には佛を一中劫罵ののるよりも末代の法華經の行者を悪あくむ罪深しと説キれたり。七ノ卷には行者を輕かろめし人人千劫阿鼻地獄に入ると説キ給へり。五ノ卷には我末世末法に入いりて法華經の行者有アべし。其時其國に持戒破戒等の無量無邊の僧等集ありて國主に讒言して流ながし

失ふべしと説キれたり。然るにかゝる經文かたがた符合し候畢しま。未來に佛に成なり候はん事疑うたなく覺おぼ候。委細は見參の時申マべし。

建治四年戊寅二月十三日

日 蓮 花 押

松野殿御返事

此書ノ眞蹟ノ斷編即三十二右終行「きけ」ヨリ「らふ」ノ三行京都本能寺ニ什ス(稻田海素庵記)

○棧敷女房御返事 考五二六

白かたびら(帷子)布ぬのひん一給ひつ畢しま。法華經を供養申シまいらせ候に。十種くやう(供養)と申マ十のやう候。其なかに衣服と申シ候はなにて候へ僧そうのき(著)候物をくやうし候。其因縁をどかれて候には過去に十萬億の佛をくやうせる人法華經に近づきまいらせ候とどこかれて候へ。あらあら申すべく候へども。身にいたはる事候間。こまやかならず候。恐恐謹言。

二月十七日

日 蓮 花 押

さじきの女房御返事

棧敷女房御返事 (遺二四ノ三四)

千七百一

(外十四ノ四十一)

○三澤鈔 啓二八五 鈔一七六八 註一八四一 語三三一 音下二五 拾四四 扶一〇五九

かへすがへす。するが(駿河)の人人みな同<sub>シ</sub>御心と申<sub>サ</sub>せ給<sub>ヒ</sub>候へ。

柑子<sub>こらじ</sub>一百こぶ(昆布)のり(海苔)をこ(於胡)等の生<sub>なま</sub>の物。はるばるとわざわざ山

中へをくり給<sub>ヒ</sub>て候。ならびにうつぶさ(内房)の尼ごせん<sub>の</sub>御こり<sub>で</sub>(小袖)

給<sub>ヒ</sub>候了。

さてはかたがたのをほせ(仰)くはしくみほさ(見解)候。抑<sub>キ</sub>佛法をかく(學)する者は大地微塵よりをほけれどもまことに佛になる人は爪ノ上の土よりもすくなし。大覺世尊涅槃經にたしかにとかせ給<sub>ヒ</sub>て候し。日蓮みまいらせ候ていかなればかくわかた(難)かるらむとかんがへ候しほさに。げにもさならむとをもう事候。佛法をばかく(學)すれども或は我が心のをろかなるにより或はたとひ智慧はかしこきやうなれども師によりて我心のまが(曲)るをしらず。佛教をなを(直)しくなら(習)ひうる事かたし。たとひ明師並に實經に値<sub>ヒ</sub>奉<sub>リ</sub>て正法をへ(得)たる人なれども生死をいで佛にならむとする時には。かならず影の身にろうがごとく。雨に雲のあるがごとく。三障四魔と申<sub>シ</sub>て七の大事出現す。設<sub>ヒ</sub>ひからくして六はすぐれども第七にやらふれぬれば佛にな

る事かたし。其六は且<sub>ラ</sub>をく。第七の大難は天子魔と申<sub>ス</sub>物なり。設<sub>ト</sub>末代の凡夫一代聖教の御心をさとり摩訶止觀と申<sub>ス</sub>大事の御文の心を心にて佛になるべきになり候ぬれば。第六天の魔王此事を見て驚<sub>キ</sub>云。あらあさましや此者此國に跡<sub>あと</sub>を止<sub>とど</sub>めば。かれが我身の生死をいづるかほさてをきぬ。又人を導くべし。又此國土ををさへと(押取)りて我土を淨土となすいかんがせんと候て。欲色無色、三界の一切の眷屬をもよを(催)し仰<sub>セ</sub>下<sub>くだ</sub>云。各各ののうのう(能々)に隨<sub>ツ</sub>てかの行者をなやま(嚮)してみよ。うれにかなわすばかれが弟子だんな並に國土の人の心の内に入りかわりて。あるひはいさめ(諫)あるひはいさめ或はをどし(感)てみよ。うれに叶はずば我みづからうちくだりて國主の身心に入りかわりてをどして見むに。いかでかどと(止)めざるべきとせんぎ(僉議)し候なり。日蓮さきよりかゝるべしとみほさ(見解)候て。末代の凡夫の今生に佛になる事は大事にて候けり。釋迦佛の佛にならせ給<sub>ヒ</sub>し事を經經にあまたとかれて候に。第六天の魔王のいたしける大難いかにも忍ぶべしともみへ候はず候。提婆達多阿闍世王の惡事はひとへに第六天の魔王のたばかりところみて候へ。まして如來現在猶多怨嫉況滅度後と申<sub>シ</sub>て大覺世尊の御時の御難だ

にも。凡夫の身日蓮にかやうなる者は片時かたときひとひ一日も忍しのびがたかるべし。まして五十餘年が間の種種の大難をや。まして末代には此等は百千萬億倍すぐべく候なる大難をば。いかでか忍しのび候まべきと心に存ぞんて候しほとに。聖人は未萌を知しると申して三世の中に未來の事を知しるをまことの聖人とは申まなり。而しかに日蓮は聖人にあらざれども日本國の今の代にあたりて。此國亡なつたるべき事をかねて知しりて候しに。此こころ佛のどかせ給たまて候況滅度後の經文にあたりて候へ。此を申まいだすならば佛の指させ給たまて候未來の法華經の行者なり。知しりて而しかも申まさずば世生生の間をうしし瘡かさことどもも癩かさりら生な上うへ。教主釋尊の大怨敵其國の國主の大難敵ここのこ佗人たににあらず。後生は又無間大城の人此こなりとかんがへみて。或は衣食にせめられ或は父母兄弟師匠同行にもいさめられ或は國主萬民にもをどされしに。すこしもひるひるまひる（撓たふむ心あるならば一度に申まし出でさじと。としごろ（年來）ひごろ（日來）心をいましめ候しが。抑おさり過去遠劫より定さだて法華經にも値あひ奉たり菩提心もをこしけん。なれども設た一難二難には忍しのびけれども大難次第につづき來りければ退たいしけるにや。今度いかなる大難にも退たいせぬ心ならば申まし出ですべしとて申まし出でて候しかば。經文にたがわず此の度度の大難に

はあいて候しまがし。今は一こうなりいかなる大難にもこらへてんと我身に當あてて心みて候へば。不審なきゆへに此山林には栖すま候なり。各各は又たといすてさせ給たまども一日かたときも我が身命をたすけし人人なれば。いかでか佗人たにには（似）させ給たまべき。本より我一人いかになるべし。我いかにしなるとも心に退轉たいなくして佛になるならばどのばら（殿原）をば導またてまつらむとやくりく（約束）申まして候き。各各は日蓮ほども佛法をば知しせ給たまざる（上俗）なり。所領あり妻子あり所従ありいかにも叶かながたかるべし。只いつわりをろか（偽悪）にてをばせかすと申し候きころ候へけれ。なに事につけてかすて（捨）まいらせ候べきゆめゆめをろか（疎）のぎ候まべからず。又法門の事はさ（佐渡）の國へながされ候し已前の法門はただ佛の爾前の經とをばしめせ。此國の國主我われ代よをもたもつべくば眞言師等にも召まひ合せ給たまはん（す）らむ。爾時まことの大事をば申ますべし。弟子等にもなひなひ（内々）申ますならばひろ（披露）してかれら（彼等）しり（知）なん（ず）。さらばよもあわ（合）じ（と）をもひて各各にも申まさざりしなり。而しか去こ文永八年九月十二日の夜たつ（龍）の口にて頸くちをはね（刎）られんとせし時より。のち（後）ふびん（なり）我につきたりし者どもにまこと（眞）の事

をいひ(言)ざりけるとをも(思)て。さぞ(佐渡)の國より弟子どもに内内申<sup>メ</sup>法門あり。此は佛より後迦葉 阿難 龍樹 天親 天台 妙樂 傳敎 義真等の大論師大人師は知<sup>リ</sup>てしかも御心みこころの中に秘せさせ給<sup>ヒ</sup>し。口より外には出<sup>シ</sup>給はず。其故は佛制して云く我滅後末法に入らずば此大法いうべからずとありしゆへなり。日蓮は其御使にはあらざれども其の時剋<sup>ニ</sup>あたる上存外に此法門をさとりぬれば。聖人の出<sup>テ</sup>させ給<sup>フ</sup>までまづ序分にあらあら申<sup>ス</sup>なり。而<sup>ル</sup>に此法門出現せば正法像法に論師人師の申せし法門は皆日出<sup>テ</sup>て後の星<sup>ノ</sup>光 巧匠たくみの後に拙つたなきを知るなるべし。此時には正像の寺堂の佛像僧等の靈驗は皆さへうせ(消失)て但此大法耳のみ一閻浮提に流布すべしとみへて候。各各はかゝる法門にちぎり有<sup>ル</sup>人なればたのもしとをばすべし。又うつぶさ(内房)の御事は御としよらせ(年老)給<sup>ヒ</sup>て御わたりありし。いたわし(痛)くをもひまいらせ候しかども。うちがみ(氏神)へまいり(参)てあるついで(次)と候しかば。けさん(見参)に入るならば定<sup>テ</sup>てつみ(罪)ふかかるべし。其故は神は所従なり法華經は主君なり。所従のついでに主君へのけさんは世間にもをり候。其上尼の御身になり給<sup>ヒ</sup>てはまづ佛をさき(先)とすべし。かたがたの御とが(失)ありしかばけさ

んせず候。此又尼ごせん一人にはかぎらず。其外の人人もしもべ(下部)のゆ(温泉)のついでと申<sup>ス</sup>者をあまたをひかへ(追返)して候。尼ごせんはをや(親)のごとくの御とし(齡)なり。御なげきいたわしく候しかども此義をしら(知)せまいらせんためなり。又どの(殿)はをとし(一昨平)かのけさんの後。うらごにてや候けん御うらう(所勞)と申せしかば人をつかわしてきかんと申せしに。此御房たちの申せしはうれはざる事に候へども。人をつかわしたらばいふせ(不善)やをもはれ候はんずらんと申せしかば。世間のならひはさもやあるらむ。げん(現)に御心ざしまめ(實)なる上御所勞ならば御使も有<sup>リ</sup>なんどもをひしかども。御使もなかりしかばいつわりをろかにてをばつかなく候つる上。無常は常のならひなれどもこづことし(去年今年)は世間はう(法)にすぎてみみへまいらすべしともをば候(覺)へず。こひし(戀)くころ候つるに御をとつれ(音信)あるうれしとも申<sup>ス</sup>計<sup>ナ</sup>なし。尼ごせんにもこのよしをつつふ(委曲)とかたり申させ給<sup>ヒ</sup>候へ。法門の事こまごまどかきつへ(書傳)申<sup>ス</sup>べく候へども。事ひさしくなり候へばとどめ候。ただし禪宗と念佛宗と律宗等の事は少前さきにも申<sup>テ</sup>候。眞言宗がこと(殊)に此國とたうと(唐土)とをばはるばして候。

善無畏三藏金剛智三藏不空三藏弘法大師慈覺大師智證大師此六人が大日の三部經と法華經との優劣に迷惑せしのみならず。三三藏事をば天竺よせて兩界をつくりいだし狂惑しけるを。三大師うちぬかれて日本ならひわた(智渡)し國主並に萬民につたへ。漢土の玄宗皇帝も代をばらばし。日本國もやうやくをとろ(衰)へて八幡大菩薩の百王のちかい(誓)もやぶれて。八十二代隱岐の法王代を東にとられ給(あづま)しは。ひとへに三大師の大僧等がいのり(祈)しゆへに還著於本人して候。關東は此惡法惡人を對治せしゆへに十八代をつぎて百王にて候べく候つるを。又かの惡法の者どもを御歸依有(ゆ)へに一國には主なければ。梵釋日月四天の御計として佗國にをばせつけてをどして御らむあり。又法華經の行者をつかわして御いさめあるをわやめずして。彼の法師等に心をあわせて世間出世の政道をやぶり。法にすぎて法華經の御かたきにならせ給。すでに時すぎぬれば。此國やぶれなんとす。やくびやう(疫病)はずでにいくさ(軍)にせんふ(先符)せわ(は)またしるしなり。あさましあさまし。

二月二十三日

みさわどの

日蓮花押

明治三十五年五月廿七日京都妙覺寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル紙數ハ十八枚ナリ但シ此書處々讀ガタキ所ハ且ク興本ニ依リ又愚見ヲ附ス(稻田海素履記)

○上野殿御返事

微上二四 考三九

蹲いものかしら 鳴くしがら(串柿) 燒米やきこめ 粟くり たかな(筍) すづつ(酢筒) 給と候畢シメ。月氏ツキノヒメに阿あ育大王と申ま王をばしき。一閻浮提四分、一をたなごころににぎ(掌握)り龍王ををしたかへて雨を心にまかせ。鬼神をめしつかひ給とき。始はは惡王なりしかども後には佛法に歸し。六萬人の僧を日日に供養し八萬四千の石の塔をたて給と。此大王の過去をたづぬれば佛は在世に徳勝童子 無勝童子とて二人のをさなき(幼)人あり。土の餅もちを佛に供養し給とて一百年の内に大王と生なたり。佛はいみじしといへども法華經にたい(對)しまいらせ候へば。螢火と日月との勝劣天と地との高下也。佛を供養してかゝる功德ありいわうやす(種々)のくだ(菜)物をや。かればけ(飢渴)ならずいまはうへたる國也。此をもつてをもふに釋迦佛多寶佛十羅刹女いかでかまばらせ給はざるべき。抑モ今の時法華經を

信ずる人あり。或は火のごとく信ずる人もあり或は水のごとく信ずる人もあり。聽聞する時はもへたつ(燃立)ばかりをもへども(鹽)ごかりぬればすつる心あり。水のごとくと申はいつもたい(退)せず信ずる也。此はいかなる時もつねはたいせずとわせ給ば水のごとく信せさせ給へる歟。たうとし(たうとし)。まこと(實)やらむい(家)の内(内)にわづらひの候なるはよも鬼神のる(所爲)には候はじ。十らせち(羅刹)女の信心のふんざい(分際)を御心みず候らむ。まことの鬼神ならば法華經の行者をなやましてかうべ(頭)をわらんとをもふ鬼神の候べき歟。又釋迦佛法華經の御うら(虚)事の候べきかと。ふかくをばしめし候へ。恐恐謹言。

二月廿五日

日 蓮花押

御返事

明治三十六年一月十六日富士上野大石寺ニ於テ興師ノ御寫ヲ以テ對校ス(稻田海素記)

○始聞佛乘義

啓二六一

鈔一五四三

註一五四二

拾三 扶九四

青島七結自下州送甲州。其御志相當悲母、第三年御孝養也。問、止觀明靜前代未聞、心如何答、圓頓止觀也。問、圓頓止觀、意何答、法華三昧、異名也。問、法華三昧、心如何答、夫末代、凡夫修、行法華經、意有、一就類種、開會二相對種、開會也。問、此名、出何答、法華經、第三藥草喻品、云種相體性、四字。其四字、中第一種、一字、一就類種二相對種。其就類種者釋云、凡有、心者、是性(正)因、種隨、聞一句、是了因、種低頭舉手、是緣因、種等云云。其相對種者煩惱、與業、與苦、三道、押其當體、稱法身、與般若、與中、解脫、是也。其中、就類種、一法、宗、雖有、法華經、少分、又通、爾前、經經。妙樂云、別教、唯有、就類之種、而無、相對云云。此釋、云、別教、者非、本、別教、爾前、圓或、佗師、圓也。又法華經、迹門之中、供養舍利、已下、二十餘行之法門、大體、就類種、開會也。問、其相對種、心如何。答、止觀云、云何、聞圓法、聞、生死即法身、煩惱即般若、結業即解脫。雖有、三、名、而無、三、體、雖是、一體、而立、三、名、是、三、即一、相、其、實、無、有、異。法身、究竟、般若、解脫、亦究竟、般若、清淨、餘、亦清淨、解脫、自在、餘、亦自在。聞、一切、法、亦如是、皆具、佛法、無、所、減少、是、名、聞圓、等

云云。此釋ハ即相對種ノ手本也其意如何。答、生死者我等カ苦果ノ依身也所謂五陰十二入十八界。煩惱者見思塵沙無明ノ三惑也。結業者五逆十惡四重等也。法身者法身如來。般若者報身如來。解脫者應身如來。我等衆生自無始曠劫ニ已來具足此三道今值ニ法華經ニ三道即三德也。難云、從リ火水不出テ從リ石草不生惡因感ニ惡果一善因生ニ善報一佛教ノ定習也。而我等尋ニ究其根本一父母ノ精血赤白ニ滯和合、爲ニ一身一惡ノ根本不淨ノ源也。設ヒ傾ニ大海一洗之ヲ不レ可ニ清淨。又此苦果ノ依身ハ探リ見其根本一自ニ貪瞋癡ノ三毒ニ出也。依ニ此煩惱ノ苦果ノ二道ニ構フ業ヲ此業道即是結縛ノ法也。譬如入レ籠ニ鳥ノ如何、以テ此三道ニ稱ニ三佛因乎。譬如下集テ糞ヲ造ニ栴檀ヲ終ニ不レ香。答、汝カ難大ニ道理也我ニ不レ辨ニ此事。但、付法藏ノ第十三天台大師ノ高祖龍樹菩薩釋ニ妙法之妙、一字ヲ。譬如、大藥師ヲ能以レ毒爲レ藥、等云云。云、毒ト者何物、我等カ煩惱業苦ノ三道也。藥ト者何物、法身般若解脫也。能以レ毒ヲ爲レ藥ト者何物、變ニ三道ヲ爲ニ三德ト耳。天台云、妙名ヲ不可思議ト等云云。又云、夫レ一心乃至不可思議境意在於此ニ等云云。即身成佛ト申此レ是也。近代ノ華嚴眞言等盜ニ取此義ヲ爲ニ我物ト大偷盜天下ノ盜人は也。問云、凡夫ノ位モ可レ知此秘法ノ心ヲ答、私ノ答無レ詮。龍樹菩薩ノ大論ニ云ク九十

合言ニ漏盡ノ阿羅漢還テ作佛、唯佛能知。論議者正可レ論ニ其事ヲ不レ能ハ測リ知レ是、故、不應ニ戲論。若求ニ得レ佛ト時乃能了知、餘人ハ可レ信、而未タ可レ知、等云云。此釋ハ爾前ノ別教ノ十一品斷無明圓教ノ四十一品斷無明ノ大菩薩普賢文殊等モ未レ知ニ法華經ノ意。何況、藏通ニ教、三乘何ニ況、未代ノ凡夫ニ云、論文也。以テ之ヲ案、法華經、唯佛與佛乃能究盡者爾前ノ灰身滅智ノ一乘、抑ニ煩惱業苦ノ三道ヲ說ニ法身般若解脫ニ二乘還テ作佛。菩薩凡夫モ亦如是、釋也。故、天台ノ云、二乘ノ根敗名レ之ヲ爲レ毒、今經ニ得レ記、即是變レ毒ヲ爲レ藥ト。論ニ云、餘經ハ非ニ秘密ニ法華ハ是秘密等云云。妙樂云、論ニ云者太論也。云云。問、如レ是ノ聞レ之ヲ有レ何、益ニ乎答、云、始聞ニ法華經ヲ也。妙樂云、若信ニ三道即是三德ト尙能度ニ於ニ死之河、況、三界耶云云。未代ノ凡夫聞ニ此法門、唯我一人非ニ成佛ノ父母モ、又即身成佛。此第一ノ孝養也。爲ニ病身ノ之故、不レ委細。又、又可レ申。

建治四年太歲二月二十八日

富木殿

蓮花押

明治三十五年三月二十五日下總正中山法華經寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉レ但シ全文九丁百一行ナリ(稻山海素度記)



○諸人御返事 微上一四 考三二一

三月十九日、和風並飛鳥同、二十一日戌時到來、日蓮三生之間、祈請並所願忽令成就一歟。將又五五百歳、佛記宛如符契。所詮召合、眞言禪宗等、謗法諸人等、令決是非。日本國一同、爲日蓮弟子檀那。我弟子等、出家爲主上上皇、師。在家、烈、列、左右、臣下。將又一閻浮提皆仰、此法門。幸甚幸甚。

弘安元年三月廿一日戌時

諸人御返事

蓮花押

明治三十五年四月十一日平賀本土寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ此書全文三紙ナリ(稻田海素度記)

○上野殿御返事

啓三四三 妙二三四五 語四七 拾七五 扶二三三

白米一斗いも(幸)一駄、これにやく(蒲團)五枚あざと送給候畢。なによりも石河の兵衛入道殿のひめ御前の度度御ふみ(文)をつかはしたりしが。三月の十四五やげ(夜比)にて候しやらむ御ふみありき。この世の中をみ候に病なき人

もこれん(今年)なんどをすぐべしともみへ候はぬ上。もとより病ものにて候が。すでにさう(急)になりて候さいど(最後)の御ふみ也とかかれて候しが。さればつゝにはかなくならせ給ぬるか。臨終に南無阿彌陀佛と申あはせて候人は。佛の金言なれば一定の往生どころ人も我も存候へ。しかれどもいかなる事にてや候けん。佛のくひ(悔)かへさせ給て未顯眞實正直捨方便ととかせ給て候があさましく候が。此を日蓮が申候へばうら事うわのうらなりと日本國にはいかられ候。此のみならず佛の小乗經には十方に佛なし一切衆生に佛性なしととかれて候へども。大乘經には十方に佛まします一切衆生に佛性ありととかれて候へば。たれか小乗經を用候べき皆大乘經をこそ信候へ。此のみならず(不思議)のちがひめ(違目)ども候がかし。法華經は釋迦佛已今當の經經を皆くひかへしうちやぶりて。此經眞實也ととかせ給て候しかば。御弟子等用事なし。爾時多寶佛證明をくわへ十方の諸佛舌を梵天につけ給。さて多寶佛はとびら(舞)をたて十方の諸佛は本土にかへらせ給て後は。いかなる經經ありて法華經を釋迦佛やぶらせ給ども。他人わゑ(和會)になりてやぶりがたし。しかれば法華經已後、經經普賢經涅槃經等に

は法華經をばほむる事はあれどもりし事なし。而を眞言宗の善無畏等禪宗の祖師等此をやぶれり。日本國皆此事を信ぬ。例せば將門貞任なんどにかたらはれし人人のごとし。日本國すでに釋迦多寶十方の佛の大怨敵となりて數年になり候へば。やうやくやぶれゆくはどに。又かう申者を御あだみあり。わざはひ(禍)にわざはひのならざるゆへに。此國土すでに天のせめ(責)をかほり候はんするぞ。此人は先世の宿業かいかなる事ぞ。臨終に南無妙法蓮華經と唱へさせ給ける事は。一眼のかめ(龜)の浮木の穴に入り。天より下いと(絲)の大地のはり(針)の穴に入がごとし。あちふしぎふしぎ。又念佛は無間地獄に墮つると申事をは經文に分明なるをばしらすして皆人日蓮が口より出たりとれもへり。天はまつげ(睫毛)のごとしと申はこれなり。虚空の遠きとまつげの近きと人みなみる事なり。此尼御前は日蓮が法門だにひが事に候はばよ。臨終には正念には住し候はじ。又日蓮が弟子等の中になかなか法門しりたりげに候人人はあしく候げに候。南無妙法蓮華經と申は法華經の中の肝心入の中の神のごとし。此にものをならぶればささき(后)のならべて二王をれとごとし。乃至ささきの大臣已下になひなひ(内々)とつ(縁)ぐが

ごとし。わざはひのみなもとなり。正法像法には此法門をひろめず餘經を失はじがため也。今末法に入りぬれば餘經も法華經もせん(詮)なし但南無妙法蓮華經なるべし。かう申出候もわたくし(私)の計にはあらず。釋迦多寶十方諸佛地涌千界の御計也。此南無妙法蓮華經に餘事をまじ(交)へばゆゆしき(舞)が事也。日出ぬればどほし(火)せん(詮)なし。雨のふるに露なにのせんかあるべき。嬰兒に乳より外のものをやしなうべき歟。良薬に又薬を加へぬる事なし。此女人はなにどなけれども自然に此義にあたりてしををせるなり。たうとしたりとし。恐恐謹言。

四月一日

日蓮花押

上野殿御返事

明治三十六年一月十七日宮土上野大石寺ニ於テ興師ノ御寫本ヲ以テ對校ス但シ年號ハ興師弘安元年ト細注シ給フ(稻田海素記)

○檀越某御返事 微上二四 考三三

御文うけ給候畢。日蓮流罪して先先にわざわいども重て候に。又なにと申事か候べきとはをもへども人のろん(損)せんとし候には。不可思議の事の候へばさが(兆)候はんずらむ。もしりの義候わば用て候はんには百千萬億倍のさいわいなり。今度予○三度になり候。法華經もよも日蓮をばゆるき行者とわをばせじ。釋迦多寶十方の諸佛地踊(涌)千界の御利生今度みはて(見果)候はん。あわれあわれさる事の候へかし。雪山童子の跡ををひ不輕菩薩の身になり候はん。いたづらにやくびやう(疫病)にやをか(侵)され候はんずらむ。をいじに(老死)にや死候はんずらむ。あらあさましあさまし。願は法華經のゆへに國主にあだまれて今度生死をはなれ候ばや。天照太神正八幡日月帝釋梵天等の佛前の御ちかい(誓)今度心み候ばや。事事さてをき候ぬ。各各の御身の事は此より申はからうべし。さでをはするこり法華經を十二時に行せさせ給ては候らめ。あなかしこあなかしこ。御みやづかい(仕宣)を法華經とをばしめせ。一切世間の地(池)生産業、皆與實相不二相違背は此なり。かへすがへす御文の心ころをもいやられ候へ。恐恐謹言。

四月十一日

日蓮花押

明治三十五年四月二日正中山法華經寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ此章全ク四紙ナリ而ニ今圓圖ノ處ニ第二紙ヲ失セリ朝本等ニモ未タ其文ヲ見ス(稻田海素庵記)

○太田左衛門尉御返事 微上三三 考四四

當月十八日之御狀同廿三日之午、剋計到來、應拜見仕候畢。如ク御狀ノ御布施鳥目十貫文、太刀、五明一本、焼香廿兩給候。抑モ專ラ御狀ニ云ク某今年は五十七に罷成候へば大扨の年歎と覺候。なにやらんして正月の下旬之比より卯月の此比に至り候まで身心に苦勞多く出来候。自り本受人身者には必身心に諸病相續して五體に苦勞あるべしと申ながら、更に云云。此事最第一ノ歎事也。十二因縁と申、法門あり。意は我等が身は以テ諸苦ヲ爲レ體ト。されば先世に業を造る故に諸苦を受け先世の集煩惱が諸苦を招き集め候。過去の二因、現在の五果、現在の三因、未來の兩果として三世次第して一切の苦果を感ずる也。在世の三乗が此等の諸苦を失はんとて沈空理ニ灰身滅智して。菩薩の勤行精進の志を忘れ空理を證得せん事を眞極と思也。佛方等の時此等の心地を彈呵し給

太田左衛門尉御返事 (遺二四ノ五〇)

千七百十九

(外十二ノ五九)

し也。然るに生を受<sup>スレ</sup>此三界者離<sup>レ</sup>苦<sup>ヲ</sup>者あらんや。羅漢の應供猶<sup>スラ</sup>如此況<sup>ヤ</sup>底下の凡夫をや。さてこゝろいふき生死を離るべしと勸め申<sup>シ</sup>候へ。此等體の法門はさて置<sup>キ</sup>ぬ。御邊は今年は大尾と云云。昔伏羲の御宇に黄河と申す河より龜と申<sup>ス</sup>魚八卦と申す文を甲に負<sup>テ</sup>浮出たり。時の人此文を取り舉<sup>テ</sup>て見れば人の生年より老年の終りまで尾の様を明たり。尾年の人の危き事は少水に住む魚を鷓鴣<sup>シカリス</sup>なんどが伺ひ燈の邊に住める夏の蟲の火中に入<sup>ラ</sup>んとするが如くあやうし。鬼神やもすれば此人の神を伺ひなやまさんとす。神内と申す時は諸の神在<sup>リ</sup>身<sup>ニ</sup>萬事叶<sup>フ</sup>心。神外と申<sup>ス</sup>時は諸<sup>ノ</sup>神識の家を出<sup>テ</sup>て萬事を見聞する也。當年は御邊は神外と申<sup>テ</sup>諸神佗國へ遊行すれば慎<sup>シ</sup>て除災得樂を祈り給<sup>フ</sup>べし。又木性の人にて渡<sup>ラ</sup>せ給へば今年は大尾なりとも春夏の程は何事か渡<sup>ラ</sup>せ給<sup>フ</sup>べき。至門性經云<sup>ク</sup>木<sup>ハ</sup>遇<sup>テ</sup>金<sup>ニ</sup>抑揚<sup>シ</sup>火<sup>ハ</sup>得<sup>テ</sup>水<sup>ヲ</sup>光滅<sup>シ</sup>土<sup>ハ</sup>值<sup>テ</sup>木<sup>ニ</sup>時<sup>ニ</sup>瘦<sup>キ</sup>金<sup>ハ</sup>入<sup>テ</sup>火<sup>ニ</sup>消<sup>エ</sup>失<sup>キ</sup>水<sup>ハ</sup>遇<sup>テ</sup>土<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>行<sup>キ</sup>等云云。指<sup>シ</sup>て引<sup>キ</sup>申<sup>ス</sup>べき經文にはあらざれども。予が法門は四悉檀を心に懸<sup>テ</sup>て申<sup>ス</sup>なれば強<sup>チ</sup>に成佛の理に不<sup>レ</sup>違<sup>ハ</sup>者且世間普通の義を可<sup>ク</sup>用<sup>ク</sup>歟。然に法華經と申<sup>ス</sup>御經は身心の諸病の良藥也。されば經云<sup>ク</sup>此經<sup>ハ</sup>則爲<sup>レ</sup>閻浮提<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>病<sup>之</sup>良藥若人<sup>有</sup>病得<sup>レ</sup>聞<sup>ニ</sup>是<sup>ノ</sup>經<sup>ヲ</sup>病即

消滅<sup>シ</sup>不老不死等云云。又云<sup>ク</sup>現世<sup>ハ</sup>安穩<sup>ニ</sup>後生<sup>ハ</sup>善處等云云。又云<sup>ク</sup>諸餘<sup>ノ</sup>怨敵皆悉<sup>ク</sup>摧滅等云云。取分奉<sup>ル</sup>御守<sup>リ</sup>方便品壽量品同<sup>ク</sup>は一部書<sup>キ</sup>て進<sup>ラ</sup>らせ度候へども。當時は難<sup>ク</sup>去<sup>ル</sup>隙<sup>トモ</sup>も入<sup>ル</sup>事候へば略<sup>シ</sup>て二品奉<sup>リ</sup>候。相構<sup>ハ</sup>相構<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>離<sup>テ</sup>御身<sup>ニ</sup>重<sup>キ</sup>つゝ<sup>ハ</sup>み<sup>セ</sup>也<sup>ト</sup>御所持<sup>可</sup>有<sup>ル</sup>者也。此方便品と申<sup>ス</sup>は述門の肝心也。此品には佛十如實相の法門を説<sup>キ</sup>て十界の衆生の成佛を明<sup>カ</sup>し給へば。舍利弗等は此を聞<sup>テ</sup>て斷<sup>リ</sup>無明<sup>ノ</sup>惑<sup>ヲ</sup>叶<sup>フ</sup>眞因<sup>ノ</sup>位<sup>ニ</sup>のみならず。未來華光如來と成<sup>テ</sup>て成佛の覺月を離<sup>レ</sup>垢世界の曉<sup>キ</sup>の空に詠<sup>セ</sup>り。十界の衆生の成佛の始<sup>ハ</sup>是也。當時の念佛者眞言師の人人成佛は我依經に限<sup>レ</sup>りと深く執<sup>シ</sup>するは。此等の法門を不<sup>レ</sup>習學<sup>シ</sup>未顯眞實の經に所<sup>レ</sup>説<sup>ク</sup>名字計<sup>リ</sup>なる授記を執<sup>ス</sup>る故也。貴邊は日來<sup>ハ</sup>此等の法門に迷<sup>ヒ</sup>給<sup>シ</sup>しかども日蓮が法門を聞<sup>テ</sup>て。賢者なれば本執<sup>ヲ</sup>を忽<sup>チ</sup>に翻<sup>シ</sup>給<sup>テ</sup>て法華經を持<sup>テ</sup>給<sup>フ</sup>のみならず。結句は身命よりも此經を大事と思食<sup>ス</sup>事不思議が中の不思議也。是は偏に今の事に非<sup>ズ</sup>。過去の宿緣開發せるにこそかくは思食<sup>ヲ</sup>らめ難<sup>ク</sup>有<sup>リ</sup>難<sup>ク</sup>有<sup>リ</sup>。次に壽量品と申<sup>ス</sup>は本門の肝心也。又此品は一部の肝心一代聖教の肝心のみならず三世の諸佛の說法の儀式の大要也。教主釋尊壽量品の一念三千の法門を證得<sup>シ</sup>給<sup>フ</sup>事は三世の諸佛と内證等<sup>シ</sup>が故也。但

し此法門は非釋尊一佛己證諸佛亦然也。我等衆生の無始已來六道生死の浪に沈没せしが。今教主釋尊の所説の法華經に奉値事は乃往過去に此壽量品の久遠實成の一念三千を聽聞せし故也。難行法門也。華嚴眞言の元祖法藏澄觀善無畏金剛智不空等が。釋尊一代聖教の肝心なる壽量品の一念三千の法門を盜取て。自本自の依經に不説法華經大日經に有る一念三千云々取り入る程の盜人にばかされて。末學深く此見を執す無墓無墓の結句は眞言の人師云々爭テ盜テ醍醐各名自宗云云。又云、法華經の二乗作佛久遠實成は無明の邊域大日經に所説法門は明の分位等云云。華嚴の人師云、法華經に所説一念三千の法門は枝葉華嚴經の法門は根本の一念三千也云云。は無跡形一瞥見也。眞言華嚴經一念三千を説きたらばこり一念三千と云々名目をばつかはめ。れかしかし龜毛兎角の法門也。止く久遠實成の一念三千の法門は前四味並に法華經迹門十四品まで秘させ給て有しが。本門正宗に至りて壽量品に説顯し給へり。此一念三千の寶珠をば妙法五字の金剛不壞の袋に入れて末代貧窮の我等衆生の爲に残し置かせ給し也。正法像法に出させ給し論師人師の中に此大事を不知。唯龍樹天親ころ心の底に知

せ給しかども色にも出させ給はず。天台大師の立文止觀に秘せんと思召しかども。未代の爲にや止觀十章第七正觀の章に至りて粗書かせ給たりしかども薄葉に釋を設てさて止給ぬ。但示理觀一分事の三千をば斟酌し給。彼天台大師は迹化の衆也。此日蓮は本化の一分なれば盛に本門の事の分を引むべし。然に如是の大事の義理の籠らせ給御經を書きて進らせ候へば彌信を取らせ給べし。勸發品云、當起遠迎當如敬佛等云云。安樂行品云、諸天晝夜常爲法故而衛護之乃至天諸童子以爲給使等云云。譬諭品云、其中衆生悉是吾子等云云。法華經の持者は教主釋尊の御子なれば。爭か梵天帝釋日月衆星も晝夜朝暮に守らせ給はざるべきや。扨の年災難を拂はん秘法には不過法華經たのもしきかなたのもしきかな。さては鎌倉に候し時は細細申承候しかども今は遠國に居住候に依りて期面謁事更になし。されば心中に含たる事も使者玉章にあらざれば不及申歎かし歎かし。當年の大扨をば日蓮に任せ給へ。釋迦多寶十方分身の諸佛の法華經の御約束の實不實は是にて量るべき也。又又可申候。

弘安元年戊寅四月廿三日

日蓮花押

太田左衛門尉殿御返事

○華果成就御書 考八四九

其後なに事もうちたへ不申承候。さては建治の比故道善房聖人のために二札かきつかはし奉り候を。山高き森にてよませ給て候よし悦入候。たとへば根ふかきとさんば枝葉かれず源に水あれば流かはかず。火はたきぎかく(缺)ればたへぬ。草木は大地なくして生長する事あるべからず。日蓮法華經の行者となつて善惡につけて日蓮房日蓮房とうたはるる此御恩さながら故師匠道善房の故にあらすや。日蓮は草木の如く師匠は大地の如し。彼地涌の菩薩の上首四人にてまします一名上行乃至四名安立行菩薩云云。末法には上行出世し給はば安立行菩薩も出現せさせ給へば歎。さればいね(稻)は華果成就すれども必ず米の精大地にをさまる。故にひつぢ(再世)たひ(生)いでて二度華果成就するなり。日蓮法華經を弘る功德は必ず道善房の身に歸すべしあらたうと(實)たうと。よき弟子をもつとさんば師弟佛果にいたりあしき弟子をたぐはひぬれば師弟地獄にをつといへり。師弟相違せばなに事も成べからず。

委は又又申べく候。常にかたりあわせ(語合)て出離生死して同心に靈山淨土にてうなづき(願)かたり給へ。經云示衆有二三毒又現邪見相我弟子如是ノ方便度衆生云云。如前前申御心得あるべく候。穴賢穴賢。

弘安元年戊寅卯月 日

日

蓮花押

淨顯房

義淨房

○松野殿御返事 考四一

考四一

日月は地にれち須彌山はくづるとも。彼女人佛に成せ給へん事疑なし。あらたのもしやたのもしや。干飯一斗古酒一筒(ちまさ)あうざし(音勢)たかんな(箭)方方の物送り給て候。草にさける花木の皮を香として佛に奉る人。靈鷲山へ参らざるはなし。況や民のほね(骨)をくだける白米 人の血をしぼれるが如くなるふるさけ(古酒)を。佛法華經にまいらせ給へる女人の成佛得道疑へしや。

五月一日

日

蓮花押

妙法尼御返事

○窪尼御前御返事 考三五

綜五把 第十本 千日ひとりの給畢。いづもの事に候へどもながあめ(長雨)ふりてなつ(夏)の日ながし。山はふかくみち(路)しげければふみわくる人も候はぬに。ほど(き)ぎす(郭公)につけての御ひとこへ(一聲)ありがたしありがたし。さてはあつわら(熱原)の事こんど(今度)をもつてをばしめせさきもつら(慮)事なり。かうのどの(守殿)は人のいゝしにつけてくはし(委)くもたづ(訊)ぬすして此御房をなが(流)しける事あさましとをばしてゆるさせ給てののちは。させるとが(科)もなくてはわかんが又あだ(怨)せらるべき。す(未)の人人の法華經を心にはあだめどもうへにうしらはいかんがとをもひて。事にかづけて人をあだむはどにかへりてさきさき(見)ぬさきよりすい(推)して候。さき(佐渡)の國にてもうらみげうりを三度までつくりて候し。これにつけても上と國との御ためあはれなり。木のしたなるむし(蟲)の木をくらひたらし師子の中のむしの

師子を食うしなふやうに。守殿の御をん(恩)にてすぐる人人が守殿の御威をかりて一切の人人ををどしなやましわづらはし候らへ。上の仰(かみ)とて法華經を失て國もやぶれ主とも失て。返つて各各が身をばるばるあさましさま。日蓮はいやしけれども經は梵天帝釋日月四天天照太神八幡大菩薩のまほらせ給、御經なれば。法華經のかたをあだむ人人は劍をのみ火を手ににぎるなるべし。これにつけてもいよいよ御信用のまさらせ給事。たうとく候うたうとく候。

五月三日

日 蓮花押

窪 御 返 事

明治三十六年二月二十三日房州保田妙本寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ正本六枚ノ中初  
 一上ト一國迄四枚アリ其失セシ所ハ大石寺ノ興師ノ御寫ヲ以テ校ス(稻田海素樓記)

徵下四 考五二七

○南條殿女房御返事  
 八木二俵送り給候畢。度度、御志難申盡候。夫、水、寒、積爲氷、雪、年、累、爲水精、惡、積地獄となる善、積佛となる。女人は嫉妬かさなれば毒蛇となる。法華經供養の功德かさならば、龍女があとをつがざらん。山といひ河といひ馬といひ下人といひ。かたがたかんなん(艱難)のところ、に度度の御志申ばかりなし。御所勞の人の臨終正念。靈山淨土疑なかるべし疑なかるべし。

五月二十四日

日 蓮花押

御返事

明治三十六年一月十六日富士大石寺ニ於テ與師ノ御寫ヲ以テ對校ス(稻田海雲記)

○日女御前御返事

徵下四 考五二九

御布施七量文送り給畢。屬累品の御心は佛、虚空に立給て、四百萬億那由佗の世界にじよしの(武藏野)のすゝき(芒)のごとく、富士山の木のごとく。ぶくぶく(葉々)といひ(膝)をつめよせて頭を地につけ身をま(曲)げ掌をあはせあせを流

し。つゆしげくればせし上行菩薩等、文殊等、大梵天王帝釋日月四天王龍王十羅刹女等に法華經をゆづ(讓)らんがために。二度まで頂をなでさせ給ふ。譬ば悲母の一子が頂のかみ(髮)をなづ(撫)るがごとし。爾、時に上行乃至日月等忝(かたじけな)さ仰(かたじけな)を蒙りて法華經を末代に弘通せんとちかひ給しなり。藥王品と申、は昔、喜見菩薩と申せし菩薩、日月淨明德佛に法華經を習、させ給て。其師の恩と申、法華經のたうとこと申、かん(感)にたへかねて萬の重寶を盡、させ給、しかども。なを心ゆかずして身に油をぬ(塗)りて千二百歳の間。當時の油にどうしみ(燈心)を入れた(焚)くがごとく身をたいて佛を供養し。後に七萬二千歳が間ひぢ(臂)をともしび(燈)としてたきつくし。法華經を御供養候き。されば今法華經を後五百歳の女人供養せば其功德を一分ものこさずゆづるべし。譬ば長者の一子に一切の財寶をゆづるがごとし。妙音品と申、は東方の淨華宿王智佛の國に妙音菩薩と申せし菩薩あり。昔の雲雷音王佛の御代に妙莊嚴王の后淨德夫人なり。昔法華經を供養して今妙音菩薩となれり。釋迦如來の娑婆世界にして法華經を説、給ふにまいりて約束申して。末代の女人の法華經を持、給をまもるべしと云云。觀音品と申、は又普門品と名、く。始、は觀



世音菩薩を持奉る人の功德を説きて候此を觀音品と名づく。後には觀音の持給へる法華經を持つ人の功德をとけり此を普門品と名づく。陀羅尼品と申は二聖二天十羅刹女の法華經の行者を守護すべき様を説きけり。二聖と申は藥王と勇施となり。二天と申は毗沙門と持國天となり。十羅刹女と申は十人の大鬼神女。四天下の一切の鬼神の母なり。又十羅刹女の母あり鬼子母神是也。鬼のならひとして人を食す。人に三十六物あり所謂糞と尿と唾と肉と血と皮と骨と五藏と六腑と髮と毛と氣と命等なり。而に下品の鬼神は糞等を食し中品の鬼神は骨等を食す上品の鬼神は精氣を食す。此十羅刹女は上品の鬼神として精氣を食す疫病の大鬼神なり。鬼神に二あり一には善鬼二には惡鬼なり。善鬼は法華經の怨を食す惡鬼は法華經の行者を食す。今日本國の去年今年の大疫病は何とか心うべき。此を答ふべき様は一には善鬼也梵王帝釋日月四天の許されありて法華經の怨を食す。二には惡鬼が第六天の魔王のすゝめによりて法華經を修行する人を食す。善鬼が法華經の怨を食ふことは官兵の朝敵を罰するがごとし。惡鬼が法華經の行者を食ふは強盜夜討等が官兵を殺すがごとし。例せば日本國に佛法の渡りてありし時。佛法の敵たりし

物部大連 守屋等も疫病をやみき蘇我宿禰馬子等もやみき。欽明敏達用明の三代の國王は心には佛法釋迦如來を信じまいらせ給てありしかども。外には國の禮にまかせて天照太神熊野山等を仰ぎまいらせさせ給ひしかども。佛と法との信はうすく神の信はあつかりしかば。強きにひかれて三代の國王疫病疱瘡にして崩御ならせ給き。此をもて上の二鬼をも今の代の世間の人の疫病をも日蓮が方のやみしぬ(病死)をも心うべし。されば身をすてて信せん人人はやまぬへんもあるべし。又やむともたす(助)かるへんもあるべし。又大惡鬼に値なば命を奪はるる人もあるべし。例せば畠山重忠は日本第一の大力の大將なりしかども多勢には終にはほろびぬ。又日本國の一切の眞言師の惡靈となれると。竝に禪宗念佛者等が日蓮をあたまんがために國中に入り亂れたり。又梵釋日月十羅刹の眷屬日本國に亂入せり。兩方互に責とらんとはげむなり。而に十羅刹女は總じて法華經の行者を守護すべしと誓はせ給て候へば。一切法華經を持つ人人をば守護せさせ給らんと思候は。法華經を持つ人人も或は大日經はまされりなど申して眞言師が法華經を讀誦し候はかへりてるし(誹)るにて候也。又餘の宗宗も此を以て押し計るべし。又法華

經をば經のごとく持ッ人人も法華經の行者を或は貪瞋癡により或は世間の事により。或はしなじな(品々)のふるまひ(振舞)にて憎む人あり。此は法華經を信ずれども信ずる功德なしかへりて罰をかほるなり。例せば父母なんどには謀反等より外は子息等の身として此に背けば不孝也。父が我がいとをしきめ(愛婦)をとり母が我がいとをしきめをとり(愛夫)を奪ふとも。子の身として一分も違はば現世には天に捨られ後生には必ず阿鼻地獄に墮る業也。何に況や父母にまされる賢王に背かんをや。何に況や父母國王に百千萬億倍まされる世間の師をや。何に況や出世間の師をや。何に況や法華經の御師をや。黄河は千年に一度すむ(澄)といへり聖人は千年に一度出る也。佛は無量劫に一度出世し給ふ。彼には値ッといへども法華經には値ッがたし。設ひ法華經に値ッ奉るとも末代の凡夫法華經の行者には値ッがたし。何ふなれば末代の法華經の行者は法華經を説ざる華嚴阿含方等般若大日經等の千二百餘尊よりも。末代に法華經を説く行者は勝ッて候なるを。妙樂大師釋云有ニ供養ニ者ハ福過ニ十號ニ若惱亂者ハ頭破ニ七分ニ云云。今日本國の者去年今年の疫病と去正嘉の疫病とは人王始て九十餘代に並なき疫病也。聖人の國にあるをあたむゆへと見

わたり。師子を吼る犬は腸切れ日月をのむ脩羅は頭への破れ候なるはこれなり。日本國の一切衆生すでに三分が二はやみ(病)ぬ又半分は死ぬ。今一分は身はやまざれども心はやみぬ。又頭も顯にも冥にも破ぬらん。罰に四あり總罰別罰冥罰顯罰也。聖人をあためは總罰一國にわたる又四天下又六欲四禪にわたる。賢人をあためは但敵人等也。今日本國の疫病は總罰也定て聖人の國にあるをあたむ歟。山は玉をいだけば草木かれず國に聖人あれば其國やぶれず。山の草木のかれぬは玉のある故とも愚者はしらす。國のやぶるは聖人をあたむ故とも愚人は辨へざる歟。設ひ日月の光ありとも盲目のために用事なし設ひ聲ありとも耳しひのために用の用かあるべき。日本國の一切衆生は盲目と耳しひのごとし。此一切の眼と耳とをくじ(抉)りて一切の眼をあげ一切の耳に物をきかせんはいか程の功德かあるべき。誰の人か此功德をば計るべき。設ひ父母子をうみて眼耳有りとも物を教ふる師なくば畜生の眼耳にてころあらしか。日本國の一切衆生は十方の中には西方の一方一切佛の中に阿彌陀佛一切の行の中には彌陀の名號。此三を本として餘行をば兼たる人もあり一向なる人もありしに。某去建長五年より今に至るまで二十餘

年の間。遠くは一代聖教の勝劣先後淺深を立近くは彌陀念佛と法華經の題目との高下を立申程に。上一人より下萬民に至るまで此事を用ひず。或は師師に問。或は主主に訴へ或は傍輩にかたり或は我身の妻子眷屬に申程に。國國郡郡郷郷村村寺社社沙汰ある程に。人ごとに日蓮が名を知り法華經を念佛に對して念佛のいみじき様法華經叶ひがたき事。諸人のいみじき様運ぬるき様を申す程に。上もあだみ下も惡む日本一同に法華經と行者との大怨敵となりぬ。かう申せば日本國の人人並に日蓮が方の中にも物にねばぬ者其人に信せられんとあらぬ事を云と思へり。此は佛法の道理を信じたる男女に知らせんれう(料)に申す。各各の心にまかせ給へし。妙莊嚴王品と申すは殊に女人御ために用事也妻が夫をすゝめたる品也。末代に及ても女房の男をすゝめんは名ころかわりたりとも功德は但淨徳夫人のごとし。いはうや此は女房も男も共に御信用あり。鳥の二の羽りなはり車の二の輪かかれり何事か成せざるべき。天あり地あり日あり月あり日てり雨ふる功德の草木花さき菓なるべし。次に勸發品と申すは釋迦佛の御弟子の中に僧はあまたありしかども迦葉阿難左右にればしき王の左右の臣の如し。此は小乘經の佛也。

又普賢文殊と申すは一切の菩薩多しといへども教主釋尊の左右の臣也。而に一代超過の法華經八箇年が間十方の諸佛菩薩等大地微塵よりも多く集り候しに。左右の臣たる普賢菩薩のねはせざりしは不思議なりし事也。而れども妙莊嚴王品をとかれてさてたはりぬべかりしに。東方寶威徳淨王佛の國より萬億の伎樂を奏し無數の八部衆を引卒してわくれればせ(馳)して參らせ給へしかば。佛の御きりく(氣色)やあしからんずらんと思ひし故にや。色かへて末代に法華經の行者を守護すべきやうをねんごろに申上られしかば。佛も法華經を閻浮に流布せんこと。ことにねんごろ(懸)なるべきと申すにやめで(懸)させ給へけん。返つて上の上位よりもことにねんごろに佛ほめさせ給へり。かゝる法華經を末代の女人二十八品を品品ごとに供養せばやとねほしめす但事にはあらず。寶塔品の御時は多寶如來釋迦如來十方の諸佛一切の菩薩あつまらせ給へぬ。此寶塔品はいづれのところにか只今ましますらんとかながへ候へば。日女御前の御胸の間八葉の心蓮華の内にははしますと日蓮は見まいらせて候。例せば蓮のみ(實)に蓮華の有がごとく後の御腹に太子を懷妊せるがごとし。十善を持つる人太子と生んとして後の御腹にましますれば諸天此を守護す。

故に太子をば天子と號す。法華經二十八品の文字六萬九千三百八十四字一の文字は字ごとに太子のごとし字毎に佛の御種子也。闇の中に影あり人此をみず虚空に鳥の飛跡あり人此をみず大海に魚の道あり人これをみず。月の中に四天下の人物一もかけず人此をみず。而といへども天眼は此をみる。日女御前の御身の内心に寶塔品まします凡夫は見ずといへども釋迦多寶十方の諸佛は御らんぬ。日蓮又此をすい(推す)あらたうとししたうとし。周の文王は老たる者をやしなひていくさ(軍)に勝す。其末三十七代八百年の間すゑ(末々)にはひが事ありしかども根本の功によりてさかへ(榮)させ給ふ。阿闍世王は大惡人たりしかども父びんばさら(頻婆沙羅)王の佛を數年やしなひまいらせし故に九十年の間位を持給き。當世も又かくの如く法華經の御かたきに成りて候代なれば須臾も持つべしとはみねねども。故權ノ大夫殿武藏ノ前司入道殿の御まつりごと(政)いみじくて暫く安穩なるか。其も始終は法華經の敵と成りなば叶(まじ)きにあや。此人人の御僻案には念佛者等は法華經にちい(知音)ん也日蓮は念佛の敵也。我等は何をも信じたりと云云。日蓮つめて云、代に大禍なくば古にすぎたる疫病飢饉大兵亂はいかに。召も決せずして法華經の行

者を二度まで大科に行ひしはいかに不便不便。而に女人の御身として法華經の御命をつがせ給は釋迦多寶十方の諸佛の御父母の御命をつがせ給なり。此功德をもてる人一閻浮提の内に有べしや。恐恐謹言。

六月二十五日

日蓮花押

日女御前御返事

此書ノ真贋ノ斷編即六十六丁右終行「御身」已下六行ハ京都本能寺ニ在リ(稻田海素慶記)

○兵衛志殿御返事 考四三

みろをけ一給畢。はらのけ(下痢)は左衛門どのの御薬になを(治)りて候。又このみろ(味噌)をなめ(嘗)ていよいよこゝちなをり候ぬ。あはれあはれ今月御つゝがなき事をころ。法華經に申上まいらせ候へ。恐恐。

六月廿六日

日蓮花押

兵衛志殿御返事

○中務左衛門尉殿御返事

微下四 考五ニセ

夫一人に二病あり。一には身病。所謂地大百一水大百一火大百一風大百一已上四百四病。此病は治(持)水 流水 耆婆 偏鵲等の方薬をもつて此を治す。二には心の病。所謂三毒乃至八萬四千病也。佛に有らざれば二天三仙も治しがたし何況(カニ)神農黄帝の方及べしや。又心の病に重重的の淺深分れたり。六道の凡夫の三毒八萬四千の心の病をば小乗、三藏俱舍成實律宗の佛此を治す。大乘ノ華嚴般若大日經等の經經をうしりて起る三毒八萬の病をば。小乗をもつて此を治すればかへりては增長すれども平愈全くなし大乘をもつて此を治すべし。又諸大乘經の行者の法華經を背きて起る三毒八萬の病をば。華嚴般若大日經眞言三論等をもつて此を治ればいよいよ增長す。譬へば木石等より出たる火は水をもつて消しやすし。水より起る火は水をかくればいよいよ熾盛に炎上高くあがる。今の日本國去今年の疫病は四百四病にあらざれば華陀 偏鵲が治も及はず。小乗權大乘の八萬四千の病にもあらざれば諸宗ノ人人のいのりも叶はずかへりて增長するか。設今年はとどまるとも年年に止がたからむか。いかにも最後に大事出來して後ち定まる事も候はんすらむ。法華

經ニ云ク若修ニ醫道ヲ順レ方ニ治レ病ヲ更ニ増シ佗ノ疾ヲ或ハ復致シ死ヲ而モ復増劇シ。涅槃經ニ云ク爾ノ時ニ王舎大城ノ阿闍世王○偏體ニ生ス瘡ヲ乃至如是ノ創(瘡)者從テ心ニ而生ス非ニ四大起。若言ニ衆生有ニ能治者一無有ニ是ノ處ニ云云。妙樂ノ云ク智人ハ知リ起テ蛇ハ自識レ蛇ヲ云云。此疫病ハ阿闍世王ノ如シ瘡ノ彼ノ非佛ニ難シ治シ此ノ非ニ法華ニ難シ除キ。將々又日蓮下痢去年十二月卅日事起リ今年六月三日四日日日に度をまし月月ニ倍增す。定業かと存處に貴邊の良薬を服してより已來日日月月に減じて今百分の一となれり。しらす教主釋尊の入りがわりまいらせて日蓮をたすけ給つか。地踊(通)の菩薩の妙法蓮華經の良薬をさづけ給へるかと思候なり。くはしくは筑後房申すべく候。

又追テ申シきくせんは今月二十五日戌の時來テ候。種種の物かずへ(算)つくしがたし。とどきの(宮木殿)のかたびら(帷)の申給へし。又女房の御ををちの御事。なげき入ッて候よし申給ふべし。恐恐。

六月廿六日

日 蓮 花 押

中務左衛門尉殿御返事

明治三十五年六月二日京都立本寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但全章六紙ナリ(稻田海素慶記)

中務左衛門尉殿御返事二病書 (遺二四ノ六八)

千七百三十九

(外十四ノ四十五)

○窪尼御前御返事

微上ニ 考三

すず(種々)の御供養送り給<sub>レ</sub>畢。大風の草をなびかしいかづち(雷)の人ををどろかすやうに候。よ(世)の中にいかにいま(今)まで御しんよう(信用)候けるふしぎ(不思議)とよ(ね)根ふかければは(業)かれず。いづみ(泉)玉われれば水たぬすと申<sub>ス</sub>やうに。御信心のねのふかくいとぎよき玉の心のうちにわたらせ給<sub>レ</sub>歟。たうとしたうとし。恐恐。

六月二十七日

日 蓮花押

くばの尼御前御返事

明治三十六年一月十六日富士大石寺ニ於テ興師ノ御寫ヲ以テ對校ス(稻田海素記)

### 高祖遺文録卷之二十五

○妙法尼御前御返事

考六一五

先法華經につけて御不審をたてて其趣を御尋<sub>テ</sub>候事わりがたき大善根にて候。須彌山を佗方、世界へつぶてになぐ(擲)る人よりも三千大千世界をまりの如くにけあぐ(蹴上)る人よりも。無量の餘の經典を受<sub>テ</sub>持<sub>テ</sub>て人に説<sub>キ</sub>かせ聽聞の道俗に六神通をわせしめんよりも。末法のけふこのころ(今日此頃)法華經の一句一偈のいはれをも尋<sub>テ</sub>問<sub>フ</sub>人はありがたし。此趣を釋し説<sub>テ</sub>て人の御不審をはらすすべき僧もありがたかるべしと。法華經の四ノ卷寶塔品と申<sub>ス</sub>處に六難九易と申<sub>シ</sub>て大事の法門候。今此御不審は六(じゅう)難き事の内也。爰に知<sub>ル</sub>ぬ若御持<sub>テ</sub>あらば即身成佛の人なるべし。此法華經には我等が身をば法身如來 我等が心をば報身如來 我等がふるまひをば應身如來と説れて候へば。此經の一句一偈を持<sub>テ</sub>信する人は皆此功德をうなへ候。南無妙法蓮華經と申<sub>ス</sub>は是一句一偈にて候。然ども同<sub>シ</sub>一句の中にも肝心にて候。南無妙法蓮華經と唱る計<sub>リ</sub>にて佛になるべしやと。此御不審所詮に候一部の肝要八軸の骨髓にて候。人の

身ノ五尺六尺のたましひ(神)も一尺の面かほにあらはれ一尺のかほのたましひも一寸の眼まなこの内うちにれさまり候。又日本と申す二の文字ふたごに六十六箇國の人畜田畠上下貴賤七珍萬寶ひんぎん一もかくる事候はず收とて候。其ごとく南無妙法蓮華經の題目の内には一部八卷二十八品六萬九千三百八十四の文字一字もれずかけずれさめて候。されば經には題目たり佛には眼たりと樂天ものべられて候。記ノ八に略りやく舉こニ經題きんぎヲ立たニ收とム一部いちぶヲ妙樂めうがくも釋しればしまし候。心は略して經の名計なまじリを舉こるに一部を收とむと申ま文也。一切の事につけて所詮肝要と申ま事あり。法華經一部の肝心は南無妙法蓮華經の題目にて候。朝夕御唱ごしょう候はば正ただしく法華經一部を眞讀まことよみにあうばすにて候。一返唱へんしょうは二部乃至百返は百部千返は千部加様に不退に御唱ごしょう候はば不退に法華經を讀よ人にて候べく候。天台六十卷と申ま文には此やうを釋せられて候。かゝる持ちやすく行いじやすき法にて候を末代惡世の一切衆生のために説まををかせ給たまて候。經文きんぶんニ云い於末法中於後末世法欲滅時受持讀誦惡世末法時能持是經者後五百歲中廣宣流布と。此等の文ノ心は當時末法の代には法華經を持ち信ますべしよしを説まをれて候。かゝる明文を學まなしあやまりて。日本漢土天竺の謗法の學匠がくしやう達皆念佛者眞言禪律の

小乘權教には隨まり行いて法華經を捨すてはて候ぬ。佛法にまどへるをばしるしめされず。形かたちまことしげなれば云い事ことも疑うひあらじと計か御信用候間。をものはざるに法華經の敵釋迦佛の怨あだとならせ給たまて。今生には祈いのる所願も虚うそく命いのちもみじかく後生には無間大城をすみか(栖)とすべしと正ただしく經文に見みて候。さて此經の題目は習な讀よ事なくして大なる善根にて候。惡人も女人も畜生も地獄の衆生も十界ともに即身成佛と説まをれて候は。水の底なる石に火のあるが如く百千萬年くら(間)き所にも燈あかりを入いぬればあか(明)くなる。世間のあだなるものすら尙加か様に不思議あり何なにに況いはや佛法の妙たへなる御法みのりの御力をや。我等衆生、惡業煩惱生死果縛の身が。正ただ了縁の三佛性の因によりて即法報應の三身と顯あらわれん事疑うひなかるべし。妙法經力即身成佛と傳教大師も釋せられて候。心は法華經の力にてはくちなは(地)の龍女も即身成佛したりと申ます事也。御疑ごぎ候まべからず。委まかすは見參けんさんに入い候て申まべく候と申まさせ給へ。

弘安元年戊寅七月三日

日蓮花押

妙法尼御前御返事

○種種物御消息 考三三三

みなみなものをくり給て法華經にまいらせて候。抑日本國の人を皆やしない(養)て候よりも父母一人やしないて候は功德まさり候。日本國の皆人をころして候は七大地獄に墮候。父母をころせる人は第八の無間地獄と申す地獄に墮候。人ありて父母をころし釋迦佛の御身よりち(血)をいだして候人は。父母をころすつみ(罪)にては無間地獄に墮ちず。佛の御身よりちをいだすつみにて無間地獄に墮候也。又十惡五逆をつくり十方三世の佛の身よりちをいだせる人の法華經の御かたきとなれるは。十惡五逆十方の佛の御身よりちをいだせるつみにては阿鼻地獄へは入事なし。ただ法華經不信の大罪によりて無間地獄へは墮候也。又十惡五逆を日日につくり十方の諸佛を月月にはうせず候人。此(勝)する人と十惡五逆を日日につくらず十方の諸佛を月月にはうせず候人。此二人は善惡はるか(遙)にかわりて候へども。法華經を一字一點もあひりむ(背)きぬればかならずねなじやうに無間地獄へ入候也。しかればいまの代の海人山人日に魚鹿等をころし源家平家等の兵士等のとしと(年々)に合戦をなす人人は。父母をころさねばよも無間地獄には入候はじ。便宜候はば法

華經を信じてたまたま佛になる人も候らん。今の天台座主東寺御室七佛寺ノ檢校園城寺の長吏等の眞言師並禪宗念佛者律宗等は。眼前には法華經を信じよむに(似)たれども。其根本をたづぬれば弘法大師慈覺大師智證大師善導法然等カ弟子也。源にぞりぬれば流きよからず天くもれば地くらし。父母謀反をねこせば妻子はろふ山くづるれば草木たふるならひなれば。日本六十六ヶ國の比丘比丘尼等の善人等皆無間地獄に墮すべき也。されば今の代に地獄に墮ものは惡人よりも善人善人よりも僧尼僧尼よりも。持戒にて智慧かしこき人火の阿鼻地獄へは墮候也。此法門は當世日本國に一人もしり(知)て候人なし。ただ日蓮一人計にて候へば此を知つて申さずば日蓮無間地獄に墮てうかぶ期なかるべし。譬へば謀反のものをしりながら國主へ申さぬどが(失)あり。申せばかたき雨のごとし風のごとし。むぼん(謀叛)のもののごとし海賊山賊のもののごとし。かたがたしのび(忍)がたき事也。例せば威音王佛の末の不輕菩薩のごとし歡喜佛のすねの覺徳比丘のごとし。天台のごとし傳教のごとし。又かの人人よりもかたきすぎたり。かの人人は諸人にく(憎)まれたりしかどもいまだ國主にはあだまされず。これは諸人よりは國主にあだま



るる。父母のかたきよりもすぎたるをみよ。かゝるふしぎ(不思議)の者をふび  
 んどて御くやう(供養)候は。日蓮が過去の父母歟又先世の宿習歟なほるげの  
 事にはあらた。其上雨ふりかせ(風)ふき人のせい(制)するにころ心ざしはあら  
 われ候へ。此も又かくのごとし。ただ(平)なる時だにもするが(駿河)とかい(甲斐)  
 どのさかひは山たかく河ふかく石ねほくみち(路)せばし。いわうやたらじ  
 (當時)はあめ(雨)はしの(篠)をたてて三月(みつき)にねよびかわ(河)はまさりて九十日。  
 やま(山)くづれみちふさがり人もかよ(通)はずかつて(糧)もたぬていのち(命)か  
 うにて候つるに。このすす(種々)のもの給て法華經の御う(飢)をもつぎ。釋  
 迦佛の御いのちをもたすけまいらせ給ぬ。御功德ただをしはからせ給べし。  
 くはしくは又又申べし。恐恐。

七月七日

日 蓮 花 押

御 返 事

明治三十六年一月十六日富士大石寺ニ於テ興師ノ御寫ヲ以テ對校ス(稻田海素記)

○時光御返事

啓三四二 鈔三三三 音下三九 語四四四 拾七一九 扶一三二九

むぎ(麥)のしろきこめ一駄はじかみ(藁)送り給畢。こくぼんわう(斛飯王)の太  
 子あなりち(阿那律)と申人は。家にましましし時は俗性は月氏國、本主てんり  
 ん(轉輪)聖王のすね。師子けう(頰)王のまご(孫)淨飯王のれひ(甥)こくぼん王に  
 は太子也。天下にいやしからざる上家中には一日の間一萬二千人の人出入  
 す。六千人はたから(財)をかり(借)き六千人はかへりなす。かゝる富人にてれ  
 はする上天眼第一の人法華經にては普明如來となるべきよし佛記給。これ  
 は過去の行はいかなる大善とたづぬるに。むかしれうし(獵師)あり山のけだも  
 のをとりてすぎけるが。又ひね(稗)をつくり食とするはどに飢たる世なれば  
 ものものなし。ただひねのはん(飯)一ありけるをくひければりだ(利吒)と申辟  
 支佛の聖人來りて云。我七日、間食なし汝が食者(食者)なせよとこわ(乞)せ給し  
 かば。きたなき俗のこき(器)に入してけがしはじめて候と申ければ。ただね  
 させよ今食せずば死ぬべしと云。ねるれながらまいらせつ。此聖人まいり  
 給しがただひね一つびをどりのこ(取殘)してれうしにかへ(返)し給き。ひね  
 へんじていのこ(猪)となる。いのこ變て金となる金變て死人となる死人變

て又金人となる。指をぬいて賣れば本のごとし。かくのごとく九十一劫長者と生れ今はあなりちと申して佛の弟子なり。わづかのひねなれども飢たる國に智者の御いのちをつぐゆへにめでたきほう(報)をう。迦葉尊者と申せし人は佛の御弟子の中には第一にたと(貴)き人也。此人の家をたづぬれば摩かた(錫提)國の尼くりた(物律陀)長者の子也。宅にたゝみ(遊)千でうあり一でうはあつさ七尺下品のたゝみは金千兩也。からすき(犁)九百九十九のからすきは金千兩。金三百四十石入れたるくら(倉)六十かゝる大長者也。婦は又身は金色にして十六里をてらす。日本國の衣通姫にもすぎ漢土のりふじん(李夫人)にもこゑたり。此夫婦道心を發て佛の御弟子となれり。法華經にては光明如來といはれさせ給ふ。此二人の人人の過去をたづねれば麥飯を辟支佛に供養せしゆへに迦葉尊者と生る。金のせに(錢)一枚を佛師にあつらへて毗婆尸佛の像の御はく(箱)にひきし貧人は此人のめ(妻)となれり。今日蓮は聖人にはあらざれども法華經に御名をたてり。國主にくまれて我が身をせく上弟子かよう(通行)人をも。或はのり或はうち或は所領をとり或はどころをねふ。かゝる國主の内にある人人なればたとひ心ざしあるらん人人もとふ事なし。此事事

ふりぬ。なかにも今年は疫病と申し飢渴と申しとひくる人人もすくなし。たとひやまひ(病)なくとも飢て死事うたがひなかるべきに。麥の御とぶら(訪)ひ金にもすぎ珠にもこゑたり。彼のりだ(利吒)がひる(稗)は變て金人となる此の時光が麥何々變て法華經の文字とならざらん。此の法華經の文字は釋迦佛となり給ふ。時光が故親父の左右の御羽となりて靈山淨土へとび給へ。かへりて時光が身をねほ(覆)ひはぐくみ給へ。恐恐謹言。

七月八日

日 蓮花押

上野殿 御返事

明治三十六年一月十七日富士大石寺ニ於テ興師ノ御編ヲ以テ對校ス又弘安元年到來ト細注アリ  
(稲田海素記)

○妙法尼御前御返事

啓三四一五 鈔二三四三 音下四〇 語四四五 拾七三〇 扶二三三

記下三〇

御消息ニ云々めうほうれんくゑきやう(妙法蓮華經)をよるひる(夜書)となへまいらせ。すでにちかくなりて二聲かうしやう(高聲)にとなへ。乃至いきて候し時

よりもなをいろもしろ(色白)くかたちもろむ(損)せずと云云。  
法華經ニ云、如是相乃至本末究竟等云云。大論ニ云、臨終之時色黒者、墮ニ地獄ニ  
等云云。守護經ニ云地獄に墮<sup>ツル</sup>に十五の相 餓鬼に八種の相 畜生に五種の相等  
云云。天台大師の摩訶止觀ニ云、身、黒色、譬<sup>ニ</sup>地獄ノ陰ニ等云云。夫<sup>レ</sup>以<sup>テ</sup>は日蓮幼  
少の時より佛法を學び候しが念願すらく人の壽命は無常也。出る氣は入る氣  
を待<sup>ツ</sup>事なし風の前の露尙譬<sup>ニ</sup>にあらず。かして(賢)さもはかなき(愚)も老たる  
も若きも定め無き習<sup>ヒ</sup>也。されば先臨終の事を習<sup>フ</sup>て後に佗事を習<sup>フ</sup>べしと思<sup>ヒ</sup>  
て。一代聖教の論師人師の書釋あらあかんがへあつめ(勸集)て此を明鏡とし  
て。一切の諸人の死する時と並に臨終の後とに引<sup>キ</sup>向<sup>テ</sup>てみ候へばすこしもく  
もりなし。此人は地獄に墮<sup>テ</sup>給<sup>フ</sup>乃至人天とはみ(見)へて候を。世間の人人或  
は師匠父母等の臨終の相をかく(隠)して西方淨土往生とのみ申<sup>シ</sup>候。悲<sup>シ</sup>哉師  
匠は惡道に墮<sup>テ</sup>多<sup>ク</sup>苦<sup>シ</sup>しの(忍)びがたければ。弟子はとどまりて師の臨終  
をさんだん(讚歎)し地獄の苦を増長せしむる。譬<sup>へ</sup>ばつみ(罪)ふかき者を口を  
ふさい(塞)でさうもん(糾問)しはれ(應)物のの口をわけずしてやま(憚)するがご  
とし。しかるに今の御消息に云、いきて候し時よりもなをいろしくかたち

もろむせずと云云。天台ノ云、白白<sup>ハ</sup>譬<sup>フ</sup>天<sup>ニ</sup>。大論ニ云、赤白端正者、得<sup>ル</sup>天上<sup>ニ</sup>云  
云。天台大師御臨終ノ記ニ云、色白<sup>シ</sup>。玄奘三藏御臨終を記<sup>シ</sup>云、色白<sup>シ</sup>。一代聖  
教を定<sup>ム</sup>る名目ニ云、黒業は六道にとどまり白業は四聖となる。此等の文證と  
現證をもんてかんがへて候に。此人は天に生せるかはた又法華經の名號を臨  
終に二反となうと云云。法華經の第七の卷ニ云、於<sup>テ</sup>我滅度、後<sup>ニ</sup>應<sup>ニ</sup>受<sup>テ</sup>持<sup>ス</sup>此經<sup>ヲ</sup>  
是<sup>ノ</sup>人於<sup>テ</sup>佛道<sup>ニ</sup>決定<sup>シ</sup>無<sup>ク</sup>有<sup>レ</sup>疑<sup>ヒ</sup>云云。一代の聖教いづれもいづれもをろかな  
る事は候はず。皆我等が親父大聖教主釋尊の金言也皆眞實也皆實語也。其中に  
をいて又小乘大乘顯教密教權大乘實大乘あいわかれて候。佛説と申<sup>ス</sup>は二天三  
仙外道道士の經經にたいし候へば此等は妄語佛説は實語にて候。此實語の中  
に妄語あり實語あり綺語もあり惡口もあり。其中に法華經は實語の中の實語  
なり眞實の中の眞實なり。眞言宗と華嚴宗と三論と法相と俱舍 成實と律宗と  
念佛宗と禪宗等は實語の中の妄語より立<sup>テ</sup>出<sup>タ</sup>せる宗宗なり。法華宗は此等の  
宗宗にはにるべくもなき實語なり。法華經の實語なるのみならず一代妄語の  
經經すら法華經の大海に入りぬれば法華經の御力にせめられて實語となり候。  
いわうや法華經の題目をや。白粉の力は漆<sup>を</sup>變<sup>シ</sup>て雪のごとく白くなす須

彌山に近づく衆色は皆金色なり。法華經の名號を持つ人は一生乃至過去遠劫の黒業の漆變じて白業の大善となる。いわゆるや無始の善根皆變じて金色となり候なり。しかれば故聖靈最後臨終に南無妙法蓮華經ととなへさせ給しければ。一生乃至無始の悪業變じて佛の種となり給。煩惱即菩提生死即涅槃即身成佛と申。法門なり。申かゝる人のいへの夫妻にならせ給へば又女人成佛も疑なかるべし。若此事虚事ならば釋迦多寶十方分身の諸佛は妄語の人大妄語の人悪人也。一切衆生をたばらがして地獄にねとす人なるべし。提婆達多は寂光淨土の主となり教主釋尊は阿鼻大城のほのを(炎)にむせび給。日月は地に落ち大地はくつがへり河は逆に流れ須彌山はくだけをつべし。日蓮が妄語にはあらず十方三世の諸佛の妄語也。いかでか其義候べきところをばへ候へ。委は見參の時申すべく候。

七月十四日

日蓮花押

妙法尼御前申させ給へ

明治三十六年十二月十七日池上本門寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ此章大本七丁右初行「默き」ヨリ全八行ノ「論師」マテ及十一丁右二行「女人」已下失セリ今七紙ヲ存ス(海素、文雅度記)

○千日尼御前御返事

啓二八二〇

鈔一八一四

註一五一四

語三三八

拾五一

扶一〇七五

弘安元年太歲 戊寅七月六日佐渡國より千日尼と申人。同日本國甲州波木井郷身延山と申深山へ同夫阿佛房を使として送り給御文云。女人の罪障はいかがと存候へとも御法門に法華經は女人の成佛をささとするがと候しを萬事はたのみまいらせ候て等云云。夫法華經と申候御經は誰れ佛の説給て候がともひ候へば。此の日本國より西漢土より又西流沙葱嶺と申よりは又はるか西月氏と申國に淨飯王と申ける大王の太子。十九の年位をすてらせ給て檀どく山と申山に入り御出家。三十にして佛とならせ給て身は金色と變じ神は三世をかみさせ給。すぎにし事來べき事かかみ(鏡)にかけさせ給てればせし佛の。五十餘年が間一代一切經經を説かかせ給。此一切の經經佛の滅後一千年が間月氏國にやうやくひろまり(弘布)候しかどもいまだ漢土日本國等へは來り候はず。佛滅度後一千十五年と申せしに漢土へ佛法渡りはじめて候しかども。又いまだ法華經はわたり給はず。佛法漢土にわたりにて二百餘年に及んで月氏と漢土との中間に龜茲國と申國あり。彼國の内は鳩摩羅(鳩)三藏と申せし人の御弟子に鳩摩羅什と申せし人彼國より月氏

に入。須利耶蘇磨三藏と申せし人に此法華經をさづかり給ひき。其授け經ヲし時ノ御語ニ云、此法華經は東北の國に縁ふかすと云云。此御語を持つて月氏より東方漢土へはわたし給ひしなり。漢土には佛法わたりて二百餘年後秦王の御宇に渡りて候き。日本國には人王第三十代欽明天皇の御宇治十三年壬申十月十三日辛酉日此より西百濟國と申す國より聖明皇日本國に佛法をわたす。此は漢土に佛法わたりて四百年佛滅後一千四百餘年也。其中にも法華經はましまししかども人王第三十二代用明天皇の太子聖德太子と申せし人。漢土へ使をつかわして法華經をとりよせまいらせて日本國に弘通し給ひき。うれりこのかた七百餘年なり佛滅度後すでに二千二百三十餘年になり候上。月氏漢土日本、山山河海海里遠くへだたり人人心國各各別別にして語かわりしなごとなれば。いかでか佛法の御心をば我等凡夫は辨へ候べき。ただ經經の文字を引合せてころ知べきに。一切經はやうやうに候へども法華經と申す御經は八卷まします流通に普賢經序分、無量義經各一卷已上。此御經を開き見まいらせ候へば明かなる鏡をもつて我が面を見るがごとし。日出て草木の色を辨へるににたり。序品の無量義經を見まいらせ候へば四十餘年

未顯眞實と申す經文あり。法華經の第一の卷方便品の始に世尊、法久後、要當説眞實と申す經文あり。第四の卷、寶塔品には妙法華經皆是眞實と申す明文あり。第七の卷には舌相至梵天と申す經文赫赫たり。其外は此經より外のさきのち(前後)ならべる經經をば星に譬へ江河に譬へ小王に譬へ小山に譬へたり。法華經をば月に譬へ日に譬へ大海大山大王等に譬へ給へり。此語、私の言には有らず皆如來の金言也十方の諸佛の御評定の御言也。一切の菩薩二乘梵天帝釋今の天に懸りて明鏡のごとくにまします。日月も見給ひき聞給き其日月の御語も此經にのせられて候。月氏漢土日本國のふるき神たちも皆其座につらなり給ひし神神なり。天照太神八幡大菩薩熊野すずか等の日本國の神神もあらひ給へばからず。此經文は一切經に勝れたり地走る者の王たり師子王のごとし空飛ぶ者の王たり鷲のごとし。南無阿彌陀佛經等はさじ(維)のごとし兎のごとし。鷲につかまれては涙をながし師子にせめられては腸わたをたつ。念佛者律僧禪僧眞言師等又かくのごとし。法華經の行者に値ぬればいろを失と魂をけすなり。かゝるいみじき法華經と申す御經はいかなる法門ぞと申せば。一、卷方便品よりうちはじめて菩薩二乘凡夫皆佛にな

り給うやうをとかれて候へどもいまだ其しるしなし。設たゞば始はたる客人まろが相貌すがたうるわしくして心もいさぎよく口もさいて候へばいふ事疑うたがひなければいさぎも見ぬ人なればいまだあらわれたる事なければ語のみにては信まがたきかかし。其時語にまかせて大なる事度度あひ候へば。さては後の事もたのもしなんと申まがかし。一切信まして信せられざりしを第五ノ卷に即身成佛と申ま一經第一の肝心あり。譬へばくろき物を白くなす事漆うるしを雪となし不淨を清淨になす事濁水に如意珠を入れたがごとし。龍女と申せし小蛇こまはを現身まがに佛になしてましましき。此時こり一切の男子の佛になる事をば疑うた者は候はざりしか。されば此經は女人成佛を手本としてとかれたりと申ま。されば日本國に法華經の正義を弘通し始はまさせし叡山ノ根本傳教大師の此事ことヲ釋し給たまには。能化所化俱とも無し歴劫れき妙法經力即身成佛等。漢土の天台智者大師法華經の正義をよみはじめ給たましには陀經だ、但記だ男おとこ不記ふ女をんな乃至今經な皆記みな等云云。此は一代聖教の中には法華經第一一法華經の中には女人成佛第一なりとことわらせ給たまにや。されば日本、一切の女人は法華經より外の一切經には女人成佛せずと嫌きらひとも。法華經にだにも女人成佛ゆるされなばなにかくるしかるべき。

しかるに日蓮はうけがたくして人身をうけ値たがたくして佛法に値た奉る。一切の佛法の中に法華經に値たまいらせて候。其恩徳をもへば父母の恩國主の恩一切衆生の恩なり。父母の恩の中に慈父をば天に譬へ悲母をば大地に譬へたりいづれもわけがたし。其中にも悲母の大恩ことにほほう報じがたし。此こを報せんとをもうに外典の三墳五典孝經等等にて報せんとをもへば現在をやしないて後世をたすけがたし。身をやしない魂をたすけず。内典ない佛法に入いて五千七千餘卷、小乘大乘は女人成佛かたければ悲母の恩報おんがたし小乗は女人成佛一向に許ゆるされず。大乘經は或は成佛或は往生を許ゆるたるやうなれども佛の假言かりごとにて實事なし。但法華經計かこり女人成佛 悲母の恩を報ずる實の報恩經にて候へと見候しかば。悲母の恩を報せんために此經の題目を一切の女人に唱なげせんと願す。其こに日本國の一切の女人は漢土の善導 日本、慧心 永觀法然等にすかされて。詮とすべきに。南無妙法蓮華經をば一國の一切の女人一人も唱なげることなし。但南無阿彌陀佛と一日に一返十返百千萬億乃至三萬十萬反一生が間晝夜十二時に又陀事なし。道心堅固なる女人も又惡人なる女人も彌陀念佛を本とせり。わづかに法華經をこととするやうなる女人も月まつま

でのでずさび(手遊)をもかきしき男のひまに心ならず心ざしなき男にあうがごとし。されば日本國の一切の女人法華經の御心みこころに叶なは一人もなし。我悲母わがひつち詮とすべき法華經をば唱なへずして彌陀に心をかけば。法華經は本ならねばたすけ給たまへからず。彌陀念佛は女人たすくるの法にあらず必地獄に墮お給たまへし。いかんがせんとなげさし程に我悲母をたすけんがために。彌阿念佛は無間地獄の業なり五逆にはあらざれども五逆にすぎたり。父母を殺ころす人は其の肉身をばやぶれども父母を後生に無間地獄には入いれず。今日本國の女人は必ず法華經にて佛になるべきを。たばらかして一向に南無阿彌陀佛になしぬ。惡ならざればすかされぬ。佛になる種たねならざれば佛にはならず。彌陀念佛の小善をもつて法華經の大善を失うす。小善の念佛は大惡の五逆にすぎたり。譬へば承平の將門まさかたは關東八箇國をうたへ(打平)天喜の貞任さだらうは奥州おくしゅううちとどめし。民を王へ通せざりしかば朝敵となりてついにほろばされぬ。此等は五逆にすぎたる謀反なり。今日本國の佛法も又かくのごとし色かわれる謀反なり。法華經は大王 大日經觀無量壽經眞言宗淨土宗禪宗律僧等は彼彼の小經によて法華經の大怨敵となりぬるを。日本、一切の女人等は我が心のをろかなるを

ば知しらずして。我をたすくる日蓮をかたきとをもひて。大怨敵たる念佛者禪律眞言師等を善知識とあやまてり。たすけんとする日蓮かへりて大怨敵とをもわるるゆへに。女人こがりて國主に讒言して伊豆國へながせし上又佐渡國へながされぬ。こゝに日蓮願ねがふ云いふ日蓮は全あくまりなし。設ただしては僻事へきじなりとも日本國の一切の女人を扶たと願ねがせる志はすてがたかるべし。何況いかんに法華經のまゝに申ますを一切の女人等信まずばさては有あるべきにかへりて日蓮をうたする。日蓮が僻事へきじか釋迦多寶十方諸佛菩薩二乘梵釋四天等いかに計はからず。日蓮僻事へきじならば其義を示し給へ。ことには日月天、眼前の境界なり。又佛前にしてきかせ給へる上法華經の行者をあたまんものをば頭あたま破やぶ作なして七分しちぶん等と誓ちかせ給へて候へばいかんが候べきと。日蓮強盛にせめまいらせ候ゆへに天此國を罰なす。ゆへに此疫病出現せり。佗國より此國を天をばせつけて責とがらるべきに兩方の人あまた死しすべきに。天の御計みけいとしてまづ民を滅ほして人の手足を切きがごとくして大事の合戦なくして。此國の王臣等をせめかたふけて法華經の御敵を滅ほして正法を弘通せんとなり。而しかに日蓮佐渡國へ流ながされたりしかば。彼國の守護等は國主の御計みけいに隨まりて日蓮をあたむ萬民は其の命いのちに隨まり。念佛

者禪律眞言師等は鎌倉よりもいかにもして此へわたらぬやう計と申すのかわし。極樂寺の良觀房等は武藏ノ前司殿の私ノ御教書を申して弟子に持たせて日蓮をあたみなんとせしかば。いかにも命たすかるべきやうはなかりしに。天の御計はさてをさぬ。地頭地頭念佛者念佛者等日蓮が庵室に晝夜に立ちりいてかよ(通)う人もあるをまどわさんとせめしに。阿佛房にひつ(櫃)をしれたわ(負)せ夜中に度度御わたりありし事いつの世にかわすらむ。只悲母の佐渡ノ國に生れかわりて有るか。漢土に沛公と申せし人王ノ相有りとて。秦ノ始皇の勅宣下云、沛公打てまいらせん者には不次の賞を行つべし。沛公は里ノ中には隠れがたなくして山に入りて七日二七日なんど有なり其時命すでにをわりぬべかりしに。沛公の妻女呂公と申せし人ころ山中を尋て時時命をたすけしが。彼は妻なればなさけ(情)すてがたし。此は後世ををばせすばなにしにかかくはれはすべき。又其故に或は所ををい或はくわれ(科料)をひき或は宅をとられなんとせしに。ついにとをらせ給ぬ。法華經には過去に十萬億の佛を供養せる人ころ今生には退せぬとわみへて候へ。されば十萬億供養の女人なり。其上人は見る眼ノ前には心ざし有ともさしはなれぬれば。心はわすれずともさて

ころ候に。去文永十一年より今年弘安元年まではすでに五箇年が間此山中に候に。佐渡の國より三度まで夫をつかはす。いくら後どの御心ざしう大地よりもあつぐ大海よりもふかき御心ざしうかし。釋迦如來は我薩埵王子たりし時うへ(飢)たる虎に身をかい(飼)し功德。戸毗王とありし時鳩のため(爲)に身をかへし功德をば。我末の代かくのごとく法華經を信せん人にゆづらむとこそ。多寶十方の佛の御前にては申せ給しか。其上御消息に云、尼が父の十三年は來ル八月十一日又云、せに(錢)一貫もん等云云。あまりの御心ざしの切に候へば。ありぬて御はしますに隨て法華經十卷をくりまいらせ候。日蓮がこい(戀)しくをばせん時は學乘房によませて御ちやうもん(聽聞)あるべし。此御經をしるしとして後生には御たづねあるべし。抑去年今年のありさまはいかにかならせ給ぬらむと。をばつかなさに法華經にぬんころに申候つれどもいまだいふか(不善)しく候つるに。七月二十七日申時に阿佛房を見つけて。尼とせんはいかに。ころ入道殿はいかにとまづといて候つればいまだやまず。ころ入道殿は同道にて候つるがわせ(早稱)はすでにちかづきぬ。こ(手)わなしいかんがせんとてかへられ候つるとかたり候し時ころ。盲目の者、



眼のあきたる死シ給へる父母の閻魔宮より御をどづれの夢の内に有レをゆめに  
て悦ッがごとし。あわれあわれふしぎ(不思議)なる事かな。此もかまくら(鎌倉)  
も此方の者は此病にて死スる人はすくなく候。同シ船にて候へばいづれもたす  
かるべしどもをばへず候つるに。ふねやぶれてたすけふねに値ルるか。又龍  
神のたすけにて事なく岸へつけるかところ不思議がり候へ。さわ(谷)の入道  
の事なげくよし尼ニせんへ申ッつたへさせ給ヘ。ただし入道の事は申シ切り候  
しかばをもひ合せ給ラむ。いかに念佛堂ありとも阿彌陀佛は法華經のかたき  
をばたすけ給ッべからず。かへりて阿彌陀佛の御かたきなり。後生惡道に墮リ  
てクい(悔)られ候らむ事あさまし。ただし入道の堂のらう(廊)にていのちをた  
びたすけられたりし事ころ。いかにすべしどもをばへ候はね。學乘房を  
もつてはか(毒)につねづね法華經をよませ給ヘとかたらせ給ヘ。うれも叶ッべ  
しと。はをばぬす。さても尼のいかにたよりなかるらむとなげ(歎)くと申ッ  
たへさせ給ヘ候へ。又又申スべし。

七月二十八日

日 蓮花押

佐渡國府阿佛房尼御前

明治三十五年八月一日佐渡國阿佛ノ妙賞寺ニ於テ御眞蹟ヲ以テ拜照シ奉ル但シ此章全ク二十三紙  
ナリ(稻田海素度記)

○彌源太入道殿御消息 敬上四〇 考四八

一日の御歸路をばつかなく候つる處に御使悦ヒ入ッて候。御用事の御事共は伯  
耆殿の御文に書カせて候。然に道隆の死シて身の舍利となる由の事。是は何と  
も人不知ラ用トまじく候へば兎角申ッて詮は候はず。但し佛の以前に九十五種  
の外道ありき各各是を信じて佛に成ると申ス。又皆人も一同に思ヒて候し程  
に。佛世に出テさせ給ヒて九十五種は皆地獄に墮リたりと説せ給ヒしかば。五天  
竺の國王大臣等は佛は所詮なき人也と申ス。又外道の弟子どもも我師の上ニ  
云レれて悪心をかき候。竹杖外道と申ス。外道ノ目連尊者を殺せし事是也。苦得  
外道と申せし者を佛記して云ッ七日の内に死して食吐鬼ト成ルべしと説せ給ヒ  
しかば外道瞋リをなす。七日の内に食吐鬼ト成リたりしかば其を押し隠して得  
道の人の御舍利買ッべしと云ヒき。其より外に不思議なる事不知ラ數ヲ。但し道  
隆が事は見ぬ事にて候へば如何様に候やらん。但し弘通するところの説法は

彌源太入道殿御消息 (遺二五ノ二一)

千七百六十三

(外九ノ二十九)

共に本權教より起りて候しを。今は教外別傳と申して物にくるひて我と外道の法と云々歟。其上建長寺は現に眼前に見へて候。日本國の山寺の敵とも可謂様なれども事を御威によせぬれば皆人恐れて不云。是は今生を重しして後生は輕する故也。されば現身に彼寺の故に亡國すべき事當りぬ。日蓮は度知つて日本國の道俗の科を申せば是は今生の禍後生の福也。但し道隆の振舞は日本國の道俗知て候へども。上を畏れてこそ尊み申せ又内心は皆らとみて候らん。佛法の邪正こそ愚人なれば知らずとも世間の事は眼前なれば知ぬらん。又一は不用とも人の骨の舍利と成る事は易く知れ候事にて候。佛の舍利は火にやけず水にぬれず金剛のかなづち(鑿)にてうてども不摧。一くたきして見よかしあらずしあらずし。建長寺は所領を取られてまどひたる男どもの。入道に成りて四十五十六なんどの時走り入て候が用は無之。道隆がかげ(隆)にしてすぎぬるなり。云々に甲斐なく死ぬれば不思議にて候をかくして暫くもすぎさ。又は日蓮房が存知の法門を人に疎ませんところたばかりて候らめ。あまりの事ともなれば誑惑顯れなんとす。但ししばらくぬら(忍)じて御覽せよ。根露れぬれば枝か(枯)れ源渴けば流盡ると申事あり。

恐恐謹言。

弘安元年戊寅八月十一日

日蓮花押

彌源太入道殿

○妙心尼御前返事

微上ノ考四三

あわしかき(泡消柿)籠なすび(茄子)一給候畢。入道殿の御所勞の事。唐土に黃帝扁鵲と申せしくすしあり天竺に持水耆婆と申せしくすしあり。これらは今の世のたから末代のくすしの師也。佛と申せし人はこれには似るべくもなきらみじきくすし也。この佛不死の薬をとかせ給へ今今の妙法蓮華經の五字是也。しかもこの五字をば閻浮提人病之良薬とてかかれて候へ。入道殿は閻浮提の内日本國の人也。しかも身に病をうけられて候病之良薬の經文顯然也。其上蓮華經は第一の薬也。はるり(波瑠璃)王と申せし惡王佛のしたしき女人五百餘人を殺して候しに。佛阿難を雪山につかはして青蓮華をとりよせて身にふれさせ給しかば。よみかへ(蘇生)りて七日ありて初利天に生にき。蓮華と申花はかゝるいみじき徳ある花にて候へば佛妙法にたとへ給

へり。又人の死事はやまひにはよらず。當時のゆきつしま(壹岐對馬)のものどもは病なけれども。みなみなむこ(蒙古)人ひとに一時にうちころされぬ。病あれば死しべしといふ事不定也。又このやまひは佛の御はからひか。るのゆへは淨名經涅槃經には病ある人佛になるべきよしとかれて候。病によりて道心はをこり候歟。又一切の病の中には五逆罪と一闍提と謗法をこりねもき病とは佛はいた傷ませ給へ。今の日本國の人は一人もなく極大重病あり所謂大謗法の重病也。今の禪宗念佛宗律宗眞言師也。これらはあまりに病れもきゆへに我身にもをばへず人もしらぬ病也。この病のこうするゆへに四海のつわもの(戎兵)ただいま來きなば王臣萬民みなしづみなん。これをいきてみ候はんまなこ(眼)ころあさましく候へ。入道殿は今生にはいたく法華經を御信用ありとは見候はねども。過去の宿習のゆへかのもよをしによりてこのなが病にしづみ日日夜夜に道心ひまなし。今生につくりをかせ給へし小罪はすでにさへ候ぬらん。謗法の大惡は又法華經に歸きしぬるゆへにさへさせ給へべし。ただいまに靈山にまいらせ給へなば日いでて十方をみるがごとくうれしく。とくしに(死)ぬるものかなとうちよろこび給へ候はんずらん。中有ちゆうの道にいかなる事

もいできたり候はば。日蓮がでし(弟子)也となのらせ給へ。わずかの日本國なれどもさがみ(相模)殿のうちのものど申まをば。さうなくねるる事候。日蓮は日本第一のふたう(不堂)の法師。ただし法華經を信ま候事は一闍浮提第一の聖人也。其名は十方の淨土にきこぬ。定天地もしりぬらん。日蓮が弟子となのらせ給はばいかなる惡鬼等なりとも。よもしらぬよしは申さじとればすべし。さては度度の御心ざし申まばかりなし。恐恐謹言。

さる(鱈)は木をたのむ。魚は水をたのむ。女人はれどこをたのむ。わかれのをしきゆへにかみ(髮)をりりうで(袖)をすみにうめぬ。いかでか十方の佛もあはれませ給はざるべき。法華經もすてさせ給へべきとたのませ給へたのませ給へ。

八月十六日

日蓮花押

妙心尼御前御返事

明治三十六年一月十六日富士大石寺ニ於テ興師ノ御寫ヲ以テ對校ス(稻田海素記)

○妙法比丘尼御返事

啓二四八〇 鈔一四六 註一五一 語二五二 記上三四 拾三三七 扶九一五

音下一四

御文云々たふかたびら(太布離)一、あによめ(娘)にて候女房のつたうと云云。又  
れはり(尾張)の次郎兵衛殿六月二十二日に死なせ給々と云云。付法藏經と申す經  
は佛我滅後に我法を弘ふべきやうを説せ給て候。其中に我滅後正法一千年が  
間次第に使をつかはすべし。第一は迦葉尊者二十年第二は阿難尊者二十年  
第三は商那和修二十年乃至第二十三は師子尊者なりと云云。其第三の商那  
和修と申す人の御事を佛の説せ給て候やうは。商那和修と申すは衣の名なり此  
人生時表をき(著)て生じて候き不思議なりし事なり。六道の中に地獄道より人  
道に至るまでは何なる人も始はあかはだか(赤裸)にて候に天道より衣をきて  
生候へ。たとひ何なる賢人聖人も人に生るるならひは皆あかはだかなり。一  
生補處の菩薩尚はだかにて生れ給へり何況其外をや。然に此人は商那衣  
と申すいみじき衣はまとはれて生じさせ給しが。此衣は血もつかずけがるる  
事もなし。譬ば池に蓮のをひをし(藕)の羽の水にぬれざるが如し。此人次第に  
生長ありしかば又此衣次第に廣く長くなる。冬はあつ(厚)く夏はす(薄)く春

は青(秋)は白くなり候し程に。長者にてをばせしかば何事もともし(乏)から  
ず。後には佛の記しをき給し事たがふ事なし。故に阿難尊者の御弟子となり  
せ給て御出家ありしかば此衣變じて五條七條九條等の御袈裟となり候き。か  
かる不思議の候し故に佛の説せ給しやうは。乃往過去阿僧祇劫の當初此人  
は商人にて有りしが。五百人の商人と共に大海に船を浮へてあきなひをせし程  
に海邊に重病の者あり。しかれども臥支佛と申して貴人なり。先業にてや有  
けん病にかかりて身やつれ心をば(亂)れ不淨にまとはれてをばせしを。此商  
人あはれみ奉りてねんごろに看病して生じまいらせ。不淨をすゝぎすてて纒  
布の商那衣をきせまいらせありしかば。此聖人悦して願云、汝我を助けて身  
の恥を隠せり此衣を今生後生の衣とせんとてやがて涅槃に入り給き。此功德  
によりて過去無量劫の間人中天上に生れ生るる度ごとに。此衣身に隨て離  
るる事なし。乃至今生に釋迦如來の滅後第三の付囑をうけて商那和修と申す  
聖人となり。摩突羅國の優留茶山と申す山に大伽藍を立てて無量の衆生を教化  
して佛法を弘通し給し事二十年なり。所詮商那和修比丘の一切のたのしみ  
不思議は皆彼衣より出生せりところ説れて候へ。而に日蓮は南閻浮提日本